

# 柳之御所遺跡

第69次発掘調査概報

平成22年3月

岩手県教育委員会

# 柳之御所遺跡

——第69次発掘調査概報——

## 序

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、平安時代末期の約100年間にわたり北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏の残した遺跡であり、特別史跡中尊寺境内、特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡、特別史跡無量光院跡と並び、当時の平泉の核をなしていた遺跡の一つであります。

本遺跡は、昭和63年から(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会が実施した一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道4号改修平泉バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査により、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・堀跡などが確認され、おびただしい量のかわけや墨画資料、各種木製品など、質・量ともに卓越した遺物が出土いたしました。これらの豊富な遺構・遺物により、本遺跡が『吾妻鏡』にみられる「平泉館」であることが指摘されています。

このような経過のなかで、遺跡に対する建設省(現国土交通省)のご理解により、平成5年には遺跡の保存が決定し、平成9年3月に『柳之御所遺跡』として国の史跡に指定されました。県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、将来的には史跡公園として整備し、この遺跡を後世に伝えるとともに広く活用していきたいと考え、平成10年度から本格的な発掘調査を実施してきました。今年度の調査は第4次三ヵ年計画の3年目の調査となり、多くの成果が得られています。平成17年度から本格的に始まった史跡公園に係る整備工事も進んでおり、史跡公園は、平成22年の春に公開を予定しております。

また、平成13年4月に本遺跡を含む「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに登載されたことを受け、本登録に向け官民一体となった取り組みをすすめて参りました。平成23年の世界遺産委員会審議を目指して、活動を展開している所であります。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成に当たり、ご指導・ご協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方、文化庁記念物課、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所をはじめ関係各位に深く感謝申し上げますとともに、本書が平泉文化研究発展の一助になれば幸いです。

平成21年3月

岩手県教育委員会  
教育長 法 貴 敬

## 例 言

1. 本書は、岩手県教育委員会が平成20年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る、史跡柳之御所遺跡の発掘調査の概要報告である。調査期間は平成20年5月7日から12月10日である。
2. 本事業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が主体となり、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。
3. 遺構の呼称は、昭和63年度に(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用し、本書でも記載している。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。  
S A : 塀・柱列 S B : 掘立柱建物 S C : 道路状遺構 S D : 溝・堀 S E : 井戸・井戸状遺構  
S G : 園池 S K : 土坑・柱穴の一部 S X : その他 S I : 竪穴住居 P : 柱穴  
例 : 68SK1 第68次調査の第1号土坑
4. 図版、写真図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については一部を除いて1/3を基本にしておりスケールを図中に表示した。遺構遺物写真については縮尺不定である。
5. 本書の編集・執筆は生涯学習文化課柳之御所班で協議の上、櫻井・西澤が行い、編集は西澤が行った。執筆分担は、各項目の文末に記載している。
6. 調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備指導委員会等で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。
7. 遺構の埋土観察、遺物の色調観察は『新版標準土色帖』を参考にした。
8. 自然科学分析については古代の森研究舎及び岩手県立博物館への分析委託により実施したものである(Ⅲ章)。付章1については平泉遺跡群調査整備指導委員会委員佐藤信先生に玉稿を賜った。また、付章2については株式会社文化財保存計画協会の協力を得た。
9. 後述する平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方をはじめとして、下記の方々・機関の御協力を得た。  
伊藤博幸 井上雅孝 岡田清一 木村淳一 木本元治 高妻洋成 国生 尚 島田祐悦 信太正樹  
羽柴直人 東本茂樹 本沢慎輔 前川佳代 松本秀明 宮本長二郎 室野秀文 八木光則  
八重樫忠郎 岩手県立博物館 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 奈良文化財研究所  
平泉町教育委員会 平泉町文化財遺産センター (50音順:敬称略)
10. 本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は、岩手県教育委員会が保管している。

# 目 次

I 序 論	1
1. 調査経緯	1
2. 指導委員会	2
3. 調査計画	2
4. 今年度の調査	5
II 調査内容	12
1. 調査の概要	12
2. 検出遺構	12
(1) 堀跡・大溝跡	12
(2) 橋 跡	22
(3) 土 坑	26
(4) 整 地 層	27
(5) 柱穴・その他の遺構	27
3. 出土遺物	28
(1) 概 要	28
(2) 土器・陶磁器類	28
(3) 木簡・木製品・漆製品	39
(4) 瓦	52
(5) 石 製 品	52
(6) 金 属 製 品	54
III 自然科学分析	55
IV 総 括	65
追記 柳之御所遺跡出土の漆紙について	76
付章1 69次調査出土木簡について	77
付章2 柳之御所遺跡出土壁材について(補遺)	78

## 図版目次

- 図版1 遺構 調査区全景1
- 図版2 遺構 調査区全景2・3
- 図版3 遺構 21SD1 検出状況・作業状況
- 図版4 遺構 21SD1 完掘状況
- 図版5 遺構 21SD1 断面の状況
- 図版6 遺構 21SD2 検出状況
- 図版7 遺構 21SD2 全体写真
- 図版8 遺構 21SD2 断面の状況
- 図版9 遺構 21SD2 断面の状況
- 図版10 遺構 69SX3 部材出土状況
- 図版11 遺構 69SX3 検出状況・断面の状況
- 図版12 遺構 整地層の範囲・整地層の断面
- 図版13 遺構 21SX4 全景・断面の状況
- 図版14 遺構 21SX3 断面の状況・21SX35 完掘状況
- 図版15 遺物 かわらけ①
- 図版16 遺物 かわらけ②
- 図版17 遺物 かわらけ③
- 図版18 遺物 かわらけ④
- 図版19 遺物 渥美窯産陶器①
- 図版20 遺物 渥美窯産陶器②
- 図版21 遺物 常滑窯産陶器①
- 図版22 遺物 常滑窯産陶器②
- 図版23 遺物 須恵器系陶器・須恵器・輸入陶磁器
- 図版24 遺物 木製品①
- 図版25 遺物 木製品②
- 図版26 遺物 木製品③
- 図版27 遺物 木製品④
- 図版28 遺物 木製品⑤
- 図版29 遺物 部材①
- 図版30 遺物 部材②
- 図版31 遺物 瓦・石製品・鉄製品
- 図版32 自然遺物 出土した花粉化石と珪藻化石
- 図版33 自然遺物 出土した種実

## 挿図目次

図1	平泉遺跡群調査整備指導委員会組織図	3
図2	調査区位置図(1:2,000)	4
図3	表土除去作業	7
図4	調査風景	7
図5	現地説明会の様子	7
図6	土器洗浄作業	7
図7	遺構配置図(1:400)	11
図8	21SD1平面図(1:250)	13
図9	21SD1断面図(1:60)	14
図10	21SD2エレベーション図(1:100)	15
図11	21SD2平面図(1:250)	17
図12	21SD2断面図1(1:60)	18
図13	21SD2断面図2(1:60)	19
図14	21SD2断面図3(1:60)	20
図15	21SX3平面図・断面図(1:200、1:50)	21
図16	21SX4平面図・断面図(1:250、1:50)	23
図17	21SX35平面図・断面図(1:100、1:50)	24
図18	21SX35エレベーション図(1:100)	25
図19	整地層範囲図(1:250)	26
図20	整地層断面図(1:50)	27
図21	21SD1出土土器類実測図1(1:3)	28
図22	21SD1出土土器類実測図2(1:3)	29
図23	21SD1出土土器類実測図3(1:3)	30
図24	21SD1出土土器類実測図4(1:3)	31
図25	21SD1出土土器類実測図5(1:3)	32
図26	21SD1過去の出土遺物例	32
図27	21SD2出土土器類実測図1(1:3)	34
図28	21SD2出土土器類実測図2(1:3)	35
図29	21SD2出土土器類実測図3(1:3)	36
図30	その他遺構出土土器実測図(1:3)	37
図31	包含層出土土器類実測図1(1:3)	37
図32	包含層出土土器類実測図2(1:3)	38
図33	遺構外出土土器類実測図(1:3)	39
図34	木製品実測図1(1:3)	40
図35	木製品実測図2(1:3)	41
図36	木製品実測図3(1:3)	43
図37	木製品実測図4(1:3)	44

図38	木製品実測図 5 (1 : 3).....	45
図39	木製品実測図 6 (1 : 3).....	46
図40	木製品実測図 7 (1 : 3).....	47
図41	木製品実測図 8 ・漆製品実測図 1 (1 : 3).....	48
図42	漆製品実測図 2 (1 : 3).....	49
図43	橋部材実測図 1 (1 : 8).....	50
図44	橋部材実測図 2 (1 : 8).....	51
図45	瓦・石製品・金属製品実測図(1 : 2、1 : 3).....	53
図46	放射性炭素年代から歴年代への較正.....	58
図47	Aトレンチ9層の主要花粉分布図 .....	60
図48	Aトレンチ9層の主要珪藻分布図 .....	62
図49	21SD1・21SD2通し断面図(1 : 150) .....	66
図50	漆紙(参考資料).....	76
図51	69SX3出土木簡実測図(2 : 3) .....	77
図52	69SX3出土木簡写真.....	77
図53	土壁出土例.....	80

## 挿表目次

表 1	平泉遺跡群調査整備指導委員会委員名簿.....	3
表 2	発掘調査年次計画 1 .....	8
表 3	発掘調査年次計画 2 .....	9
表 4	指導委員会協議内容一覧 .....	10
表 5	Aトレンチ9層出土分析試料の堆積物の特性 .....	55
表 6	柳之御所遺跡第69次調査試料のAMS法による放射性炭素年代測定結果 .....	57
表 7	21SD1堀跡Aトレンチ9層より産出した花粉化石の一覧表 .....	59
表 8	21SD1堀跡Aトレンチ9層より産出した種実 .....	61
表 9	Aトレンチ9層の珪藻分析結果一覧表 .....	63
表10	出土遺物観察表(かわらけ).....	67
表11	出土遺物観察表(国産陶器).....	69
表12	出土遺物観察表(輸入陶磁器).....	72
表13	出土遺物観察表(瓦).....	72
表14	出土遺物観察表(土製品).....	72
表15	出土遺物観察表(木製品・漆製品).....	73
表16	出土遺物観察表(石器・石製品).....	76
表17	出土遺物観察表(金属製品).....	76
表18	土壁総量一覧表.....	78



# I 序 論

## 1 調 査 経 緯

岩手県教育委員会では、柳之御所遺跡が平成9年に国の史跡に指定されたことから、当遺跡を史跡公園として整備し保存活用を図るため、文化庁及び柳之御所遺跡調査研究指導委員会(現平泉遺跡群調査整備指導委員会)の指導助言を得て、平成10年度から主に未調査区域を対象とした内容確認の発掘調査を計画し、継続して行っている。調査は三ヵ年を1サイクルとし第I期整備対象区域である堀内部地区を中心に実施している。

平成10年度調査(第49次)は、過去の調査で検出されていた園池・中心建物群を囲む堀跡の確認を目的に実施した。北上川に面する東辺の堀跡の追跡を行った結果、それまで検出されていた部分から7mほど北に延長することが確認された。しかし、さらなる延長については検出されなかった。

平成11年度調査(第50次)は、園池や大型の建物など堀で囲まれた範囲の周辺を対象に、12世紀代の遺構の広がりや密度を確認することを目的として発掘調査を行った。その結果、12世紀代の遺構が現況の河岸縁まで分布し、柳之御所遺跡の一部が北上川の侵食で失われていることが確認された。また、堀や井戸状遺構の検出、複雑に重複する掘立柱建物などが多数検出され、複数時期にわたって遺跡が営まれたことが明らかになった。「磐前村印」と刻印された銅印と、器表面全体を漆の染み込んだ麻布で被覆されたほぼ完形に近い白磁四耳壺が同一の井戸状遺構から出土した。地名を刻印したと推定される銅印の発見は、奥州藤原氏の統治システムを考察する上で貴重な資料として注目された。

平成12年度調査(第52次)では、園池周辺域の中心建物群とは異なる範囲から、建物の軸線の異なる大型の建物が検出された。これは、時期を異にして大型の建物で構成される複数の地域が存在したことが想定され、柳之御所遺跡の遺構の変遷を考えるうえで重要な課題を提示した。中心域の移動がおこなわれた背景には、平泉あるいは奥州藤原氏内部での何らかの重要な転換期を反映している可能性も考えられる。また、柳之御所遺跡は従来まで遺跡の主体が三代秀衡の治世12世紀第三四半期にあることが指摘されてきたが、新たに12世紀初頭あるいは前葉に位置づけられる土器群が発見されたことで、当遺跡が12世紀前半代初代清衡の時期まで遡ることが明らかにされた。これは、政庁「平泉館」の性格あるいは、奥州藤原氏の平泉での初期の状況を推定させる重要な発見である。

平成13年度調査(第55次)は、新たに園池の北側に大規模な建物の存在が明らかとなり、柳之御所遺跡の中核施設の移動が想定されるようになった。また、初代清衡の時期にあたる12世紀初め頃のかわりがまとまって発見されたほか、竪穴建物(55SX2)や祭祀遺構が確認された。

平成14年度調査(第56次)では、遺跡中核部を囲む2条の堀跡の追跡調査を実施し、遺跡堀内部地区の北部で30数基のトイレ状遺構が集中して検出された。過去の調査で確認されたトイレ状遺構とは分布の様相が異なり、その用途など当時の生活の様子を分析できる資料が発掘された。また、平泉では初めてとなる中国南部の吉州窯産の陶器片も出土し、奥州藤原氏の経済基盤の豊かさを知る手がかりとなった。

平成15年度調査(第57次)は、第23次(平成元年度)の調査で造り替えが確認されていた、園池についての詳細な規模や造成時期の把握及び堀跡の追跡と門跡の確認、高館南側裾部分の遺構分布の確認を目的として調査を実施した。調査の結果、堀跡及び門跡を確認することはできなかったが、園池の造成時期や北半部の汀線が明らかとなった。

平成16年度調査(第59次)は第3次三カ年計画の初年次で、以前から指摘のあった中心建物群の規模や新旧関係の確定を主な目的として調査を行った。建物規模や遺構の切り合い関係などについて一定の見通しを得ることができた。

平成17年度調査(第64次)は園地を対象に、①池に架かる橋、②不明瞭だった池南西部の汀線、③園池東側への施設の広がりを確認する目的で実施した。調査の結果、①橋跡は古段階の園池跡に付随するもので、東西方向に長軸を持ち、桁行7尺(約210cm)間隔、梁行10尺(約300cm)の4間×1間の掘立柱によるものであること、②池南西部は岸と見られる小さな盛り上がりで池底の痕跡を確認し、新段階の園池跡は中島を持つ園池であること、③削平のため残りが悪く、井戸2基、土坑2基、柱穴数基が新たに確認された。

平成18年度調査(第65次)は大型建物跡が集中する中心域西側地区で、塀・柵・門などの遮蔽施設の検出とその付近に位置する掘立柱建物跡の再確認、55SX2の構造把握を目的とした。調査の結果、西側調査区では以前の調査で検出されていた柱穴のほかに新たに柱穴が確認され、5間×2間の総柱建物跡(31SB5)であることが確認された。この建物跡は倉町遺跡(平泉町字倉町所在)で検出され、「高屋」と解釈された建物跡と類似することがわかった。

平成19年度調査(第68次)は、遺跡東端の低地部についての状況を確認することを目的として行った。調査の結果、12世紀から近世の整地層(上位)と12世紀の可能性のある整地層(下位)を確認し、下位の整地層のさらに下層からは、10世紀頃の自然堆積層を確認した。この2面の整地層は、流水による削平を受けており、道路跡等の遺構は確認していない。低地部は12世紀当時においても、周囲に比べ一段低い状況が想定され、南からの道路が延びる可能性は低いと考えられる。また、10世紀の自然堆積層の上に整地層が施され、堀跡や運河などが存在した可能性も低いことがわかった。

平成20年度調査(第69次)は、遺跡南端部の堀跡の状況を把握することを目的として実施した。2条の堀跡を検出したほか、外側の堀より外側に溝跡を確認した。2条の堀跡では、遺構の切り合いから時期差があることを確認したほか、橋部材とみられる材や木簡等が出土した。

## 2 平泉遺跡群調査整備指導委員会 (図1・表1)

岩手県教育委員会では、平成10年度から柳之御所遺跡の内容確認調査を再開するにあたり「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」を設置し、柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査及び調査研究に対して指導助言を得てきた。平成12年に「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに追加登録されたことから、会の名称を「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」に改め、さらに平成15年度は世界遺産本登録に向けたコアゾーン再検討の必要性から「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と改称した。

平成20年度の委員会・専門部会は表4の通り開催した。

## 3 調査計画

柳之御所遺跡の調査は3カ年ずつ計画を立て進めている。平成20年度調査(69次)は第4次三カ年計画の2年目にあたる。第4次三カ年計画は堀跡を中心に発掘調査を行い、堀跡や堀内部地区への導入施設など既往調査の再検証と整備に関わるデータ収集を主な目的として計画されたものである。堀内部地区のこれらの地区は整備対象地区でもあり、具体的な情報を得ることが求められている。

表1 平泉遺跡群調査整備指導委員会委員名簿

平泉遺跡群調査整備指導委員会 (平成20年3月現在)		
氏名	役職	専門部会
入間田宣夫	東北芸術工科大学教授	整備
遠藤セツ子	平泉町観光協会	整備
岡田 茂弘	独立行政法人国立歴史民俗博物館名誉教授	保存・整備
小野 正敏	独立行政法人国立歴史民俗博物館教授	遺構
◎河原 純之	川村学園女子大学教授	
○工藤 雅樹	福島大学名誉教授	遺構・保存
斉藤 利男	弘前大学教授	遺構
佐藤 信	東京大学教授	保存・整備
清水 擴	東京工芸大学教授	遺構
清水 真一	東京芸術大学教授	遺構
関宮 治良	平泉町商工会事務局長	整備
田中 哲雄	東北芸術工科大学教授	保存・整備
田辺 征夫	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所長	遺構
玉井 哲雄	千葉大学教授	遺構
西村 幸夫	東京大学教授	保存
※◎委員長 ○副委員長 遺構：遺構検討部会、保存：保存管理計画検討部会、整備：整備検討部会		

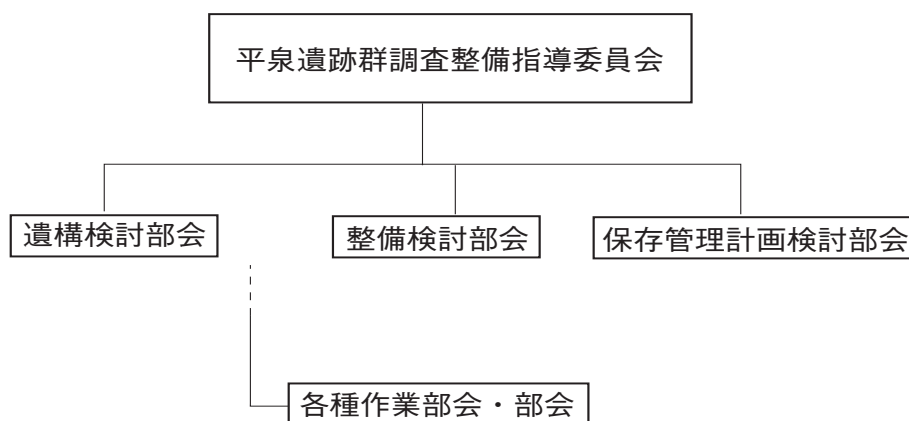


図1 平泉遺跡群調査整備指導委員会組織図



図2 調査区位置図 (1:2,000)

平成21年度は、堀内部地区北端部と南端部の調査を行っており、堀跡や導入施設などを確認すること、北端部の様相を確認することを主な目的としている。この第4次三カ年計画で堀内部地区の調査は中断し、第5次三カ年計画では北端部周辺の堀跡を中心に調査を行い、堀外部地区周辺の調査へと進んでいく予定である。これまでの計画と今後の計画については表2・3のようになる。

## 4 今年度の調査

### (1) 調査体制

〈岩手県教育委員会事務局〉

生涯学習文化課総括課長	大月 光康
文化財・世界遺産課長	中村 英俊
主任主査(柳之御所担当)	北本 哲夫(H21.3.31まで)
主査(柳之御所担当)	沢里 秀利(H21.4.1から)
主任主査(柳之御所担当)	佐藤 嘉広(H20.8.31まで)
文化財専門員(柳之御所担当)	岩渕 計
文化財専門員(柳之御所担当)	千葉 正彦(H21.3.31まで)
文化財専門員(御之御所担当)	半澤 武彦(H21.4.1から)
文化財調査員(柳之御所担当)	櫻井 友梓(H21.4.1から)

〈(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター〉

所 長	相原 康二(H21.3.31まで)
所 長	佐々木 勝(H21.4.1から)
調査第二課長	中川 重紀
文化財調査員	西澤 正晴(担当)

### (2) 調査目的

調査は整備復元に必要な情報を得ることを大きな目的としているため、遺構の内容把握を主としている。そこで、遺構の所属時期の確定・遺構の性格等を把握することを最優先としているが、その保存のために、精査の際の掘削は必要最小限にとどめている。また、半裁を行った遺構についても砂で埋め戻し、保存を図っている。

平成20年度調査(第69次)は遺跡の南端部にあたる範囲を対象としている。今回の調査範囲は第21次調査(昭和63年)の調査区を含んでおり、その際に2条の堀跡(21SD1、21SD2)や橋跡(21SX35)などの遺構が確認されている。調査はこれらの堀跡の構築時期や構造の解明、橋跡の再検証を目的として実施した。特に、2条の堀跡については、これまで調査された範囲が少なく、時期差の有無や堀の構造などいくつかの見解があり、堀の構築時期や存続期間、それぞれの堀の構造など多くの課題が残されていた。そこで、堀跡の構造的な特徴や堆積層の状況、関連する遺構などに留意して調査を行った。また、これらの範囲を含む遺跡南端部については未調査の範囲も多いことから、その様相を解明することも目的としている。

### (3) 調査区の位置

柳之御所遺跡は岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在する。遺跡の背後(北東側)には高館の丘陵、東に北上川、西から南にかけて猫間が淵と呼称される低地によって区切られた河岸段丘上に立地する。遺跡内の標高は南側で25.3m、中心部で27m、北側で32mであり、北東側が高く、南西側に傾斜している。北上川に接しているため遺跡の一部は浸食されたと考えられるが本来どの程度存在していたのかは不明である。この土地は調査前には住宅地と田畑があった場所であり、緊急調査後には公有地化が行われている。

地形図上の位置では国土地理院発行の五万分の一地形図「一関」(NJ-54-14-15)の図幅内にある。遺跡の経度・緯度は北緯38度59分28秒、東経141度7分35秒(日本測地系)である。

柳之御所遺跡は平成9年に史跡指定され、以降順次史跡範囲を広げながら現在に至っている。現時点での指定地面積は88,244.49 k<sup>㎡</sup>である。

調査地は遺跡を堀の内外で二分したうち堀内部地区と呼ぶ範囲に位置する。これまでの調査によって園池跡が発見され、またその周辺には大型の建物が密集することが判明している(中心建物群と呼ぶ)。そのためこの付近の場所が遺跡の中心地と考えられるようになった。今回の調査地点は遺跡の南端部にあたり、外側と内側の2条の堀跡と内側の堀跡に架かる橋脚跡が確認された範囲である。この範囲はこれまで第21次(昭和63年)で(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、第43次(平成5年)で平泉町教育委員会が調査されている場所を含んでいる。

柳之御所遺跡周辺の遺跡をみると、西には隣接して猫間が淵跡、無量光院跡が位置し、北には高館跡、南には伽羅御所跡が接している。無量光院跡はこれまで17次にわたって調査が行われており、宇治平等院と酷似した内容が確認されている。伽羅御所跡はこれまで17回の調査が行われているが、調査面積が少ないため内容は明らかとなっていない。しかし貴重な遺物の出土から重要な遺跡であることは間違いないと思われる。地名から『吾妻鏡』に記載される伽羅御所に比定されることもあるが、発掘調査によって明らかにされているわけではない。

これらの遺跡はいずれも平泉藤原氏関連の遺跡と想定される遺跡であり、柳之御所遺跡と同時期に存在していた可能性も高い。これらが複合して柳之御所遺跡が機能していたと考えられる。

### (4) 調査の方法

**グリッド** 遺構の測量や遺物の取り上げなどの測量作業に際し基準としてグリッドを設定している。このグリッドは(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1988年から始まる緊急調査に際し平泉町教育委員会と協議のうえ設定したものである(三浦謙一ほか1995)。平面直角座標第X系(日本測地系)をもとにした5×5mグリッドで、南北方向の基準線に対し真北は、西に0°11′振れる。遺跡範囲の北西端辺りが原点(0, 0)となる。49次調査まではグリッドの呼称をX座標方向、Y座標方向の順にしていたが、50次調査以降、その順を逆転させY座標方向、X座標方向の順で呼称・記載している。本書においてもこの方式を採用し、たとえば66-70(Y-X)グリッドならばX軸方向が70、Y軸方向が66を示している。

**表土掘削・遺構検出** 今回の調査準備として、平成19年度の調査時に調査区内にトレンチを数本設定し、遺構検出面までの深さを確認する作業を行っている。それにより、かつての調査の際に生じた排土や盛土が厚く堆積していることがわかった。そこで、バックホーを使い、表土を除去した。表土

の除去後は鋤簾などの道具を使用して遺構確認調査（検出作業）を行い、遺構を検出した。

**遺構精査・記録** 検出作業によって確認された遺構については、史跡地内であるために基本的には掘削を伴う精査は行っていない。しかし、一部の遺構については遺構の年代把握や遺物回収のために、半裁等によって土層観察を行い、遺構の断面を記録した。平面図の実測は5mグリッドを分割した1m×1mのメッシュを使用して手作業で行った。今次の調査で検出された遺構はもちろんであるが、既知の遺構についても、検出したものについてはあらためて平面図の作成を行っている。写真については6×7版カメラ（モノクロ・リバーサルフィルム）を中心に撮影を行い、適宜35mm版カメラやデジタルカメラを使用して撮影を行った。調査区全景写真撮影に際しては高所作業車を使用して、調査員が撮影を行っている。

**遺構名称** 今次調査における遺構名は新期の遺構については頭に今回の調査回数である69を付して上記遺構略号を使用した（例.69SX〇〇）、それ以外の遺構については柱穴を除き旧番号（既調査で命名）で統一し、本書においても使用している。

**整理作業** 野外調査終了後の平成20年11月1日から平成21年3月31日まで行った。遺物は水洗後に注記→接合→実測→トレース→図版作成→写真撮影の順で作業を行った。遺構については点検、合成の後、必要に応じて第2原図を作成し、その後トレース→図版作成の順で作業を行った。

**記載内容** この報告では、今次の調査で検出した遺構と既知の遺構でも精査の際に半裁した遺構について記載している。また、新たに精査した柱穴が含まれる建物跡や新たな知見が得られた遺構についても記載している。

**普及活動** 普及活動の一環として、野外調査の全容がほぼ明らかとなった10月4日に現地説明会を行った。天候にも恵まれて参加者200名を得た。そのほかに、遺跡を訪れる観光客などに対して、必要に応じて随時現場を公開した。

（櫻井）



図3 表土除去作業



図4 調査風景



図5 現地説明会の様子



図6 土器洗浄作業

表2 発掘調査年次計画1

年次		調査回数	調査面積	調査期間	予算(千円)	備考
第1次3ヵ年次計画	平成10年度	第49次	500㎡	5月15日～10月31日	18,211	国庫補助
	平成11年度	第50次	1,800㎡	5月13日～10月31日	32,236	国庫補助
	平成12年度	第52次	2,500㎡	5月15日～11月17日	43,341	国庫補助
第2次3ヵ年次計画	平成13年度	第55次	3,100㎡	5月11日～11月13日	45,203	国庫補助
	平成14年度	第56次	4,000㎡	5月13日～11月29日	52,706	国庫補助
	平成15年度	第57次	4,000㎡	4月14日～10月31日	51,892	国庫補助
第3次3ヵ年次計画	平成16年度	第59次	3,500㎡	5月10日～10月31日	43,960	国庫補助
	平成17年度	第64次	2,500㎡	4月15日～9月30日	36,075	国庫補助
	平成18年度	第65次	1,500㎡	5月8日～10月31日	33,366	国庫補助
第4次3ヵ年次計画	平成19年度	第68次	1,200㎡	5月7日～10月15日	32,441	国庫補助
	平成20年度	第69次	1,100㎡	5月7日～12月10日	37,861	国庫補助
	平成21年度	第70次	1,100㎡	5月8日～10月31日	38,598	国庫補助
第5次3ヵ年計画	平成22年度	第72次	1,100㎡			国庫補助※整備関係予算含む
	平成23年度		1,100㎡			国庫補助※整備関係予算含む
	平成24年度		1,100㎡			国庫補助※整備関係予算含む



表3 発掘調査年次計画2

年次		調査回数	調査内容等
第1次三ヵ年計画	平成10年度	第49次	<ul style="list-style-type: none"> <li>堀内部地内の中心建物群、特に最大建物である南北棟4×9間(28SB4)の東側地区の解明</li> <li>23次調査時の23SB2建物跡の延長確認。</li> <li>23SA3柱列跡、23SA1堀跡の延長確認。</li> <li>48SB1建物跡の延長確認と所属時期の検討。</li> </ul>
	平成11年度	第50次	<ul style="list-style-type: none"> <li>池跡及び中心建物群を囲む23SA1堀跡の追跡。</li> <li>4間9間の南北棟の東側の状況及び建物群の伸長。</li> <li>42SD1大溝とされていた遺構の時期及び伸展状況追跡。</li> <li>37次、42次の内容確認調査に確認されていた溝・堀類の時期及び伸展状況の把握。</li> </ul>
	平成12年度	第52次	<ul style="list-style-type: none"> <li>堀内部地区、中心建物群の西側及び北西側地域の解明。</li> <li>祭祀遺構周辺地域の解明。</li> <li>無量光院との対峙地域の解明。</li> <li>堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。</li> </ul>
第2次三ヵ年計画	平成13年度	第55次	<ul style="list-style-type: none"> <li>中心建物群の北側地区の解明。</li> <li>中心建物群を囲むと推定される堀跡の検出。</li> <li>堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。</li> <li>現存する微高地状の高まりの性格把握。</li> <li>北上川縁地域の状況把握。</li> </ul>
	平成14年度	第56次	<ul style="list-style-type: none"> <li>第52次発掘調査の際に検出された大規模な堀(内堀)と張出施設を伴う溝の追跡。</li> <li>北上川右岸縁での大型建物の展開の把握。</li> <li>遺跡を二分する外堀の追跡。</li> </ul>
	平成15年度	第57次	<ul style="list-style-type: none"> <li>旧池跡の規模と造成時期の把握。</li> <li>遺跡中枢を囲う堀の追跡調査及び門跡の確認。</li> <li>高館南側裾部分未調査地域の遺構分布の確認。</li> </ul>
第3次三ヵ年計画	平成16年度	第59次	<ul style="list-style-type: none"> <li>中心建物群の規模と新旧関係の解明。</li> <li>園池北部の構造及び規模と造成時期の把握。</li> <li>北上川縁辺地域の状況把握。</li> </ul>
	平成17年度	第64次	<ul style="list-style-type: none"> <li>園池の構造及び規模と造成時期の把握。</li> <li>池跡から東側への建物等の展開状況の確認。</li> </ul>
	平成18年度	第65次	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺跡中枢を囲う堀の追跡調査及び門跡及び道路遺構の確認。</li> <li>既調査区の再検証</li> </ul>
第4次三ヵ年計画	平成19年度	第68次	<ul style="list-style-type: none"> <li>道路遺構(21SC1)及び堀跡(23SA1)の延長確認</li> <li>遺跡南端外堀の有無の確認</li> </ul>
	平成20年度	第69次	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺跡を区画する二重堀の構造や構築時期の特定</li> <li>既調査で一部確認されている橋跡の追跡調査</li> </ul>
	平成21年度	第70次	<ul style="list-style-type: none"> <li>堀内部北部のトイレ状遺構の分布</li> <li>堀内部北端部の構造確認</li> </ul>
第5次三ヵ年計画	平成22年度	(予定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺跡北端部の堀の延長確認</li> <li>堀内部北端部の様相確認</li> </ul>
	平成23年度	(予定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>堀内部と堀外部との導入施設の確認</li> <li>堀跡の延長確認</li> </ul>
	平成24年度	(予定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>堀外部南端部の道路確認</li> <li>堀内部と堀外部の導入施設周辺域の確認</li> </ul>

※ 第51次・53次・54次・58次・60～63・66次調査は平泉町教育委員会が実施。

表 4 指導委員会協議内容一覧

月 日	委員会・部会名	協 議 内 容 等
H20.5.16	建築復元検討作業部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>○建物イメージの議論について</li> <li>○建物分布、場の機能について</li> <li>○出土瓦の検討について</li> <li>○便所遺構について</li> <li>○28SB4 東側の塀について</li> <li>○掘立柱建物における柱径について</li> </ul>
H20.6.19	整備・遺構検討合同部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今年度整備工事計画について</li> <li>○建物復元のイメージについて</li> <li>○便所遺構について</li> <li>○建物の暫定表示について</li> <li>○平泉郷土館改修について</li> <li>○報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・衣関道遺跡調査について</li> </ul> </li> </ul>
H20.9.1～2	第 1 回 平泉遺跡群調査整備指導委員会	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今年度整備工事計画について</li> <li>○柳之御所遺跡中心建物の検討について</li> <li>○平成 20 年度整備建物平面表示について</li> <li>○植栽工事・平面表示・看板等について</li> <li>○ガイダンス施設基本改修、平泉郷土館改修について</li> <li>○報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・衣川流域遺跡群埋蔵文化財経過報告</li> <li>・各市町村等平泉遺跡群調査及び整備計画等について</li> <li>・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター</li> <li>・平泉町教育委員会</li> <li>・奥州市教育委員会、奥州市世界遺産登録推進室</li> </ul> </li> </ul>
H20.11.27	遺構検討専門部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>○柳之御所遺跡堀内部の構造等について</li> <li>○柳之御所における儀式等の検討について</li> <li>○建物遺構表示手法について</li> <li>○植栽について</li> <li>○看板内容について</li> </ul>
H21.1.21～1.21	第 2 回 平泉遺跡群調査整備指導委員会	<ul style="list-style-type: none"> <li>○暫定公開時の整備状況について</li> <li>○H20 年度発掘調査成果、H21 発掘計画について</li> <li>○平成 21 年度整備工事計画及び課題 <ul style="list-style-type: none"> <li>・整備工事範囲について</li> <li>・堀跡整備について</li> <li>・トイレ状遺構</li> <li>・井戸跡整備について</li> <li>・柳之御所遺跡サイン案について</li> <li>・地形模型について</li> </ul> </li> <li>○今後の整備復元検討について <ul style="list-style-type: none"> <li>・整備復元の検討について</li> <li>・儀式等の復元について</li> </ul> </li> <li>○ガイダンス機能等の計画について <ul style="list-style-type: none"> <li>・柳之御所遺跡暫定ガイダンス施設改修について</li> <li>・平泉文化総合研究基本計画について</li> </ul> </li> <li>○長者ヶ原廃寺跡整備基本計画について</li> <li>○報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・各市町村等 H19 年度平泉遺跡群調査成果及び整備計画等について</li> <li>・県立博物館</li> <li>・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター</li> <li>・平泉町教育委員会</li> <li>・一関市教育委員会</li> <li>・奥州市教育委員会</li> <li>・奥州市世界遺産登録推進室</li> </ul> </li> </ul>
H21.3.19	遺構整備検討合同部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>○暫定公開時の整備状況について <ul style="list-style-type: none"> <li>・公園内の導線について</li> <li>・解説等の設置計画について</li> <li>・ガイダンス施設の機能分担について</li> </ul> </li> <li>○ガイダンス施設内の展示模型について</li> <li>○柳之御所遺跡における儀式復元の検討について</li> </ul>

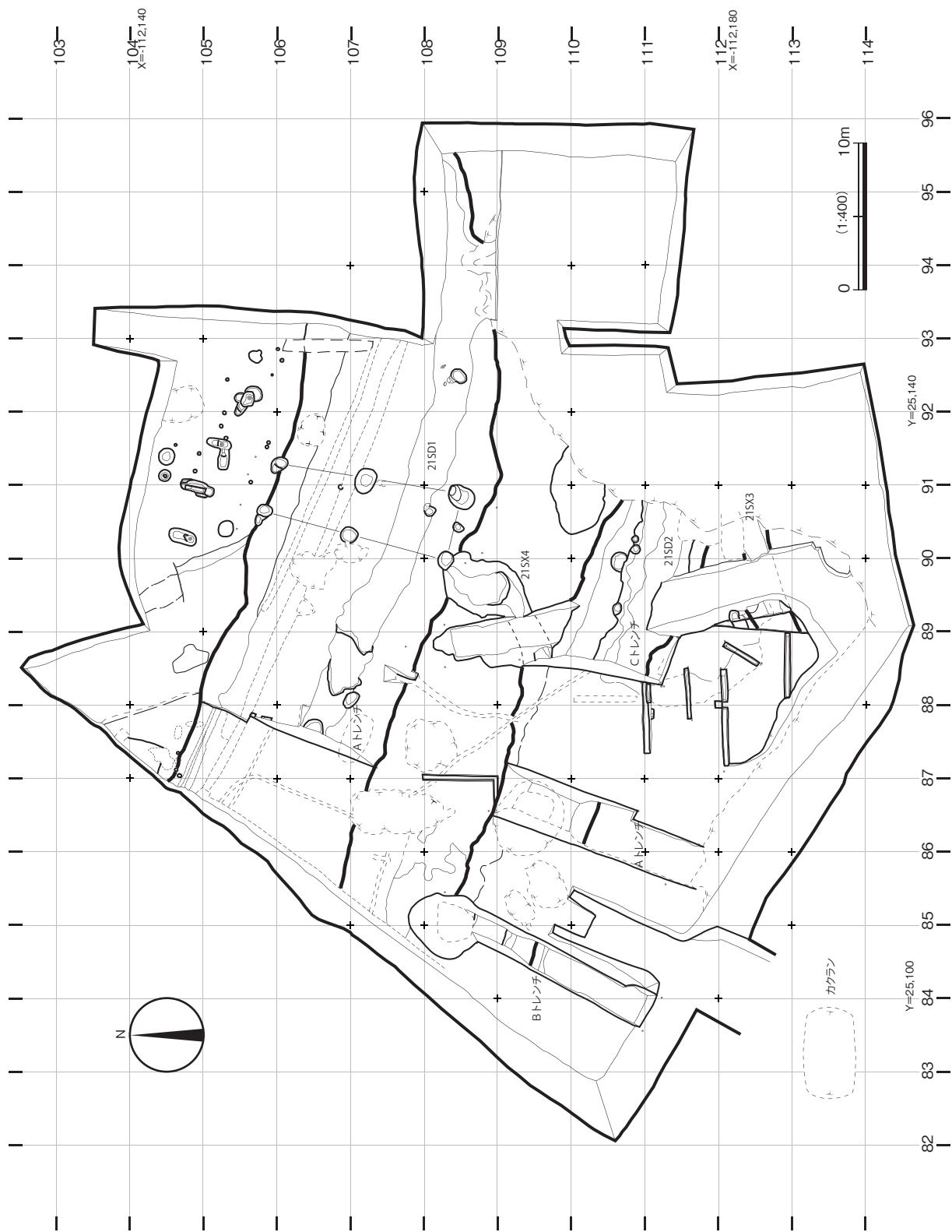


図7 遺構配置図 (1 : 400)

## Ⅱ 調査内容

### 1 調査の概要

今年度の目的のために設定した調査区は、遺跡南端付近の2,463㎡である。このうち、約1,460㎡は21次調査、約50㎡は43次調査でそれぞれ調査が行われており、その再調査部分となる。したがって、今回新たに調査を行ったところは残りの約950㎡となる。

調査の結果、内側・外側2条の堀跡の延長をそれぞれ約13m・26m分を確認した。断面観察を行い、2条の堆積の違いを確認した。また、この2条の間には21SX4という大溝が位置し、これが両者と重複することにより、外側の堀→内側の堀の順に新しいことが判明した。また、この堀跡2条のほかに21SX4を含めてさらに2条の大溝跡が検出された。これらは従来一部のみを検出していたが、その延長を確認することにより大溝と判明したのである。また、橋跡21SX35の再検出も行い、その構造の記録を行っている。

調査区全体は、現代の盛土層を除去後は地山層XとX I層が広がっており、今回調査された遺構は全てこれらの層を掘り込んでいる。調査区南半に位置する21SD2付近より南側は、12世紀中の自然堆積と想定されるⅣ・Ⅴ層によって覆われており、21SD2はこの層を除去しなければ完全に検出できない。

検出した遺構は以下の通り。

堀跡	2条
大溝跡	2条
橋跡	1基
特殊柱穴列	1基
ピット(小穴)	17基
土坑(不明遺構)	6基

### 2 検出遺構

#### (1) 堀跡・大溝跡

##### 21SD1 (図8～10)

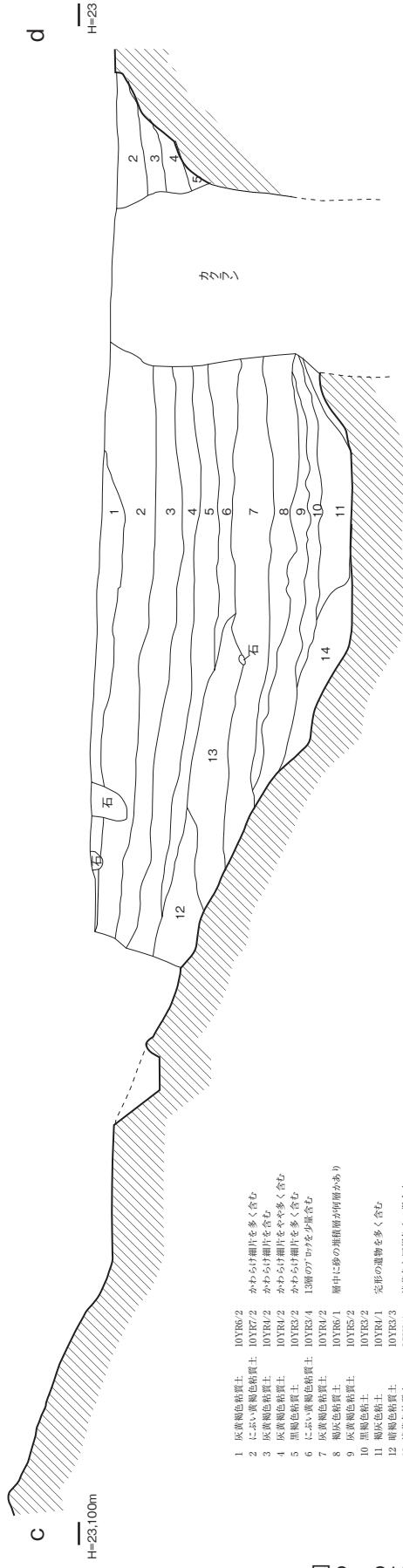
遺跡の内側をめぐる堀跡である。調査区内における地山X I層は北から南にかけて傾斜していくが、その傾斜の途中にこの堀は位置する。したがって、21SD1は地山であるX I層を削りだして構築されている。調査は遺跡南端の屈曲部から西に約48m分を行った。87-104～107から95-108グリッド付近までが調査区内にある。21次調査で東側約35m分はすでに調査されており、今回は残りの13m分を新たに検出している。

21SX35と21SX4と重複する。21SX35橋跡との重複はすでに調査済のため、今回では確認することができないが、既報告書によると、同時期に存在したと推定している。21SX4とは明確な切り合いが確認でき、21SD1の方が新しいと判断できる。



図8 21SD1平面図 (1:250)

21SD1 東壁断面 (Aトレンチ)



- 1 灰黄褐色粘質土
  - 2 におい、黄褐色粘質土
  - 3 灰黄褐色粘質土
  - 4 灰黄褐色粘質土
  - 5 黒褐色粘質土
  - 6 におい、黄褐色粘質土
  - 7 灰黄褐色粘質土
  - 8 黒褐色粘質土
  - 9 灰黄褐色粘質土
  - 10 黒褐色粘質土
  - 11 黒褐色粘質土
  - 12 暗褐色粘質土
  - 13 淡黄色粘質土
  - 14 黄褐色粘質土
  - 15 黄褐色粘質土
  - 16 黄褐色粘質土
  - 17 黄褐色粘質土
  - 18 黄褐色粘質土
  - 19 黄褐色粘質土
  - 20 黄褐色粘質土
- 10YR6/2 かわらけ細片を多く含む  
 10YR4/2 かわらけ細片を含む  
 10YR4/2 かわらけ細片を多く含む  
 10YR3/2 かわらけ細片を多く含む  
 10YR3/4 におい、黄褐色粘質土  
 10YR4/2 灰黄褐色粘質土  
 10YR6/1 灰黄褐色粘質土  
 10YR5/2 灰黄褐色粘質土  
 10YR4/1 灰黄褐色粘質土  
 10YR3/3 暗褐色粘質土  
 2.5YR/4 淡黄色粘質土  
 10YR5/1 黄褐色粘質土  
 10YR8/8 黄褐色粘質土  
 10YR5/1 黄褐色粘質土  
 10YR6/1 黄褐色粘質土  
 10YR8/8 黄褐色粘質土  
 10YR5/1 黄褐色粘質土  
 10YR 黄褐色粘質土
- 13層の7アロガを少量含む  
 層中に砂の堆積層が明確にあり  
 完形の遺物を多く含む  
 淡黄色と灰褐色土の混合土  
 直径10cm程度の淡黄色アロガを多く含む  
 黄褐色(同色)粘土アロガを混合する  
 黄褐色地山アロガを多く含む(地山崩落土)  
 φ10cm程度の円板を含む  
 細灰色粘質土(10YR5/1)との混合土  
 黄褐色地山アロガを少量含む  
 φ10~20cmの円板 黄褐色地山アロガを含む

21SD1 西壁断面 (Aトレンチ)

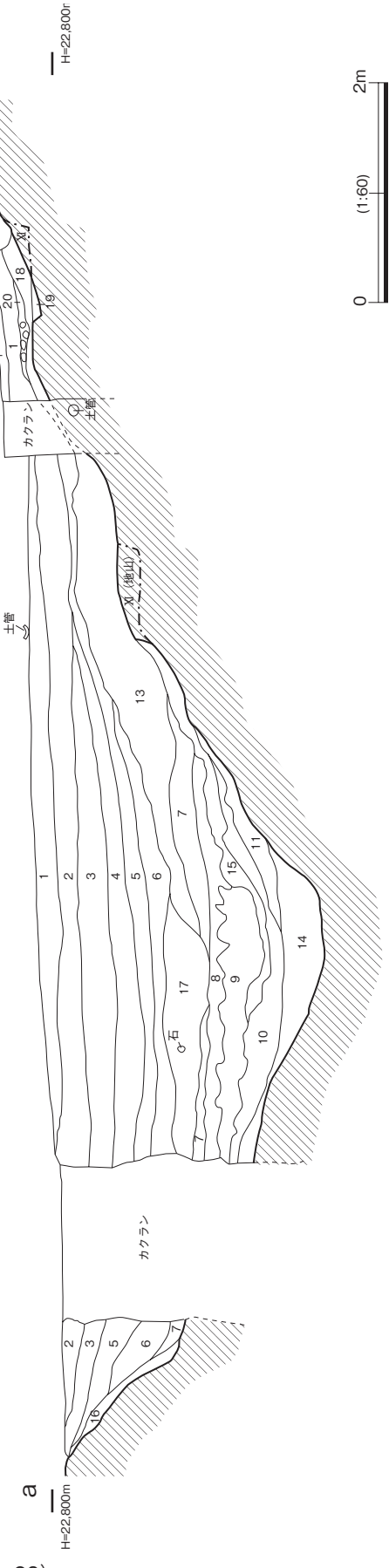


図9 21SD1 断面図 (1:60)



図 10 21SD1 エレベーション図 (1 : 100)

21SD1エレベーション

平面形は調査区内においては北西－南東方向に延びている。検出された長さは直線距離で48m、上幅は最大で14m、下幅は同じく2.8m、深さは最大で3.6mである。堀底はほぼ平坦であるが、東に向かって2つの小さな段差があり、東に傾斜している。

断面形は上幅が広く下幅が狭い逆台形を呈する。また、堀北側の上端の標高の方が高く、南側は低くなっており、段差が目立つ。北側斜面には途中に標高22.40m付近に一段の平坦面がある。この平坦面は調査区内には継続して存在し、堀跡南東端の屈曲部を経て北側に続き、消滅するようである(21次調査)。また、調査区内のこの平坦面には現代の水道管により攪乱されているものの平坦面を境に斜面の角度が異なることから、傾斜変換点がこの付近にあることがわかる。そのため、攪乱されているとはいえ、平坦面の存在は推定できる。この平坦面推定部にはピット(P17)が水道管によって壊されながらも残存する。あるいは平坦面にあった柵のような施設の痕跡かもしれないが、大部分が水道管により破壊されている。対岸の標高は22.40m～22.70mであり、平坦面の標高とほぼ同じ高さで構築されていることがわかる。北側斜面の傾斜角は下が40°、上部が25°であり、平坦面付近で角度が緩やかに変化している。南側の斜面の傾斜角は40°の急角度で短く立ち上がる。北側斜面は平均して傾斜が緩やかであるのが特徴で、南側や21次調査で確認された遺跡東側部分よりも傾斜が緩やかである。

堆積土はAトレンチの東西の壁面をそれぞれ観察した。いずれも類似する堆積状況である。19層に細分したが、基本的には最下層から最上層まで自然堆積土が中心である。下層から褐灰色と黒褐色系の粘質土や粘土が交互に堆積しており、途中、壁面の崩れと想定される地山X I層と類似した層が入る(13層)。既報告書においては途中で改修した痕跡や、上層に近世以降の層があることを指摘されていたが、今回は確認できなかった。

屈曲部付近の南壁は底面との比高があまりなく、平坦に近い状態であった。また、屈曲部から西に5mのところは完全に南壁が無く、開口している。後述のように外側の堀跡(21SD2)もこの付近で削り取られた痕跡が確認できるため、この付近は後世に洪水等の原因で削平されたと考えている。

## 21SD2 (図11～14)

遺跡最南端のX108～111、Y84～90までのグリッドに位置する。21SX4と重複するが、切り合い関係から、本遺構の方が古いことがわかる。そのほか、現代の攪乱が4箇所確認できる。

調査区内で確認した堀跡の長さは36mであり、21次調査で調査済の長さは約10mである。したがって、新たに確認できたのは26mである。調査はトレンチ3箇所分(A～C)のみ底面まで掘り下げを行っている。断面の観察も上記3トレンチで行っている。そのほかは検出まで行ったが、北側の輪郭は確認できたものの、南側の輪郭はトレンチ以外では確認していない(IV・V層を除去していないため)。調査区内においては21SD1と平行し、北西－南東方向に延びている。断面観察の結果、21SD2は少なくとも新旧2時期あることがわかった。

旧期の堀跡で確認できた規模は幅が上幅で最大で7.2m、下幅で3.4mである。深さは検出面から最大で2.3mである。新期の堀跡が重複しているため、現状での大きさである。断面形は逆台形を呈する。新期で確認できた規模は、上幅が現状で6.4m、深さは地山面から2mである。旧期と同様に旧堀跡とIV・V層と重複しているため、あくまで現状での数値である。断面形は半円形を呈するように底面が緩やかである。

堆積土の状況はかなり複雑な様相を示す。A～Cトレンチとも基本的には同様の堆積を示し、調査区内においては類似した堆積環境であったと考えられる。観察した層は8つに大別できる(IV・V・A～F層)。21SD2に関わる層はEとF層になるが、堆積の関係上ここで他の層も簡単に触れておく。



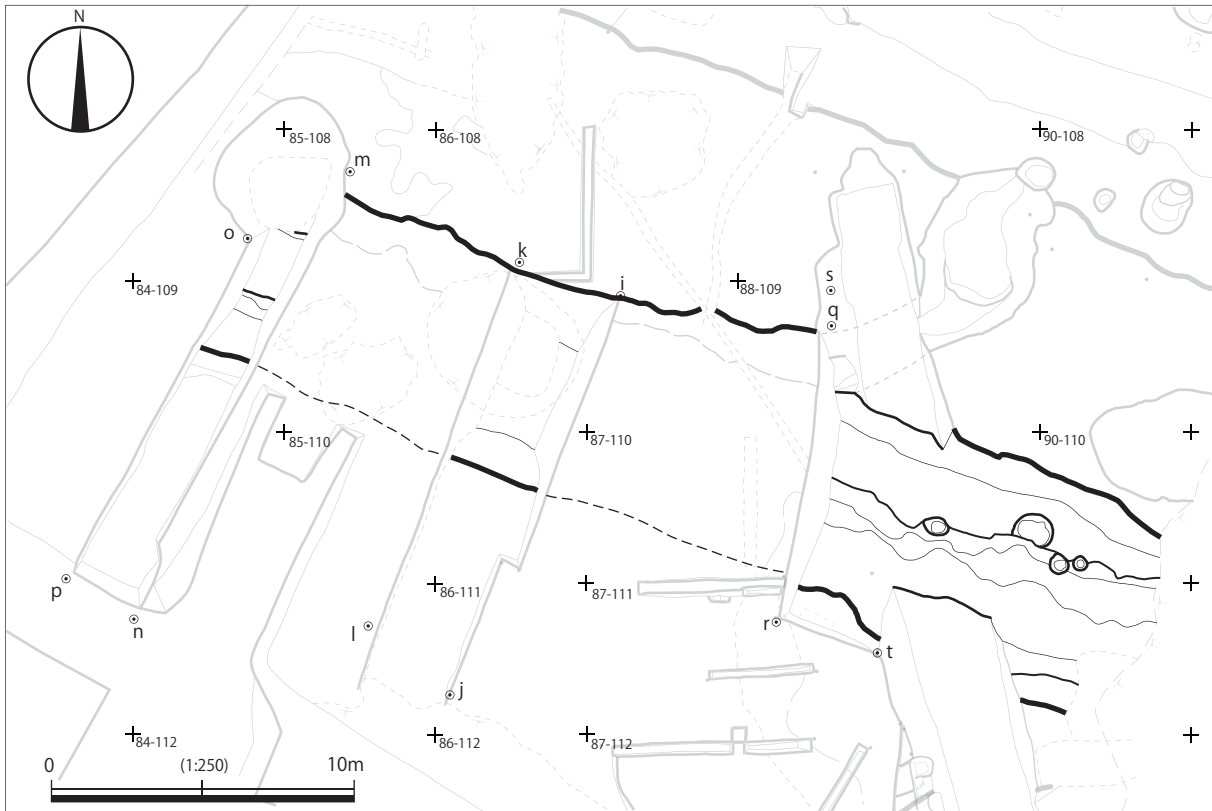


図 11 21SD2 平面図 (1 : 250)

上層からみていくと、IV層は黒褐色～暗褐色の粘質土を主体とする層で、かわらけ片を多く包含する。最上部に位置するため、多くはⅢ層以上、すなわち近世以降に削平されている。残されているのは相対的に低い範囲のみである。人工的な様相は認められないため自然堆積と考えている。時期は、近世以降の遺物が混じらないため12世紀代の堆積を想定している。V層は灰褐色～黒褐色を呈する粘質土・粘土である。下位ほど粘土になる傾向がある。層中にはラミナが確認され、完形のかかわりも多数包含する。このため、この層は12世紀代に自然に水性堆積した層と考えられる。したがって、この層で21SD2付近は覆われており、洪水等により冠水したと想定できる。

A～B層は整地に関わる層である。C層はA層に類似した淡黄色の塊状土を多く混合する層である。この層には橋の部材と推定される部材や木筒をはじめとする木製品、多量のかかわりなどを包含している。この層の平面的な広がり未確定であるが、Aトレンチには見られないことから、Cトレンチ付近に限定して広がっていると考えられる。C層の下位面は東に向かって窪んでいるため、あるいは土坑状の掘込みに伴う堆積土かもしれない(69SX3)。人為堆積である点を考慮すると、部材などを廃棄するために掘られ、埋め戻されたのだろうか。D層は21SX4の堆積土である。E・F層は21SD2に伴う堆積土である。層序からみて、E層よりF層の方が新しい。E層は黒褐色土と灰褐色土層が交互に自然に堆積する。F層も自然堆積で、黒褐色～灰褐色の粘質土・砂質土である。下位層はグライ化している。

以上大別8層について触れたが、これらは、Cトレンチでのみ全て確認できるが、そこから約8m

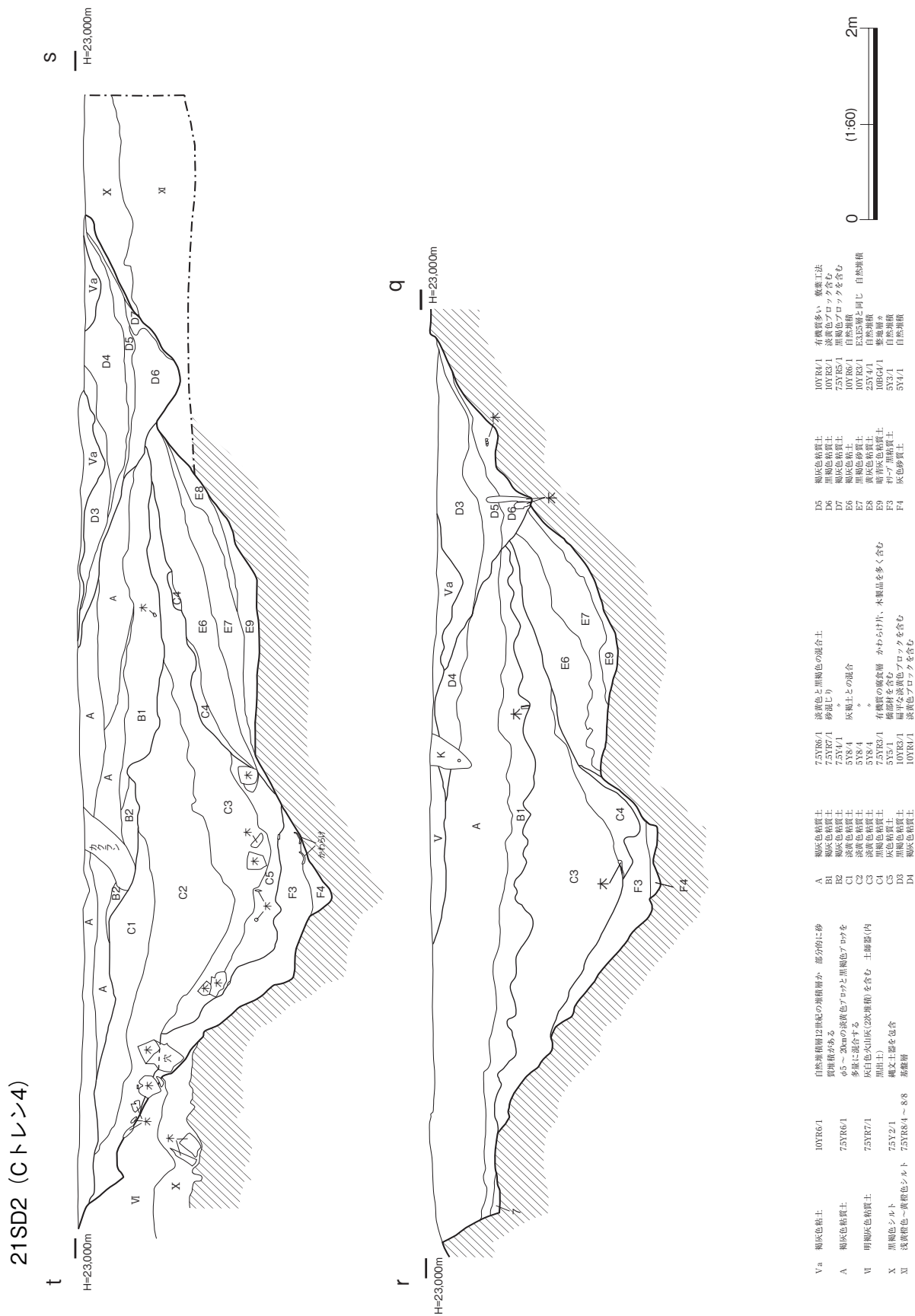
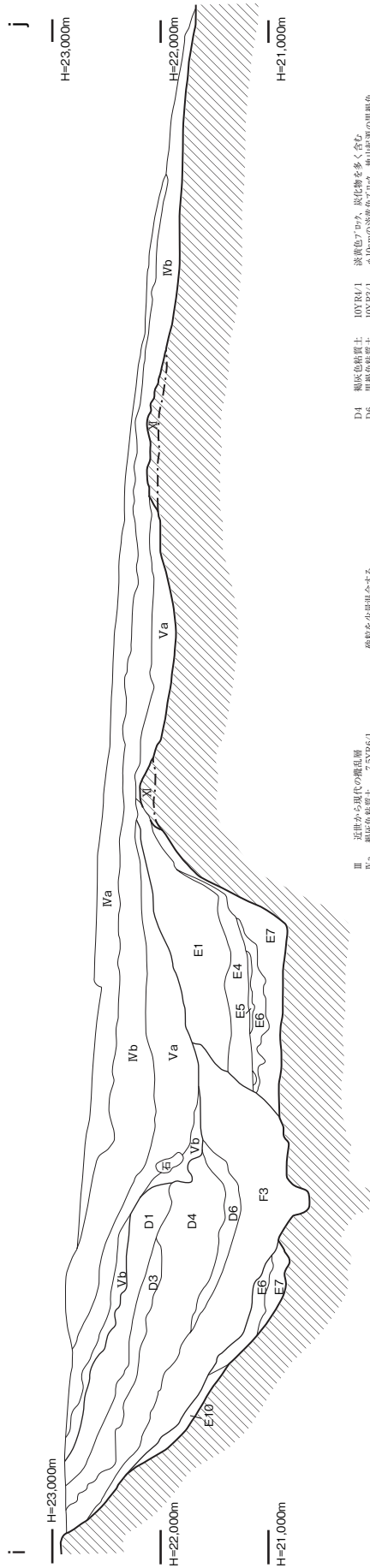


図 12 21SD2 断面図 1 (1 : 60)

21SD2 (Aトレンチ) 東壁断面



21SD2 (Aトレンチ) 西壁断面

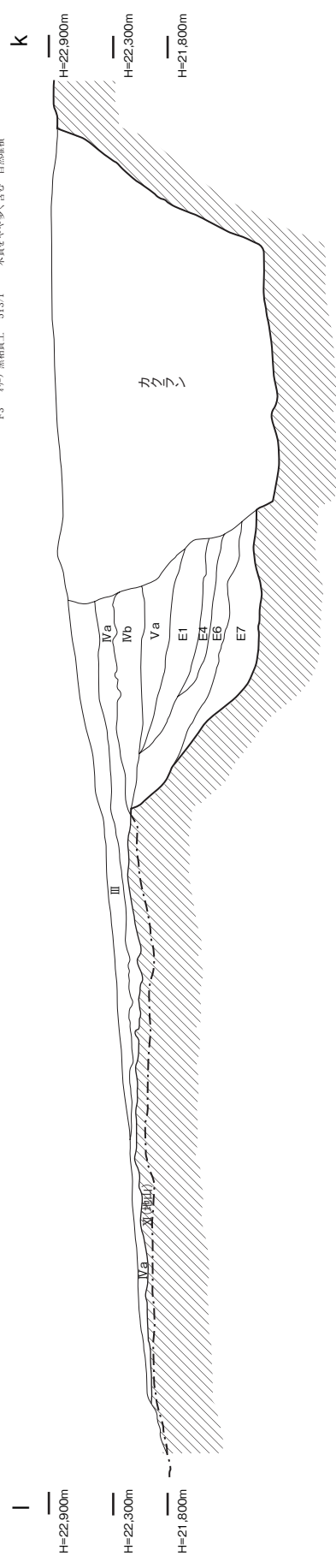
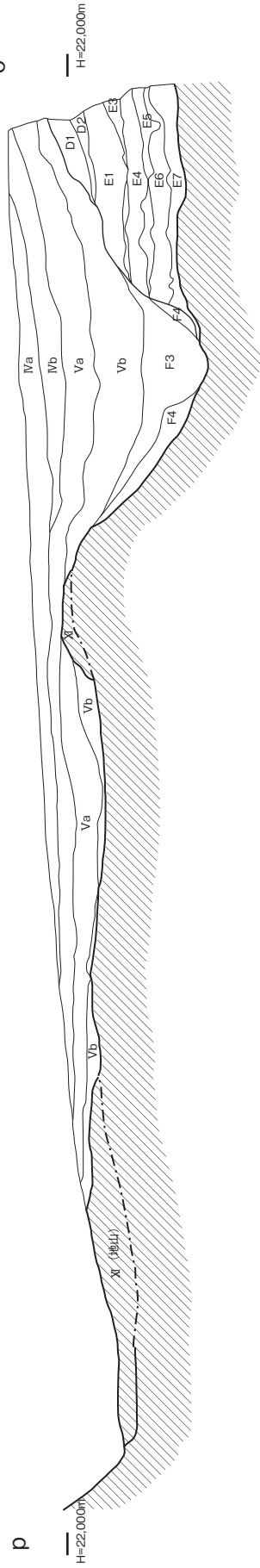


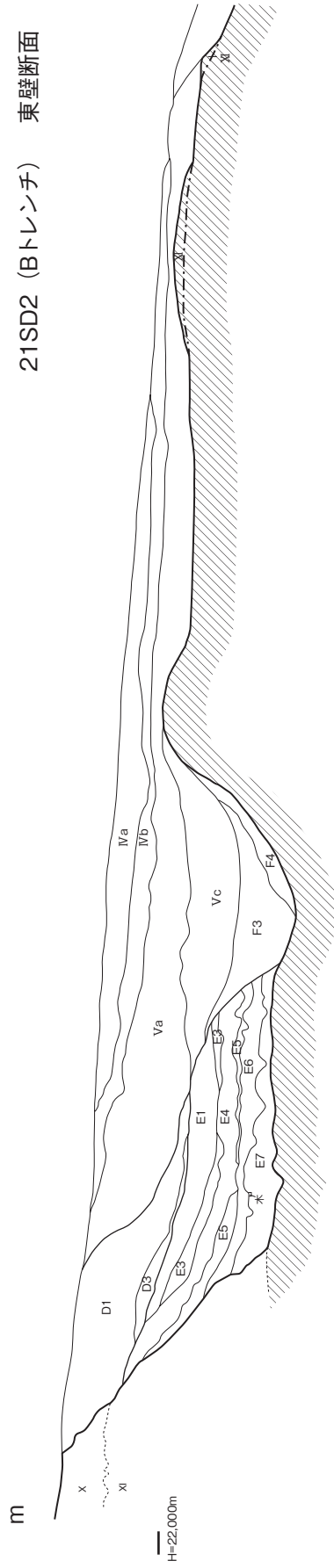
図 13 21SD2 断面図2 (1:60)

- |                |                       |                    |                    |                           |                           |                     |                     |                    |                    |                    |                    |                    |                    |                    |                    |                     |                    |            |
|----------------|-----------------------|--------------------|--------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------|---------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|---------------------|--------------------|------------|
| III 近世から現代の堆積層 | IVa 細灰色粘質土 75YR6/1    | IVb 細灰色粘質土 75YR5/1 | Va 細灰色粘質土 10YR6/1  | Vb 細灰色粘質土 75YR5/1         | D1 灰白色粘土砂層 10YR7/1        | D3 黒褐色粘質土 10YR3/1   | IVa 細灰色粘質土          | IVb 黒褐色粘質土         | Va 灰白色粘土           | Vb 黒褐色粘質土          | D4 細灰色粘質土          | D6 黒褐色粘質土          | E1 灰白色粘土           | E3 黒褐色粘質土          | E6 細灰色粘土           | E7 黒褐色粘質土           | E10 灰褐色粘質土         | F3 わがワ黒粘質土 |
| IVa 砕粒を少量混合する  | IVb 自然埋積層、北壁以北の新しい埋積層 | Va 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | Vb 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | D1 灰白色粘土砂層、灰白色粘土砂層を少量混合する | D3 灰白色粘土砂層、灰白色粘土砂層を少量混合する | IVa 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | IVb 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | Va 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | Vb 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | D4 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | D6 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | E1 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | E3 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | E6 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | E7 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | E10 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 | F3 埋積層、北壁以南の新しい埋積層 |            |

21SD2 (Bトレンチ) 西壁断面



21SD2 (Bトレンチ) 東壁断面



- |     |         |         |                              |
|-----|---------|---------|------------------------------|
| IVa | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | φ10cm以下のつねれた(扁平)淡黄色アワケを多く含む。 |
| IVb | 灰白色粘土   | 10YR7/1 | 淡黄色アワケを少量混入する。自然埋積           |
| Va  | 細灰色粘質土  | 10YR3/1 | 淡黄色アワケを多く含む。本遺構より流れた土        |
| Vb  | 細灰色粘土   | 10YR6/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| Vc  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 淡黄色アワケを多く含む。本遺構より流れた土        |
| E1  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| E2  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| E3  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| E4  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| E5  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| E6  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| E7  | 黒褐色粘質土  | 10YR3/1 | 自然埋積。ES37層と同じ                |
| F3  | 粘アゲ黒粘質土 | 5Y2/1   | 本質をやや多く含む。自然埋積               |
| F4  | 灰白色粘質土  | 5Y4/1   | かわらけ、木炭屑等を含む。自然埋積            |

図 14 21SD2 断面図 3 (1 : 60)

西にあるAトレンチ、さらに西のBトレンチではA、B、C層は確認できない。また、この3つの層は、21次調査でも確認できるため、Cトレンチより東側には広がっていたことがわかる。21SD2では土層堆積をみると、自然堆積と人為堆積が交差する複雑な埋没環境であり、また複数の遺構が重複していることから、開発を受ける頻度がかかなり高いものであったと推定される。

21SX3 (図15)

調査区の南端89-112～90-112グリッドに位置し、東西方向に延びる大溝跡である。整地A層を除去した段階で検出された。東端は後世の北上川の氾濫によって浸食されたと想定され残存していない。西端はⅣ・Ⅴ層が上部を覆っているため検出していないが、さらに延長していくと想定される。21次調査で90-112グリッドに位置する範囲は調査がされており、今回の調査では89-112グリッド分が新期に発見された。69SX1と重複しており、21SX3の方が新しい。現状での規模は長さが7.5m、幅が最大で2.7m、整地A層を除去した面からの深さは0.8mである。断面はゆるやかな半円形状を呈している。

堆積土は単層であり、人為で北方向から埋め戻された状況を呈する。1層は灰褐色～黒褐色系の粘質土が主体であり、整地A層と同様の淡黄色のブロック土が多量に混入する層である。

21次調査時ではごくわずかな部分のみの調査であったため、21SX3と不明遺構として命名されている

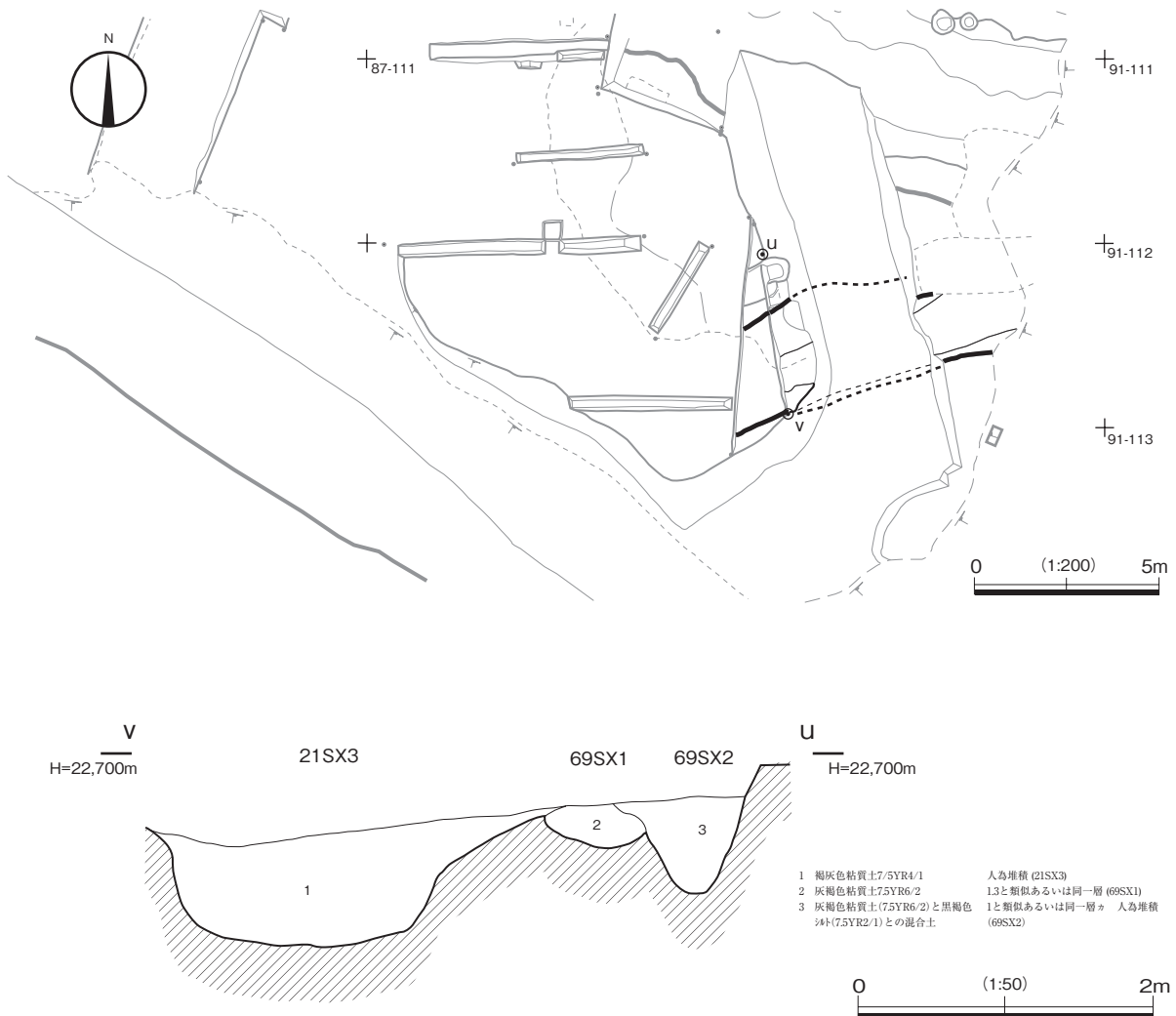


図 15 21SX3 平面図・断面図 (1 : 200, 1 : 50)

たが、今回延長する部分を検出したことにより、大溝跡と判断したものである。名称は変更すると混乱すると思われるため、そのまま変更していない。西側がどこまで延長するかは今後の調査によるが、状況から考えて、さらに延長すると推定される。現状では柳之御所遺跡最南端に位置する遺構である。

#### 21SX4 (図16・図12)

本遺構は従来調査部分の少なさも土坑状の遺構とされていたものであるが、隣接地を今回調査したため、この遺構が延長することがわかり、大溝跡としたものである。84-108グリッド付近から東に90-108グリッド付近までに位置する。今回の調査では、A・B・Cトレンチ部分のみを調査し、断面の観察もこの3トレンチで行っている。21SX35橋跡、21SD1、21SD2と重複する。21SX35とは過去の報告書によると、「21SX4の北東部を21SX35がきる」とあり、21SX35橋跡の方が新しいとのことである。21SD1とは切り合い関係から21SD1の方が新しい。21SD2との関係は、21SD2の堆積土の上に21SX4が位置するため、21SD2のほうが古いことがわかる。89-109グリッド付近は擁壁を造る際に破壊されている(43次調査)。

基本的には東西方向に延長する大溝跡であるが、21SD1と重複する地点付近で大きく北に屈曲する。西側は調査区外に延長していくことが予想される。本遺構の大半は21SD2と上下に重なっている。

規模はⅣ・Ⅴ層に大半を削られているため判然としないが、21次調査範囲で見ると、幅が最大で4m、深さが地山面から1.5mである。断面形はレンズ状を基本とする。

今回調査した部分での堆積土は大別D層である(D1～6に細別)。D層は、上部をⅤ層によって削られ、あるいは覆われている。灰白色や黒褐色、浅黄橙色の粘質土からシルト層に細分される。下層(D5)には木の枝や樹皮などを敷きつめた痕跡が確認された。これは湿地を埋める際に導入された敷葉工法の一つと想定している。これより下層のD6層は自然堆積、上層である、D1～D4層は淡黄色土が主体あるいは、塊状に混合する層で、人為堆積と考えられる。これらの層はCトレンチ以外では異なる様相を示すものの層序から考えて21SX4の堆積土と判断している。

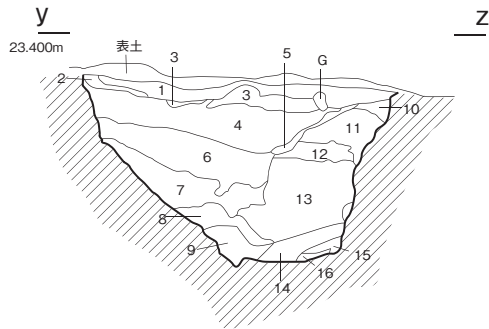
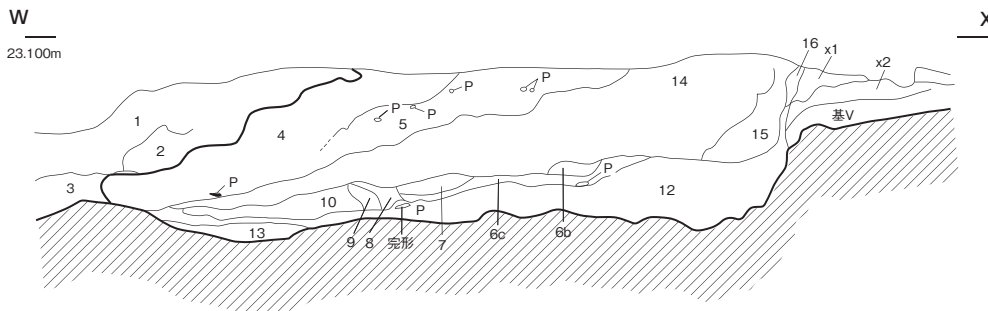
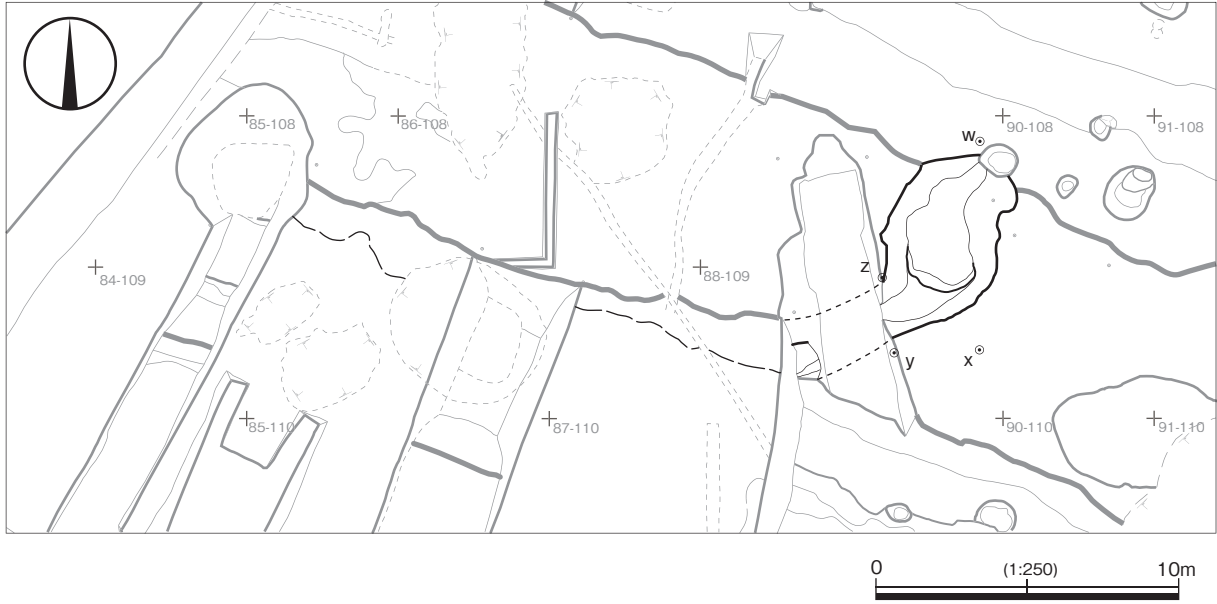
このようにみると、ここでは21SX4と個別の遺構として捉えたが、本遺構はほぼすべて21SD2と重なっていること、堆積土も21SD2から継続的に存在することを考慮すると、あるいは21SD2の3回目の改修、すなわち21SD2の最新期の痕跡であったかもしれない。この点については、ここでは断定できないが、今後の調査において検証していく必要がある。

## (2) 橋 跡

#### 21SX35 (図17～18)

89-106～98-108グリッドに位置する橋跡である。21SK11・7・3・1・5・8の6基の橋脚の柱穴から構成される。21次調査によって過去に調査されており、詳細は過去の報告書にも掲載されている。21SD1に沿って北側一帯には整地層が広がっていたと記載されるが、本橋跡の橋脚跡はこの整地層の上面に位置する。すなわち整地後に構築されたと考えられる。

各橋脚穴は梁行1間、桁行2間で構成され、2個の橋脚穴からは柱痕が残存している。平面形・規模はいずれも円形から楕円形状を呈し、規模は1m前後のものがほとんどで、21SK7は直径1.7m、21SK3は長径は2mにも達するが、21次調査時ではいずれも約1m程であり、調査後崩落して穴の直径が広がったと推定される。柱間寸法をみると、梁行は北が3.36m、南が4.36mの11.1尺、14.4尺であり、北よりも南の梁行の方が1m大きい。桁行の柱間は東側柱列で6.5mの21.5尺等間に復元できる。桁方向はN-12°-Eと東に傾いている。各橋脚穴の底面標高は、北側を除く21SK1・21SK3と21SK5・21SK7



W-X	21SX4	Y-Z
1~3	21SD2の埋土	1 10YR5/2 灰黄褐色砂混じり砂
4	10YR4/3 黄褐色砂混じり砂	2 10YR4/6 褐色砂
5	10YR4/3 黄褐色砂混じり砂	3 5Y8/4 淡黄色地山粘土アロパ
6a	10YR5/1 褐色粘土混じり砂	4 10YR5/1 褐色砂混じり砂
6b	10YR5/1 褐色粘土混じり砂	5 10YR4/1 褐色砂混じり砂
6c	10YR5/1 褐色粘土混じり砂	6 10YR4/1 褐色砂混じり砂
7	10YR3/1 黒褐色砂	7 5YR8/4 淡黄色粘土
8	10YR5/1 褐色粘土混じり砂	8 10YR4/1 褐色粘土混じり砂
9	10YR3/1 黒褐色砂	9 10YR3/1 褐色粘土混じり砂
10	10YR4/4 褐色粘土混じり砂	10 10YR5/1 褐色砂混じり砂
11	10YR5/1 褐色粘土混じり砂	11 5Y8/4 淡黄色地山粘土アロパ
12	10YR4/1~5/1 褐色粘土混じり砂	12 10YR2/1 黒色砂
13	10YR4/1 褐色粘土混じり砂	13 10YR4/2 灰黄褐色粘土混じり砂
14	10YR5/4 黄褐色砂混じり砂	14 10YR4/1 褐色、10YR4/2灰黄褐色粘土混じり砂
15	10YR5/6 黄褐色地山砂混じり砂	15 5Y8/4 淡黄色地山粘土アロパ
16	10YR4/1 褐色粘土混じり砂	16 10YR3/1 黒褐色粘土混じり砂

炭化物片が厚さ2~3mmの層状に数枚入る

別の遺構

※断面図は、21次報告書を再録

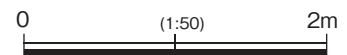


図 16 21SX4 平面図・断面図 (1:250, 1:50)

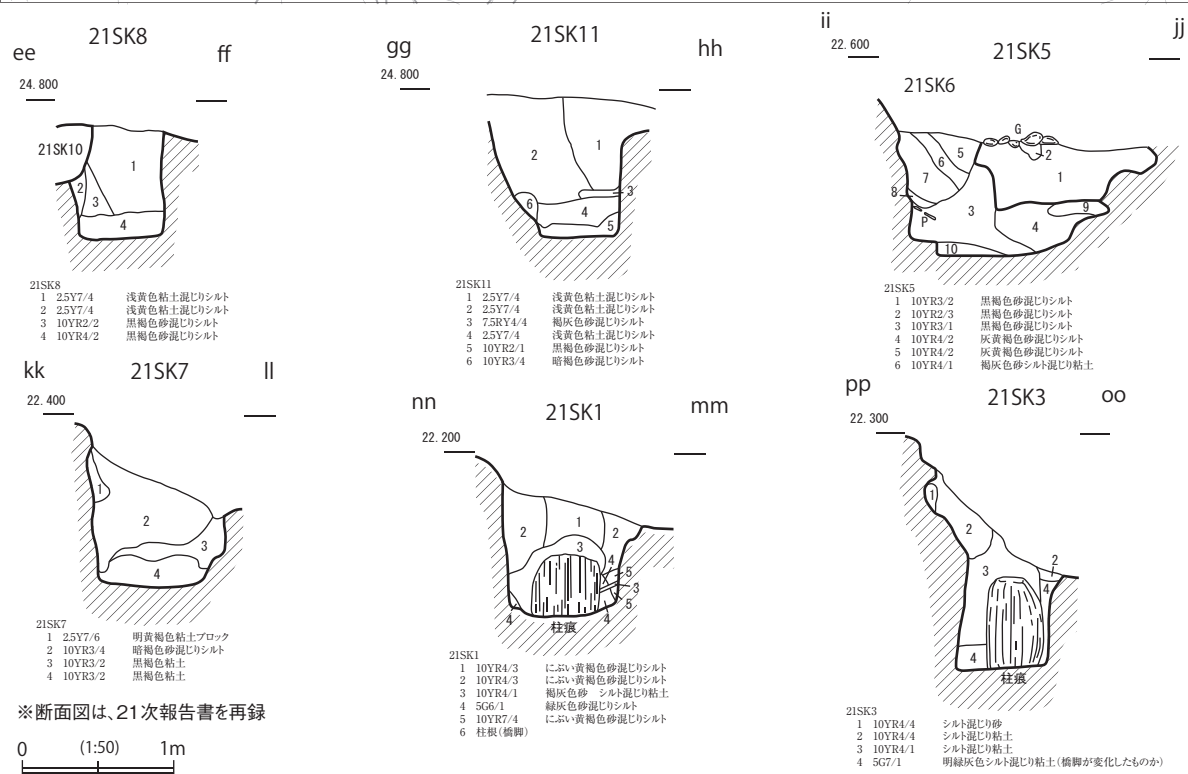
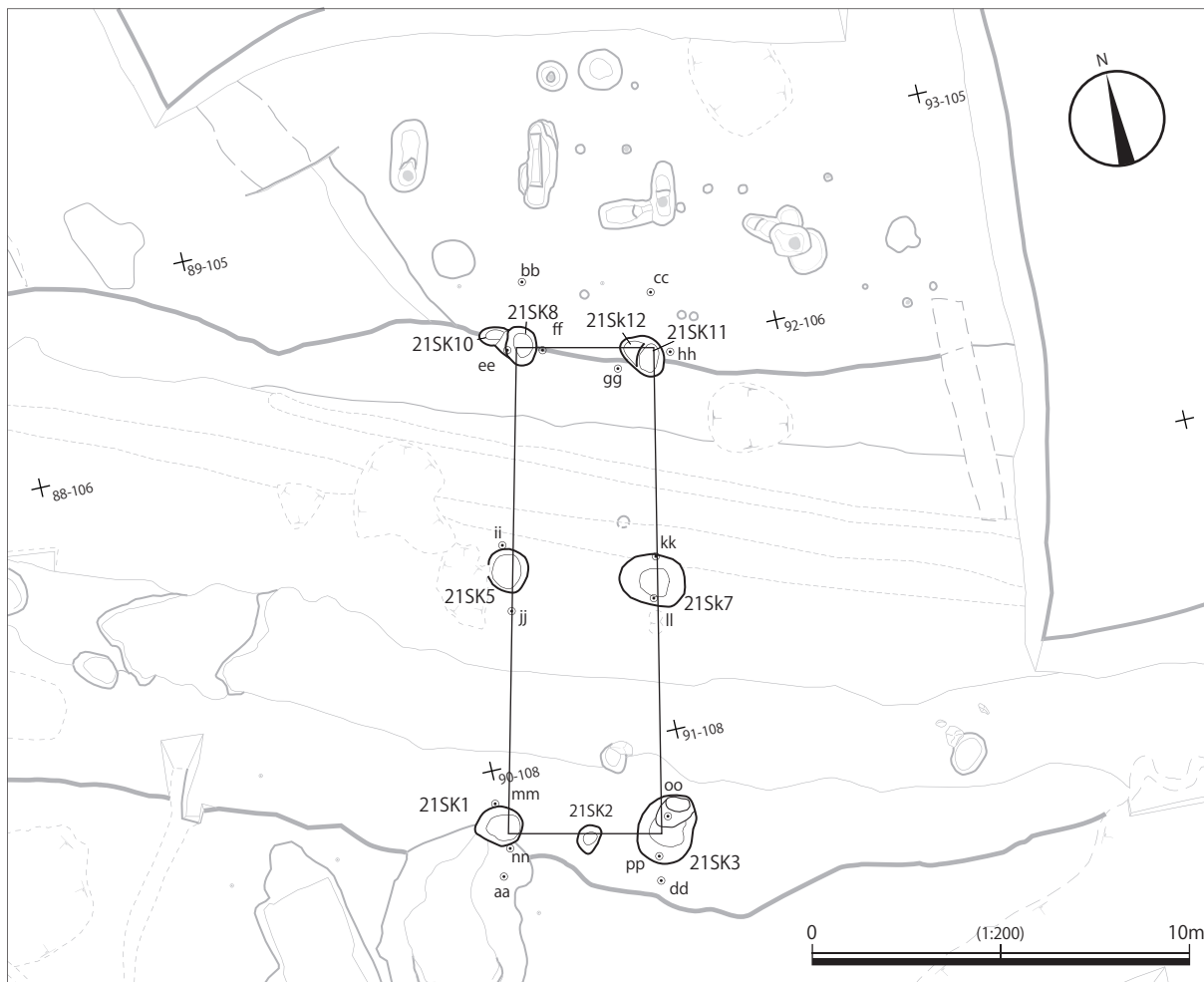


図 17 21SX35 平面図・断面図 (1 : 100, 1 : 50)





図 18 21SX35 エレベーション図 (1 : 100)

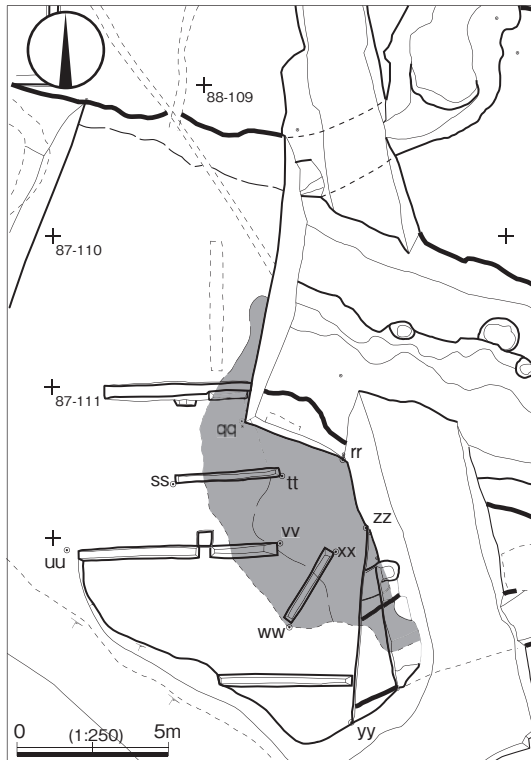


図19 整地層範囲図 (1 : 250)

書の記述から存在は確認できるが、範囲は不明である。西側は層厚が徐々に薄くなり88グリッドラインより西でほぼ消えてしまう。現状では南北に約11m、東西に5mの規模であるが、本来は東側に広がっていたことが想定できる。そのため、整地は広い範囲を行ったのではなく、比較的狭い範囲のみ行ったものと考えられる。

21SD2、21SX4、21SX3と重複している。21SD2、21SX3より新しく、21SX4よりは古い。また、IV・V層はこの整地層の上を部分的に覆っている。

整地層はA・B層に大別できる。A層は地山X層やXI層に起源をもつ塊状土を多く混合する層で、最大で50cmの厚さがある。人為的に埋め戻された層であり、Cトレンチ付近のみ存在する(P17参照)。B層はA層の堆積前に広がっていた層で、基本的にはA層の下位にのみ存在する。そのため、この層も整地に関わる層なのかもしれない。灰褐色を呈する粘質土であり、砂粒を多く含んでいるが、淡黄色の塊状土を含まない。自然堆積か人為堆積か判断がつかない。21SD2の最終的な堆積土ともいえる層である。

このようにみると、この整地は外側の堀跡(21SD2)を最終的に覆った層で、限定された範囲にのみ存在したものとなる。

### (5) 柱穴・その他の遺構 (付図)

**ピット(小穴)** 調査範囲内から検出されたピットは17基あり、いずれも柱穴と考えられる。これらは検出のみのため詳細は不明であるが、これらから建物跡を復元できなかった。P17以外は21SD1よりもすべて北側に位置する。P17は21SD1の平坦面に位置する。

**69SX1・69SX2** 21SX3の北側89-112グリッドに位置する。整地層であるA層の下位に存在するため全体は不明である。調査した範囲においては土坑状の遺構となる。断面の観察から仮に2遺構

の底面の標高は21m前後で同様の位置にあるが、21SK8・21SK11の底面標高は23.6m付近であり、前者と2.5mの高低差がある。各柱穴の深さも過去調査の所見では70～90cm前後でほぼ共通している。これらの計測値は橋を復元する際には重要な値を示すと推定される。

以上のように、本橋跡は、各計測値が示すように単純な構造を呈していないが、桁行20尺を超える巨大な構造の建築物であったと推定される。

### (3) 土坑 (付図)

調査区内においては土坑が4基検出している。これらは21次調査ですでに調査されており、詳細は過去の報告書を参照されたい。状況の変更はない。

### (4) 整地層 (図19)

調査区南半、88-110～88-112グリッド付近に広がる整地地業の痕跡である。東側は擁壁工事により破壊され、さらに東の21次調査範囲においては、報告

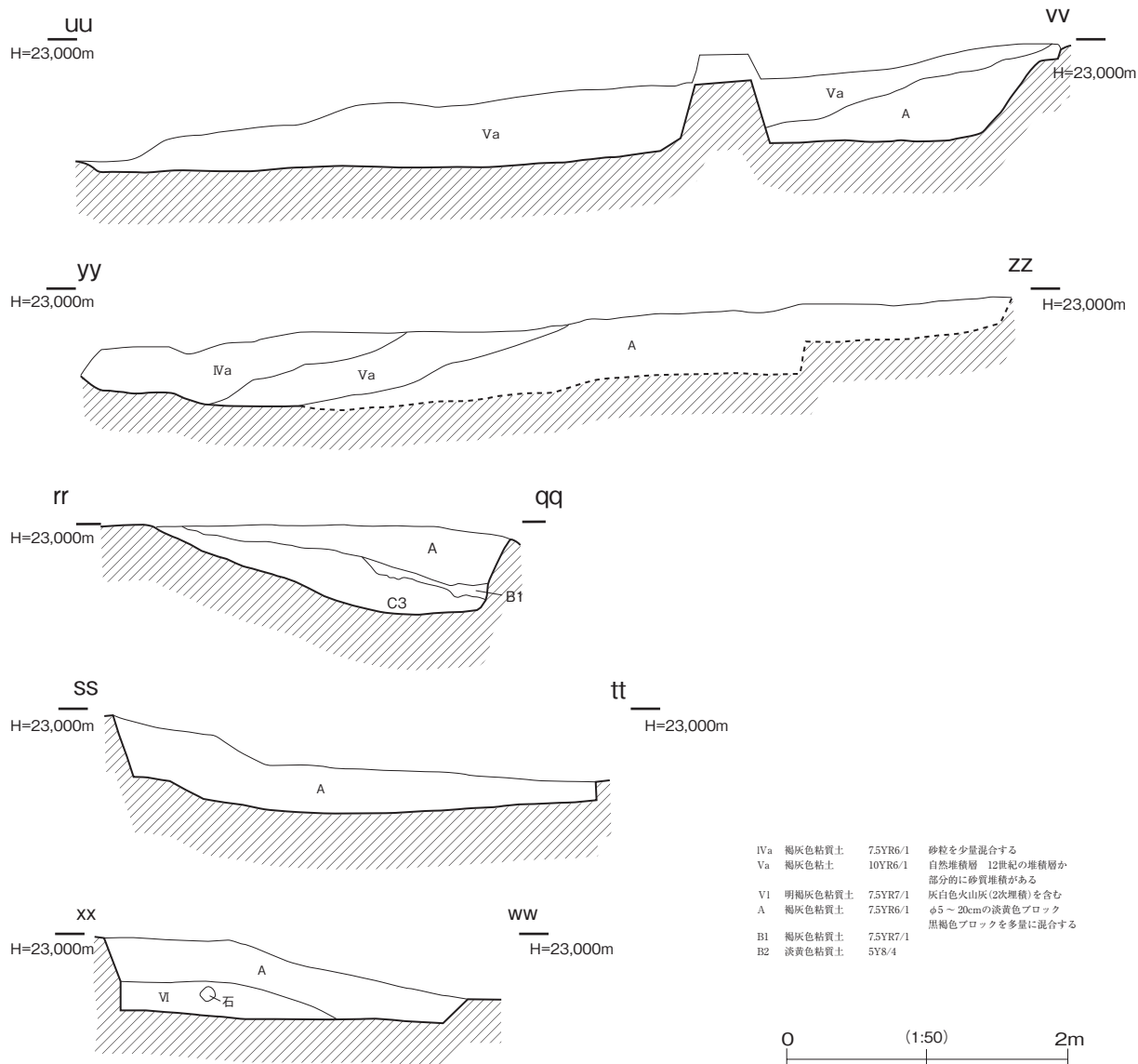


図 20 整地層断面図 (1 : 50)

としたが、全体を広げればあるいは一遺構かもしれない。69SX1は69SX2と21SX3と重複し、いずれよりも古い。また69SX2は69SX1と重複し、それよりも新しい。堆積土は両者とも灰褐色の粘質土で、整地層であるA層のブロック土を含んでいる。人為堆積と考えられる。

**21SX36** 90-104 ~ 92-105グリッドに位置する。21SK21、21SK119、21SK120、21SK117、21SK118、21SK113、21SK114から構成される柱穴列があり、過去の報告書では特殊柱穴列と呼ばれたものである。この遺構についても21次調査において調査されていたため、詳細はそちらによるが、底面の色調の違いが柱痕跡の可能性もあるため、新たに図化している。

(西澤)

## 3 出土遺物

## (1) 概要

今年度出土した遺物の総重量は180.8kgになる。そのうち、土器類が163.1kgと総重量の90%を占める。ついで国産陶器類8.3kg、輸入陶磁器類0.15kgとなる。遺物の多くは内側と外側の2条の堀跡(21SD1、21SD2)から出土したもので、21SD1では下層に近いものが多く、21SD2では69SX3とした土坑状の掘り込みから多くの遺物が出土している。その他に21SX4、整地層から出土したものがある。なお、国産陶器は全点を表に掲載し89点を図示し、輸入陶磁器は全点を図示した。また、輸入陶磁器の分類にあたっては「大宰府分類」(太宰府市教育委員会2000)を参考にしている。

## (2) 土器・陶磁器類

## 21SD 1 出土土器・陶磁器類(図21～26)

かわらけは21SD1から総重量で39.8kg出土し、ここではそのうち53点を図示した。1～4はロクロかわらけの小皿である。口径は9cm前後、底径、器高ともに1cm以下の幅でまとまり、規格性の高い法量値を示す。ただし、底部の器厚や口縁部形態など、細部には違いがみられる。5～10はロ

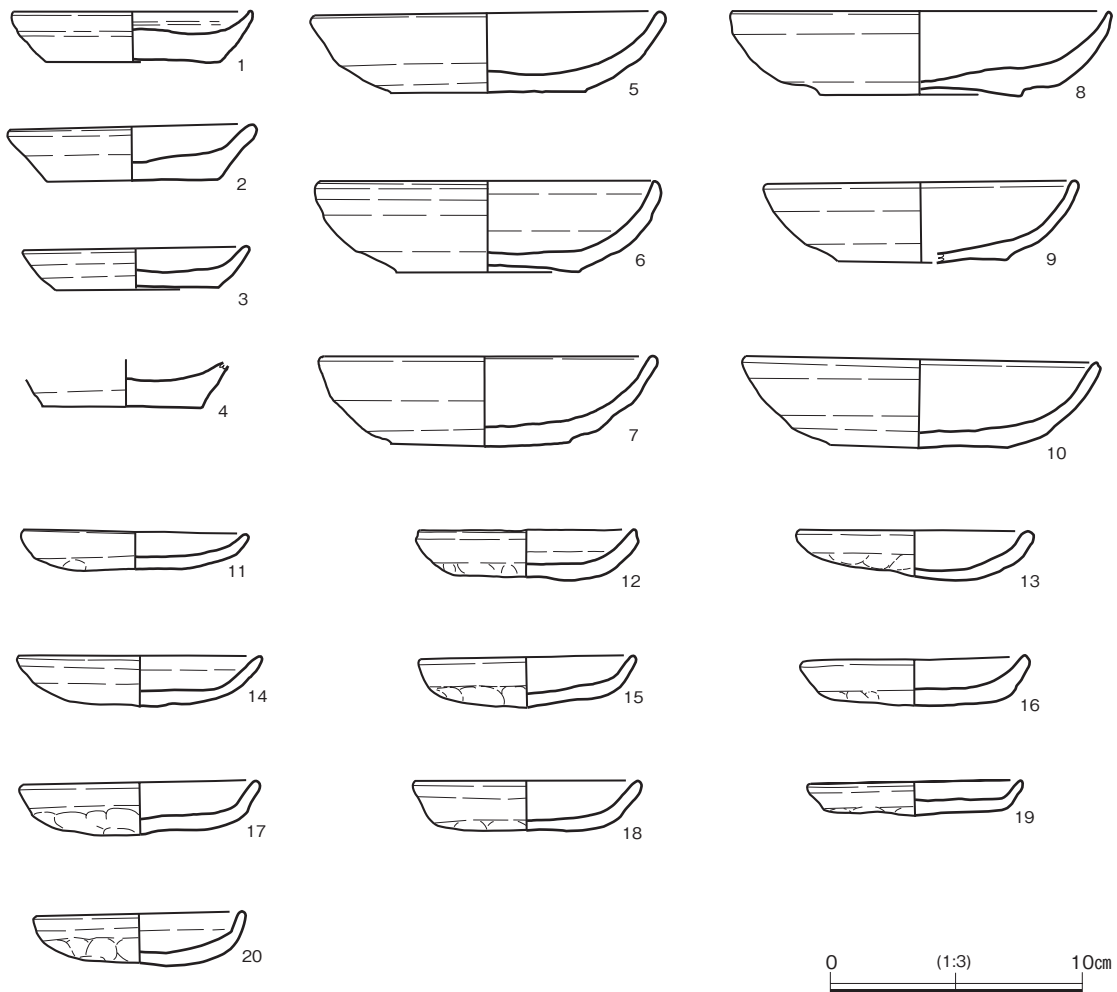


図 21 21SD1 出土土器類実測図 1 (1:3)

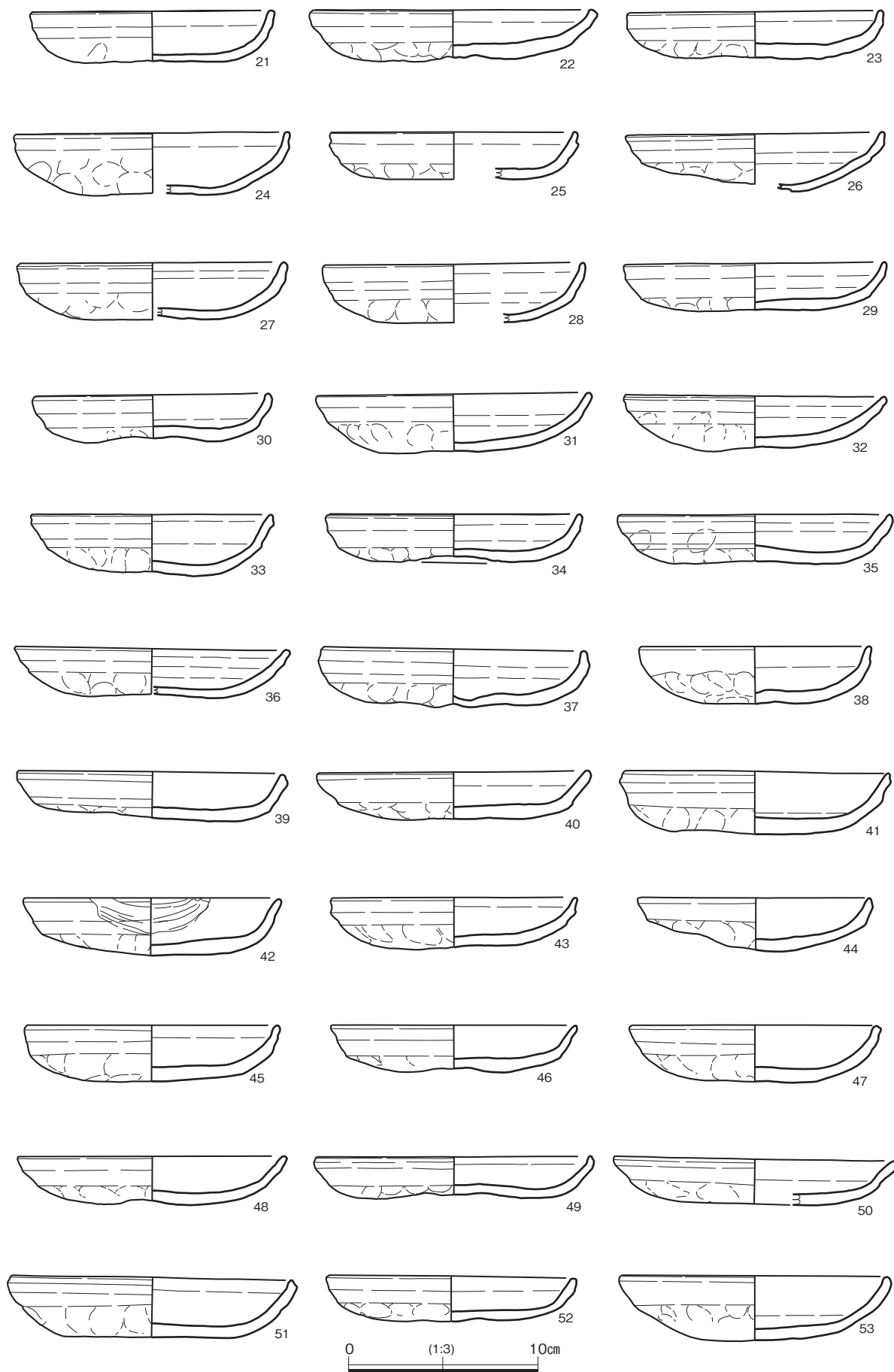


图 22 21SD1 出土土器類実測图 2 (1 : 3)

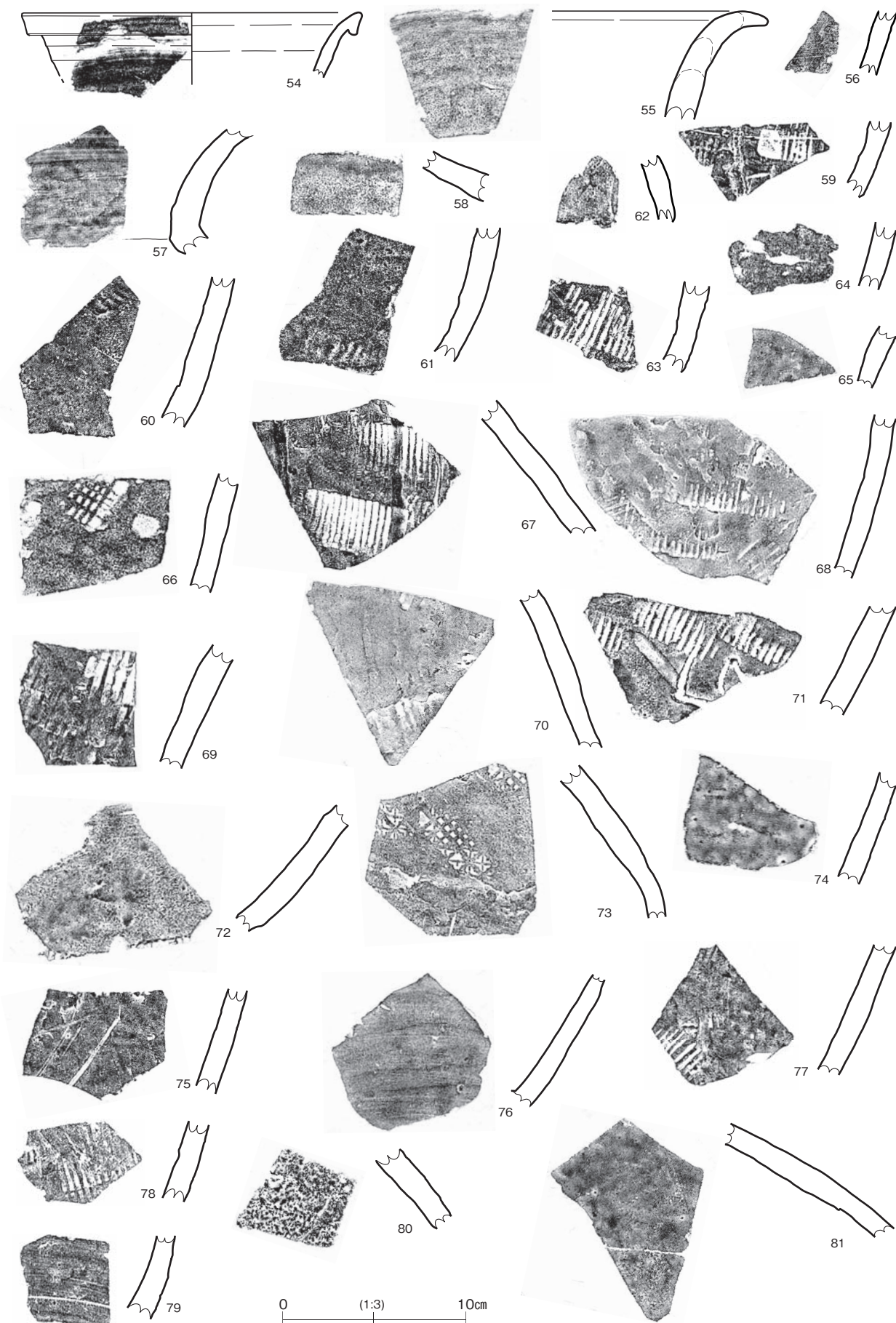


图 23 21SD1 出土土器類実測图 3 (1 : 3)



图 24 21SD1 出土土器類実測図 4 (1:3)

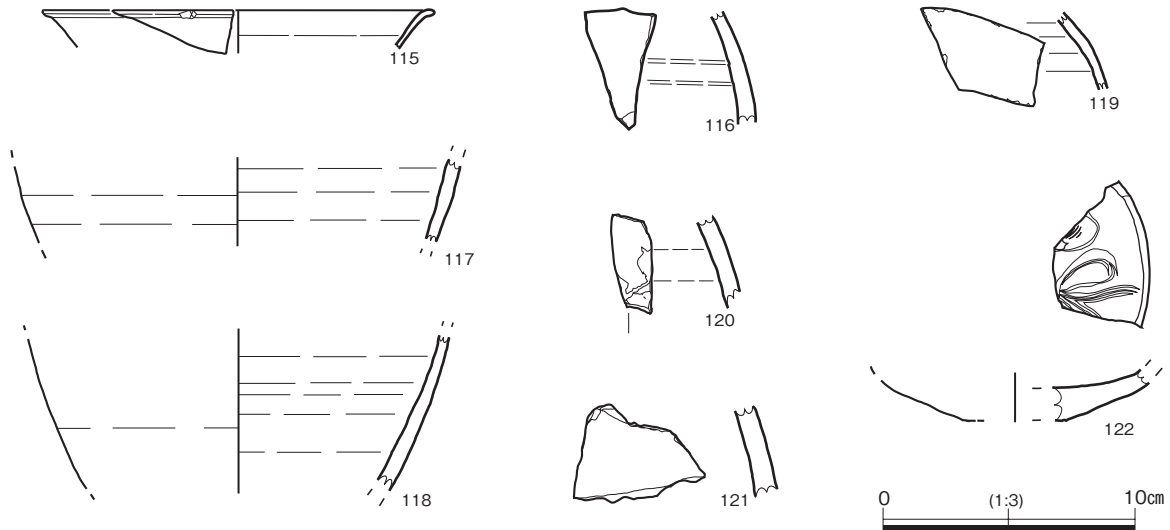


図 25 21SD1 出土土器類実測図 5 (1:3)

クロかわらけの大皿である。5～7、9、10はいずれも口径が14cm以下で、8のみ口径が15.0cmと大きい。底径は6.6～8.0cmと、ややばらつきがあるものの一定の幅におさまる。器高はいずれも4cm以下のものである。底部からの立ち上がり有一部分が一部屈曲し、内湾しながら立ち上がる。底部が突出するものもあるが、いずれも突出は小さく、器高の低い皿形の器形が多い。

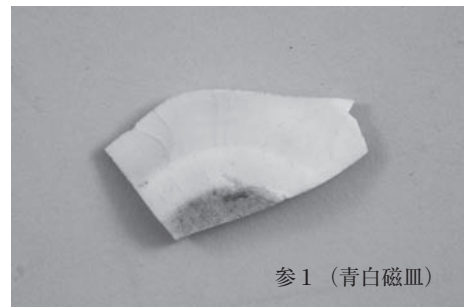


図 26 21SD1 過去の出土遺物例 (参考資料)

11～20は手づくねかわらけの小皿である。口径は8.2～9.5cm、器高が1.3～2.1cmと小型のものである。21～53は手づくねかわらけの大皿である。口径は12.0～14.7cm、器高が2.2～3.4cmで、口径の幅が2.7cmとやや広がっている。堀の性格から、時期幅が広い遺物が含まれることも想定できる。また、口径が13cm以下と小さいものも底面に近い部分から出土している(52)。

かわらけは、底面に近い9層及び底面からの遺物が多く、2～4、9、11、13～20、39～53がそれにあたる。ロクロかわらけ大皿や、手づくねかわらけ大皿には、口径が小さいものや器高が低いものが含まれており、堀の埋没時期を示唆する資料である。

国産陶器は54点を図示した。渥美窯産の陶器は54～82の28点を図示した。出土器種には壺類、甕類、片口鉢がある。54は壺の口縁部片、55は甕類の口縁部片である。いずれも小片のため口径は復元できていない。57は甕の頸部片である。76、79は片口鉢の体部片である。いずれも一部にケズリが施されている。56、58～75、77、78、80、81は甕の体部片である。複数の押印がみられるが、小片のため、位置や単位は判明しない。71は刻字がみられる。常滑窯産の陶器は82～107の26点を図示した。出土器種には壺類、甕類がある。82は甕の口縁部片、86は壺類の底部片である。小片のため底径は不明だが、無台のものである。83～85は壺類の、87～107は甕類の体部片である。甕類には複数の種類の押印が確認できる。この他に須恵器系陶器や須恵器がある。113、114は須恵器系陶器の甕の体部片である。108は須恵器甕の口縁部片で、口縁部は方形で下に突帯が垂れ下がる。109、110は甕類の体部片である。111は壺類の体部片、112は頸部片である。

輸入陶磁器類は8点を図示した。115は碗の口縁部片、116～118は壺の体部片である。116、117は



II類、118はIII類とみられる。119～121は中国産陶器である。壺類で119は肩部、120、121は体部片である。いずれも2次被熱を受けている。122は青磁皿の胴部片で、見込みには櫛状の工具で花文が描かれている。なお、これまでの調査で21SD1からは合計170点の輸入陶磁器が出土している(図26)。

#### 21SD2出土土器・陶磁器類(図27～29)

21SD2は、外側の堀跡である。遺物は旧期の堀、新期の堀、堀を掘り込む土坑(69SX3)のそれぞれから出土している。

かわらけは総重量で90.7kg出土し、その多くは69SX3から出土している。ここではそのうち53点を図示した。123～133はロクロかわらけの小皿である。口径は7.2～9.0cm、底径が4.5～6.5cm、器高が1.6～2.3cmと、口径、底径ではやや幅の広い値を示している。いずれも8層(69SX3)出土遺物である。134～153はロクロかわらけの大皿である。135は旧期の堀の遺物で、底径が小さく、器高の高い椀形の器形をとる。136～150は69SX3から出土した。口径が11.8cm～14.3cm、底径が6.4～8.4cm、器高が2.7～4.0cmである。器高は低いものが多いが、椀形に近い器形のものも含んでいる。また、底部が突出して段をもち、体部が立ち上がる器形が多く、突出が大きいものが目立つ。150は内面全体に漆が付着している。新期の堀から出土した151～153では器高が高いものと、3.5cm以下の低いものとがある。

154～158は手づくねかわらけの小皿である。154～157は69SX3からの、158は新期の堀からの出土である。101は墨書があるが小破片のため、釈読は不明である。158は底部に穿孔が行われている。159～179は手づくねかわらけの大皿である。160～176は69SX3からの出土である。口径は12.1～13.9cm、器高は3cm前後で、やや幅はあるものの、口径、器高ともに小さい値を示している。169、175はいずれも口径が12cm前後と小さく、新しい様相をもつ。177～179は新期の堀からの出土で、口径が13cm以下のものと、やや大きいものがある。器高も同様に3cm以下のものと、高いものとにわかれる。

国産陶器は5点を図示し、渥美窯産の陶器は180～182の3点を図示した。180、181は甕の体部片である。押印が確認できる。182は片口鉢の体部片である。一部にケズリが行われている。183、184は常滑窯産の陶器で、183は甕の体部片である。184は片口鉢の底部片である。体部下半には回転ヘラケズリが行われている。輸入陶磁器は1点を図示した。193は中国産陶器の壺の体部片である。全体が2次被熱を受けており、内面は剥離している。この他に須恵器系陶器や須恵器があり、8点を図示している。185は須恵器系陶器の甕体部片である。186～191は須恵器甕の体部片である。192は須恵器坏の底部片で回転糸切り無調整である。

#### 21SX4出土土器・陶磁器類(図30)

21SX4は、一部のトレンチのみ精査を行っており、遺物出土量は多くない。ここでは、かわらけ1点、国産陶器2点、輸入陶磁器2点を図示した。194は手づくねかわらけの大皿である。口径が13.3cm、器高が3.0cmで口径は小さく、21SD1出土遺物と近似した値をとる。1段ナデで、底部にはスノコ圧痕や指オサエの痕跡が残る。195、196は常滑窯産の甕類の体部片で、押印が一部確認できる。197は白磁碗の胴部片である。胴部下半には施釉されない。198は白磁碗の胴部片である。

#### 整地層出土土器・陶磁器類(図30)

21SD2の上層に確認された整地層出土の土器類である。かわらけ3点、国産陶器2点、須恵器1

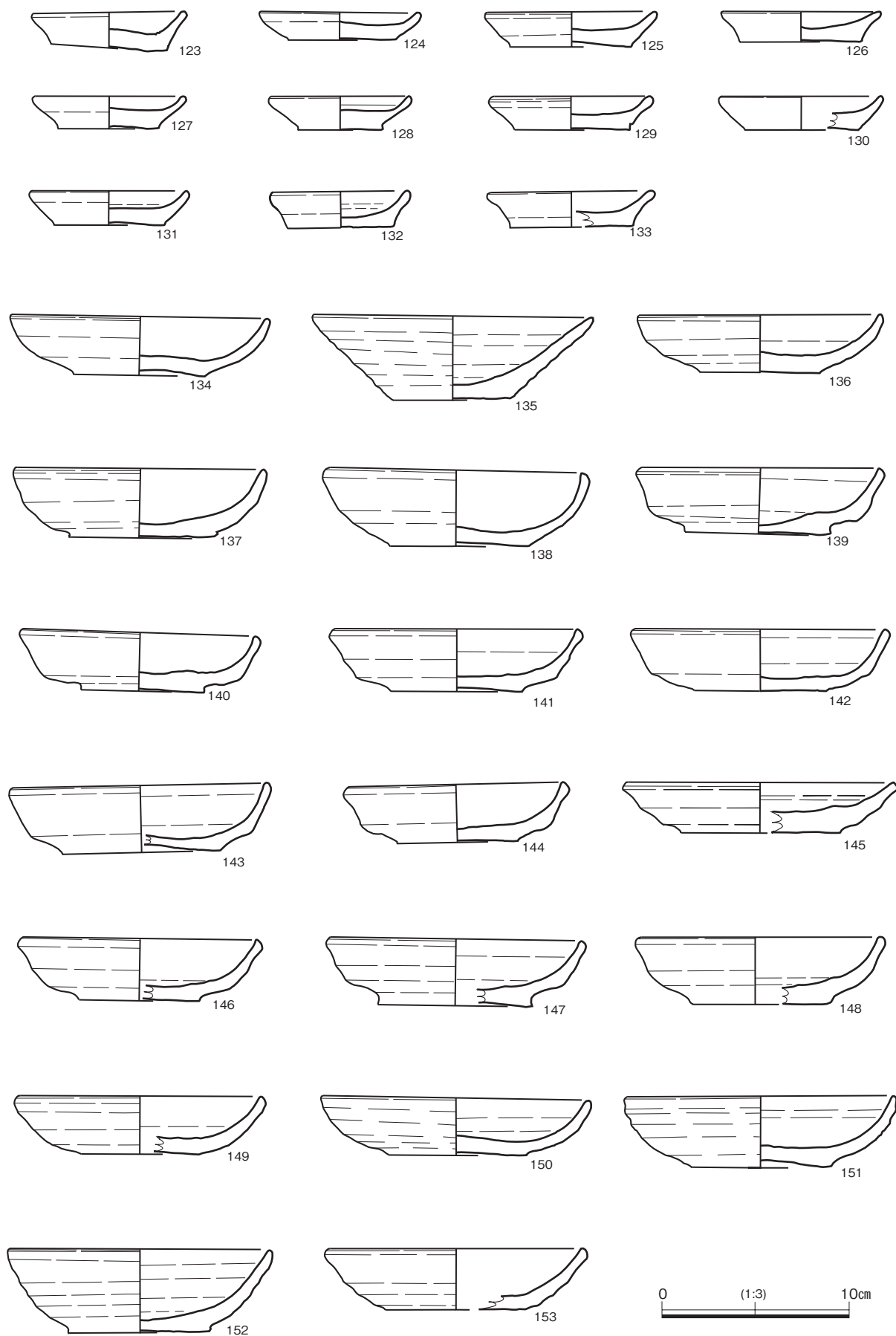


図 27 21SD2 出土土器類実測図 1 (1:3)

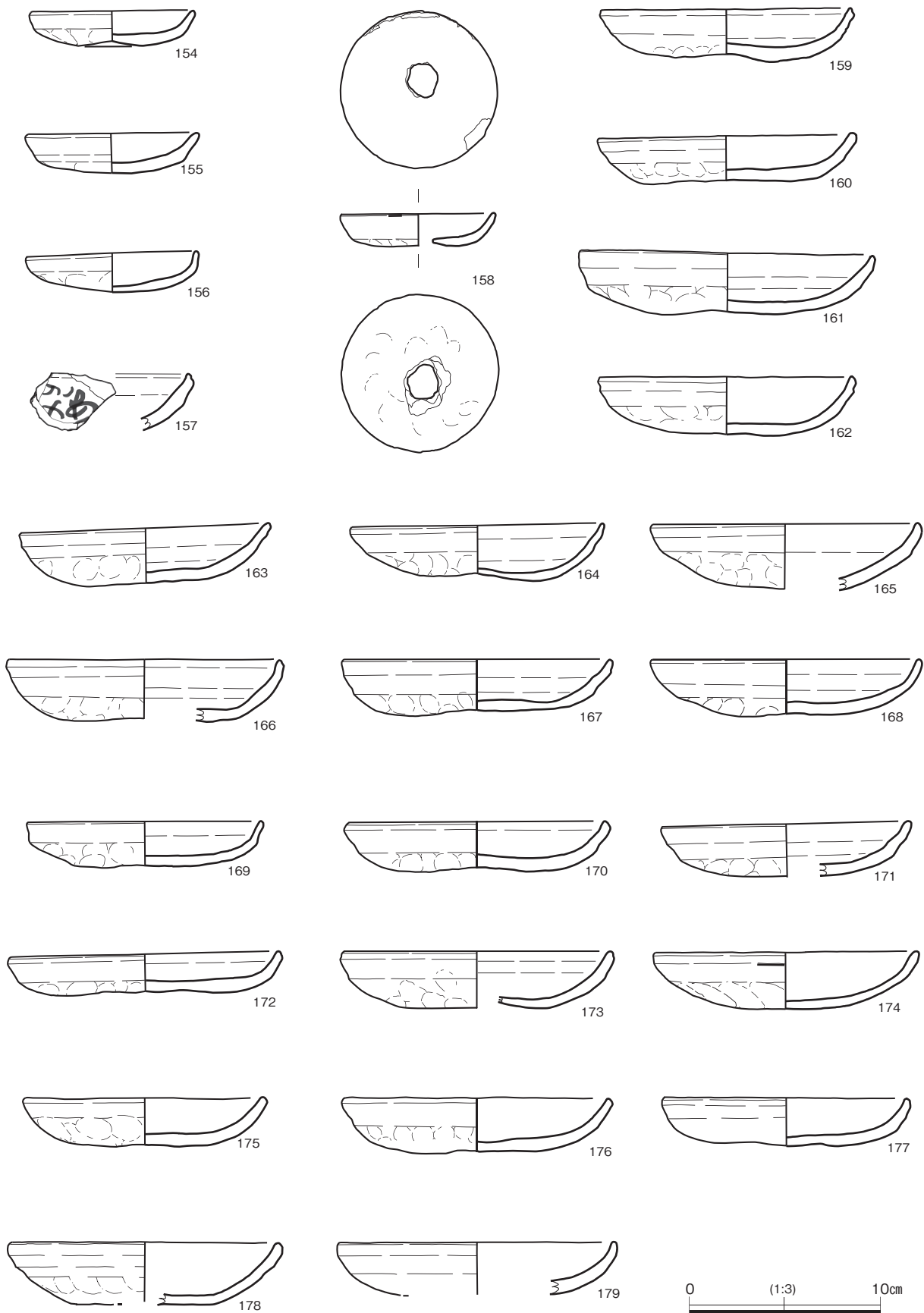


図 28 21SD2 出土土器類実測図 2 (1:3)

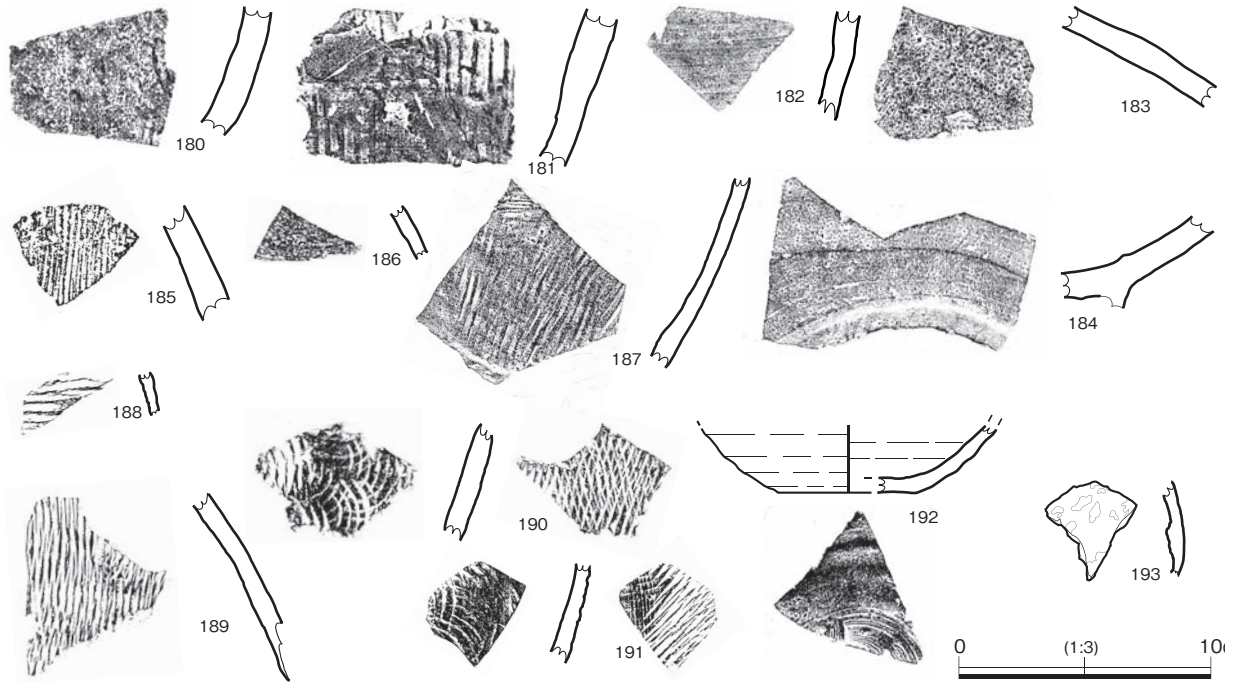


図29 21SD2出土土器類実測図3 (1:3)

点を図示した。199はロクロかわらけの大皿である。口径が13.4cm、底径が7.3cm、器高が3.4cmと皿形の器形をとる。200、201は手づくねかわらけの大皿である。いずれも口径が13.5cm前後、器高が3.5cm前後である。202、204は渥美窯産の甕類の胴部片で、外面には押印が確認できる。203は渥美窯産の片口鉢の体部から底部にかけての破片で、外面には一部にケズリの痕跡がみられる。205は須恵器壺類の胴部片である。内外面にナデ調整が行われている。

遺物包含層(Ⅱ～Ⅳ層)出土土器・陶磁器類(図31～32)

Ⅱ～Ⅳ層は、21SD2の上層に厚く堆積した遺物包含層で、出土した遺物は流水等によって流れ込んだものと考えている。ここではかわらけ1点、国産陶器24点、須恵器3点を図示した。

Ⅱ～Ⅲ層出土遺物では、206はロクロかわらけの小皿で、口径7.8cm、底径5.9cm、器高1.5cmである。体部上部から口縁部にかけて外に屈曲する。207～211は渥美窯産の甕類の胴部片である。207、208、210には押印が確認できるが、単位や位置は不明である。外面には釉がみられるものもある。212～216は常滑窯産の陶器片である。212は三筋壺の胴部片である。筋は1条のみ確認できるが、一部で2重になっている。212、214～216は甕の胴部片である。いずれも破片が小さく位置は不明だが、押印が確認できるものがある。217、218は須恵器甕類の体部片である。

また、Ⅳ層出土遺物では、219～223は渥美窯産の陶器片である。218は甕の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部の残存が少なく、口径は復元できていない。219～223は甕の胴部破片である。224～232は常滑窯産の陶器片である。224は壺類の胴部片、225～232は甕の胴部片である。複数の種類の押印がある。233は須恵器甕の体部片である。

その他の出土土器・陶磁器類(図33)

上記までに述べた遺構・層以外から出土した、遺構検出時の遺物などから代表的なものを抽出し5

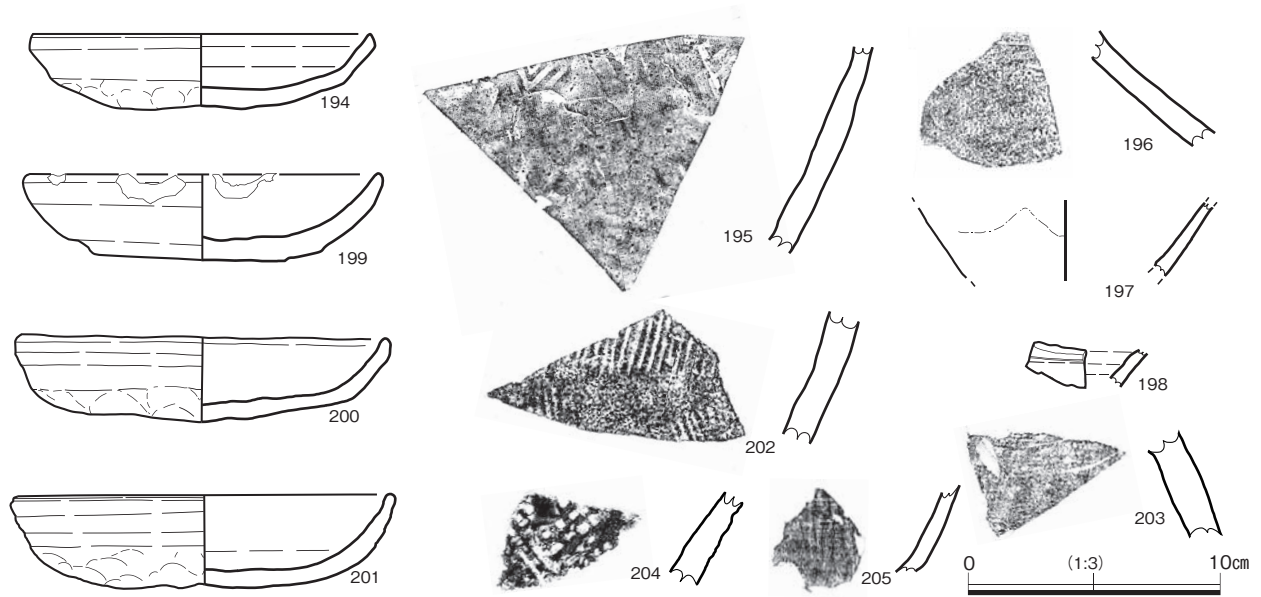


図30 その他遺構出土土器実測図(1:3)

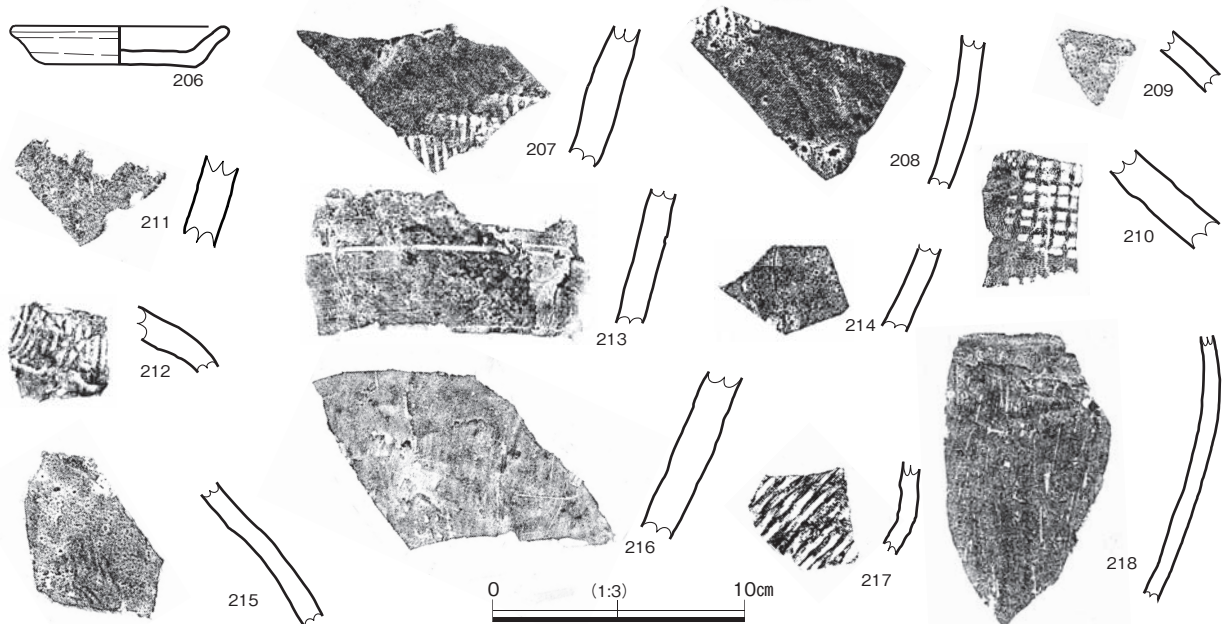


図31 包含層出土土器類実測図1(1:3)

点を図示した。234は渥美窯産の片口鉢の底部片である。胴部下半と底部には回転ヘラケズリが行われている。235は常滑窯産の甕類の体部上半部の破片である。外面には自然釉がかかる。236～238は須恵器甕類の体部片である。236は体部上半の頸部との接合部の破片、237は体部の破片である。236、237は赤褐色の胎土が特徴的である。238は須恵器甕類の体部破片である。(櫻井)

### (3) 木簡・木製品・漆製品

加工痕の残るもの122点+橋材17点を登録しており(種子8点、未実測3点を含む)、図示可能なものは基本的に全て掲載している。そのほか加工痕の残らない自然木がある。木製品の多くは21SD2内のC層からの出土である。土器類とともに廃棄に伴うものと想定している。

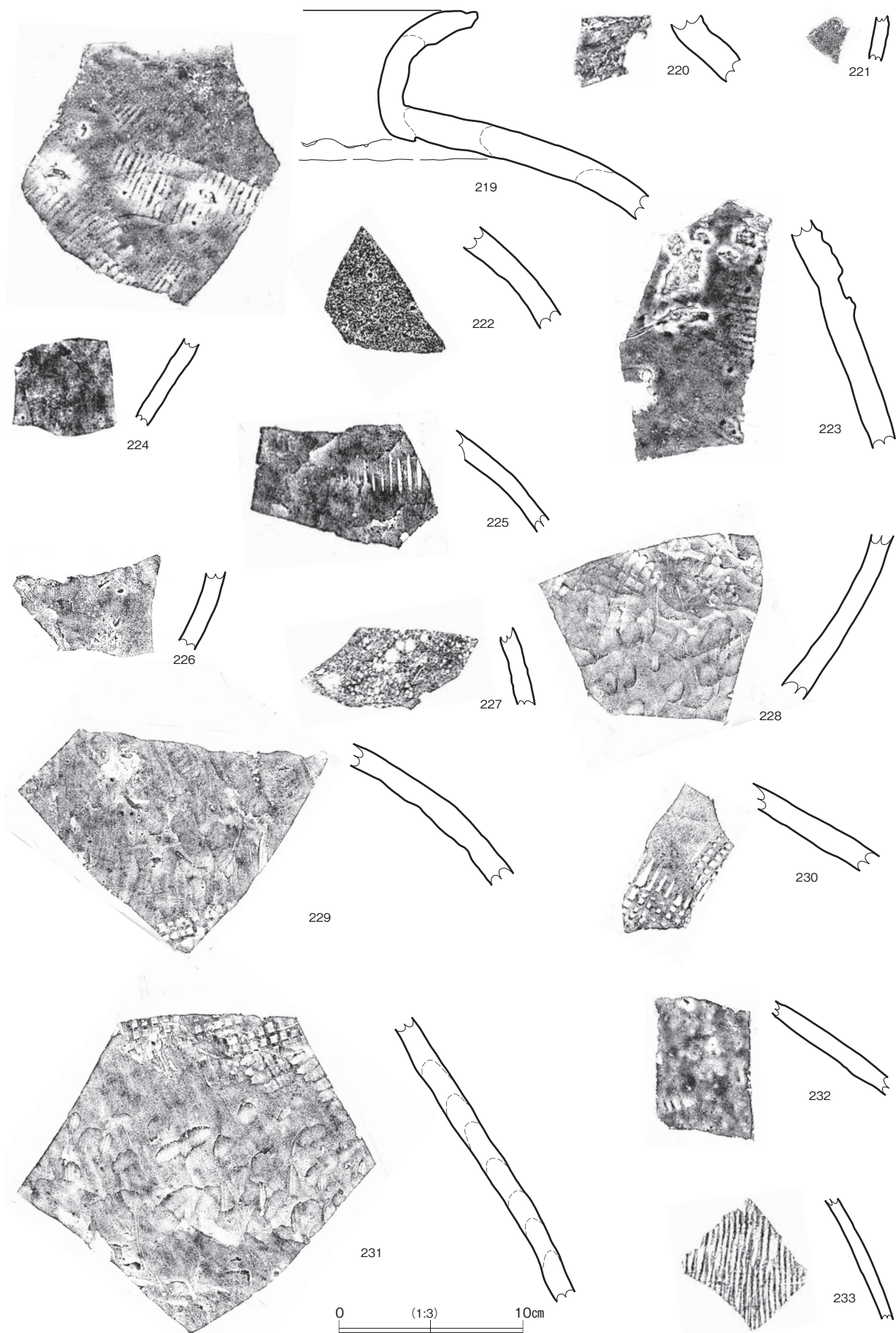


图 32 包含層出土土器類実測图 2 (1:3)

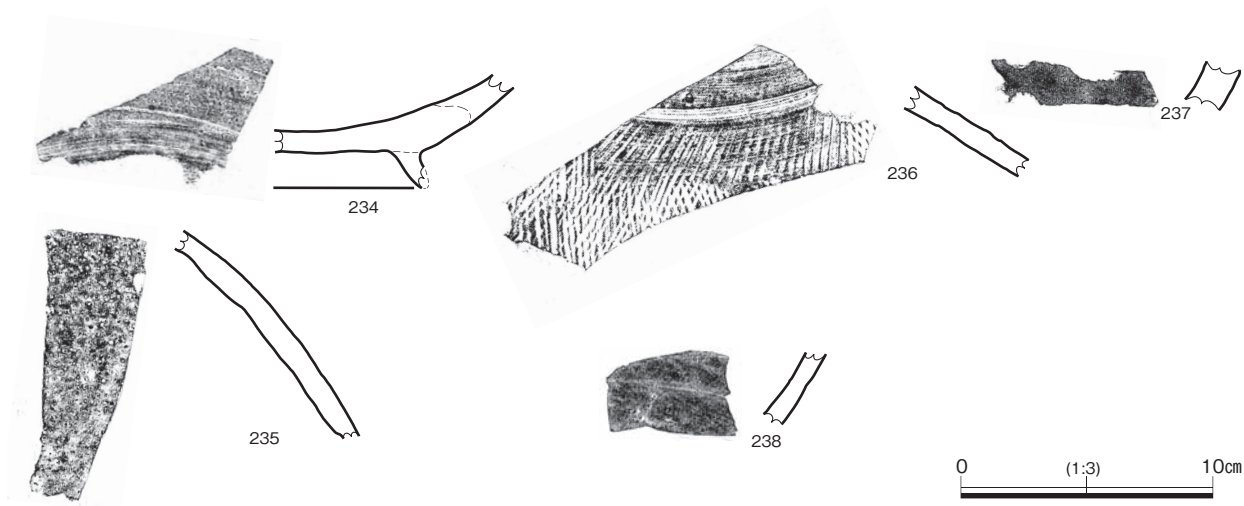


図 33 遺構外出土土器類実測図 (1:3)

## 木簡(図34)

**木簡(239・240)** 長さ13.5cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmの短冊状である。下端が欠損しているため長さは現存である。文面は「タラウタユニ丈」である。片仮名5文字と漢字2文字からなる文章で、片仮名部分と漢字部分では筆跡が異なる。解釈については付章1を参照。240は長さ6cm、幅が2.4cmの題箋状の材である。上下両端は欠損しているが、基部をみると、上下ともに細く削り出されている。両面に文字が書かれるが未解読である。

## 木製品(図34～44)

**曲げ物(241・242)** 2点とも円形曲げ物の底板の一部である。241は直径が7.4cmの小型品、242は直径23.8cmの中型である。いずれも半分を欠損している。

**針(243)** 先端が尖ることから針と分類したものである。断面は円形ではなく厚さ4mmほどの方形を呈する。異なる一端には2箇所から面取りが施されている。

**箸(244)** 1点のみがある。複数回の面取りが施され棒状にしたものである。中央あたりの断面形は方形に近いが、両端とも端部付近では断面形が円形となる。箸先部分は欠損しており、長さは現存で16.8cmである。

**篋(245)** 薄板を加工して篋状にするもので、先端が直線的なものを篋とした。平面には加工痕が明瞭に残る。長さ17.8cm、厚さ0.8cmである

**鞆(246)** 鞆の側板の一部である。中央が凹形に加工されていることから鞆とした。両端とも欠損しており、長さは現存で9.2cmである。

**火鑽り板(247)** 角形の細長い木材であり、火鑽りの孔が1箇所穿たれている。V字形に切り込みを入れてから、火鑽りを行ったと考えられる。孔の内面は炭化している。また小孔が、その上部に穿たれており、わずかに反対面まで到達している。一端は欠損しており、長さは現存で19.2cmである。

**杓子(248)** 薄板を杓文字状に加工したもので、側面と柄部が欠損している。先端が曲面を呈するものを杓子としている。側面の一部には炭化が認められる。

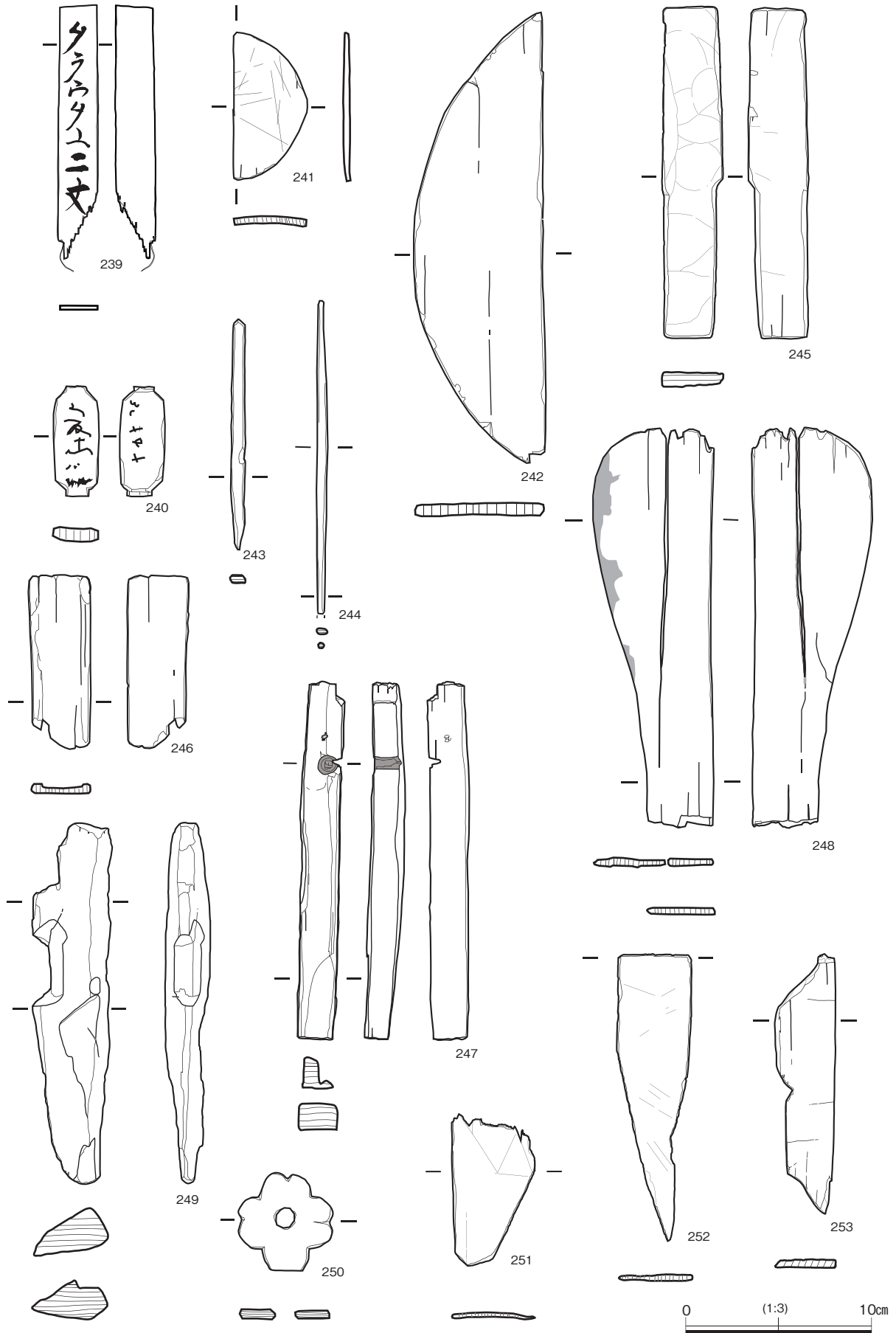


図 34 木製品実測図 1 (1 : 3)



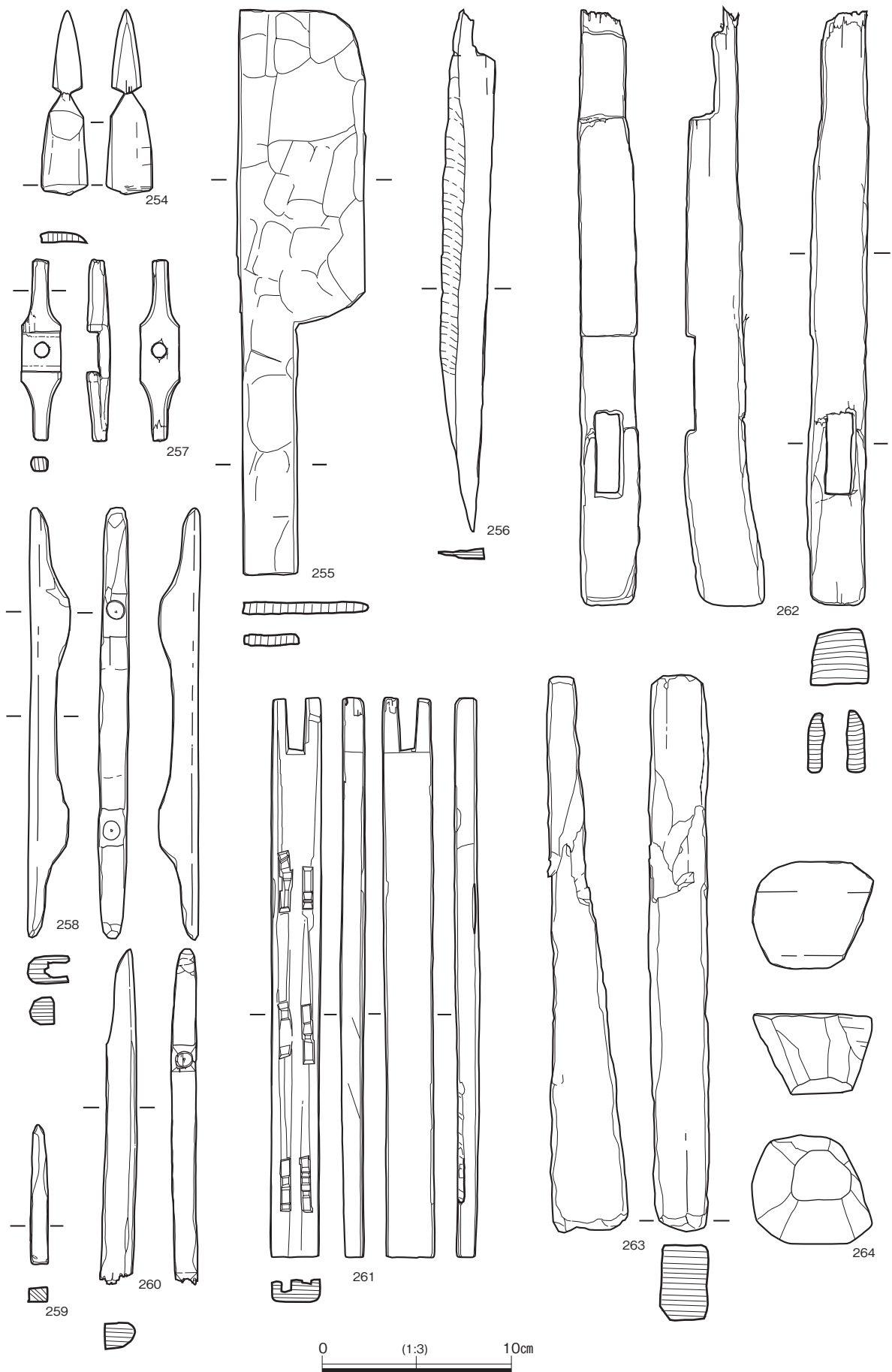


图 35 木製品実測図 2 (1:3)

**下駄(249)** 差歯下駄の台の一部と想定しているものである。凹面部が1箇所確認できる以外はその痕跡はほとんどない。そのため、別の製品の可能性もあるが、ここでは下駄に分類した。

**飾具(250～253)** 薄板を花形などの形状に加工したものやその一部と推定されるものである。用途は不明であり、形代のように定型した形ではないものを飾具として一括した。250のように花卉形を呈するものや251～253のように形状を表現するのに難しいものまでを含む。そもそも製品として存在するのか、それとも何らかの加工の際に排出される屑なのかは判断がつかないものもある。したがって、ここで飾具としたものは便宜上のものであり、今後再分類されるものである。

**形代(254～256)** 3点が出土している。254は鎌形としたものである。形状的に鐮矢にも見えるがその他の製品かもしれない。長さは9.7cmである。255は包丁形に加工された薄板で、全体に加工痕が残る。籠状に使用した道具かもしれない。長さは29.6cm、幅が6.7cm、厚さが0.6cmである。256は部材の一部とも考えられるが、刃部を加工していると判断して刀形としたものである。茎部と刃部の一部が欠損している。現存の長さは25.3cmである。

**糸巻(257～260)** 横木が1点(257)、梓木が3点(258～260)出土している。257は横木の半分で本来は同じものが組み合う。中央には直径0.8cmの孔が1箇所穿たれている。長さは9.5cm、幅が2.1cmと小型の部類に属する。梓木は258のみが完形である。259・260は梓木の一部を欠損している。長さは22.7cmである。

**脚(262・263)** 唐櫃や机などの脚に相当するものである。262は上端部と下端付近に仕口・継手の痕跡が残る。また、下端には長さ4.2cmの柄穴が穿たれている。長さは31.2cmである。263は継手や仕口の痕跡は確認できないが、262同様に形状から脚と考えた。長さ29.3cmである。

**栓(264)** 口を塞ぐ道具として栓がある。264は一端が広い円柱状に作り出された材である。上面に加工痕が残らないため、あるいは材を削り抜く際に生じた端材かもしれない。

**不明木製品(261)** 何らかの製品を構成していた部材である。長さ29.3cm、幅2.6cmの板材で、上端に切り欠きがあり、1面には方形の凹みが6箇所穿たれている。いずれも貫通していない。

**杭状(265・266)** 先端が杭状の尖るものである。265は矢板状に加工された板材である。基部は欠損しており、本来の長さは不明である。266は丸杭の先端部分である。残存部から推定すると、直径5cmである。

**部材(267・268)** 仕口や継手などの接合痕跡が確認できるものを一括した。267は板状の材である。約半分が一段低く整形されており、ここに他の材を接合したのであろう。268は長さ12.7cmの脚状を呈す材である。上端部を削り出し、柄にしている。

**折敷片(269～311)** 薄い板状の材をすべて折敷片として一括した。隅角部が加工されているものについては折敷の可能性が高いが、板状のものは破片のため、折敷か板材なのか判断が難しいものもある。しかし、長さは(完存部で)30cm前後におさまるものがほとんどのため、大きさが推定できるものはここに含めている。完形品は出土していない。刃物痕が残るものが多い(270・272～274・276・277・280・287・293・294・296・298・300・303・305・306・309)。296は上下端に樹皮の痕跡が残っている。棧の皮綴じ痕かもしれない。薄板状に整形するために加工した痕跡(手斧痕か)が残るものもある(279・290・307)。

**その他加工痕残る木片(312～337)** 製品を特定できないが、加工痕跡の残る木片を一括している。大きくは板状(312～323、330・331)、棒状のもの(332～337)、筒状(324・325)や柄頭状(327～329)に形態で分けている。板状のものは折敷片の可能性が高いが極小片である。柄頭状にしたが、断面がかまぼこ形を呈するものをまとめた。323は隅丸の方形板の周縁を面取りしたもので、覆輪が装着さ

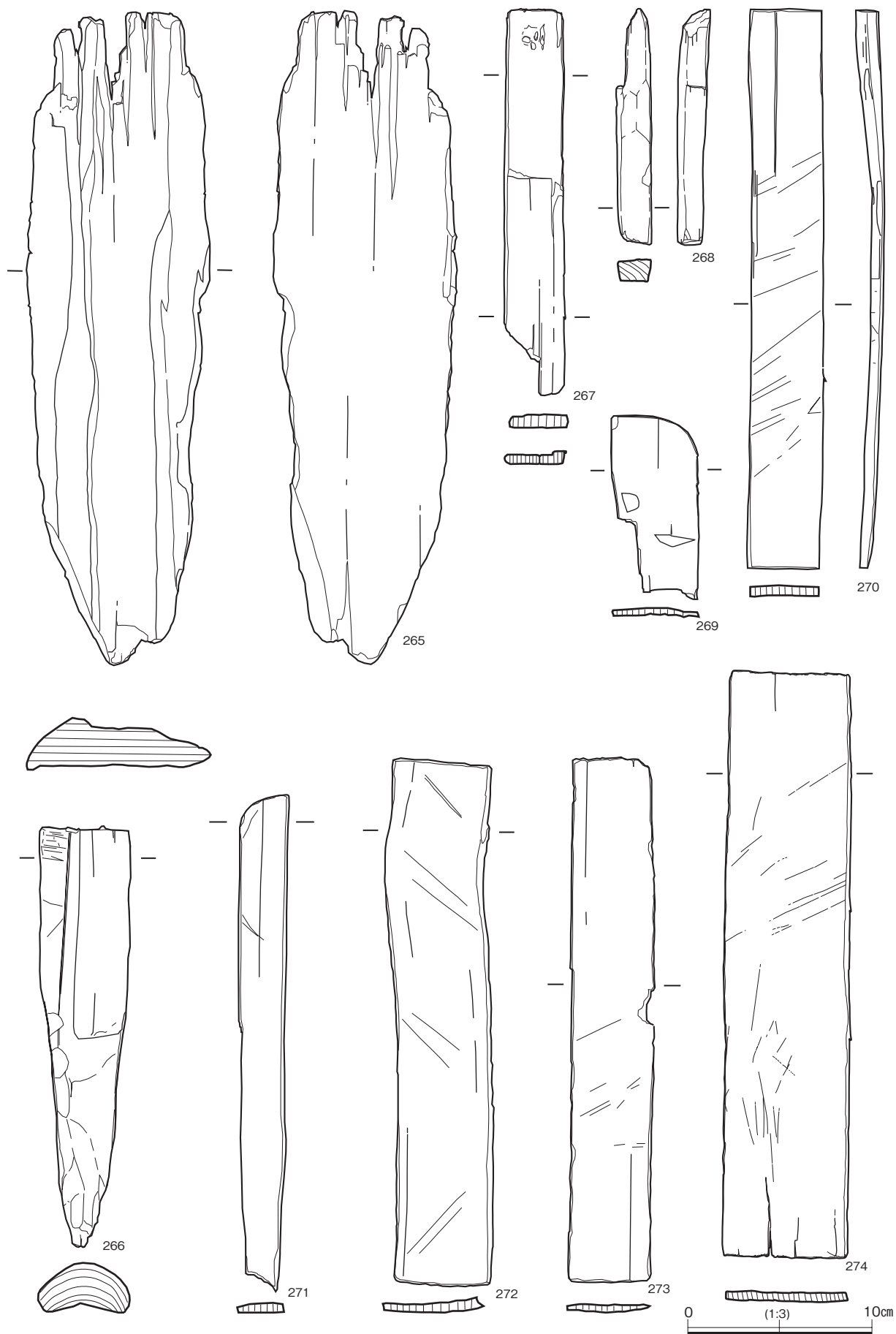


图 36 木製品実測图 3 (1:3)

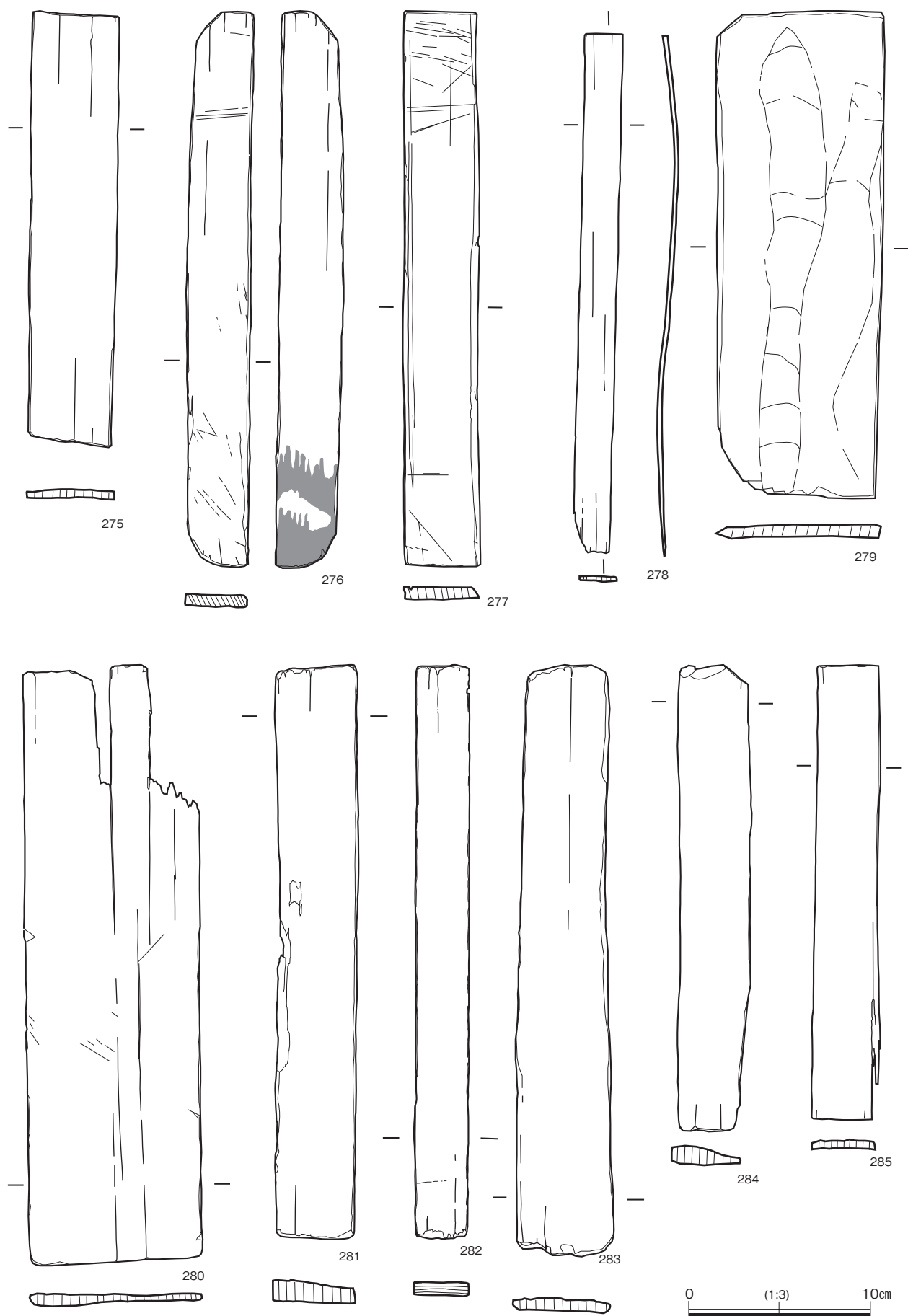


图 37 木製品実測图 4 (1:3)

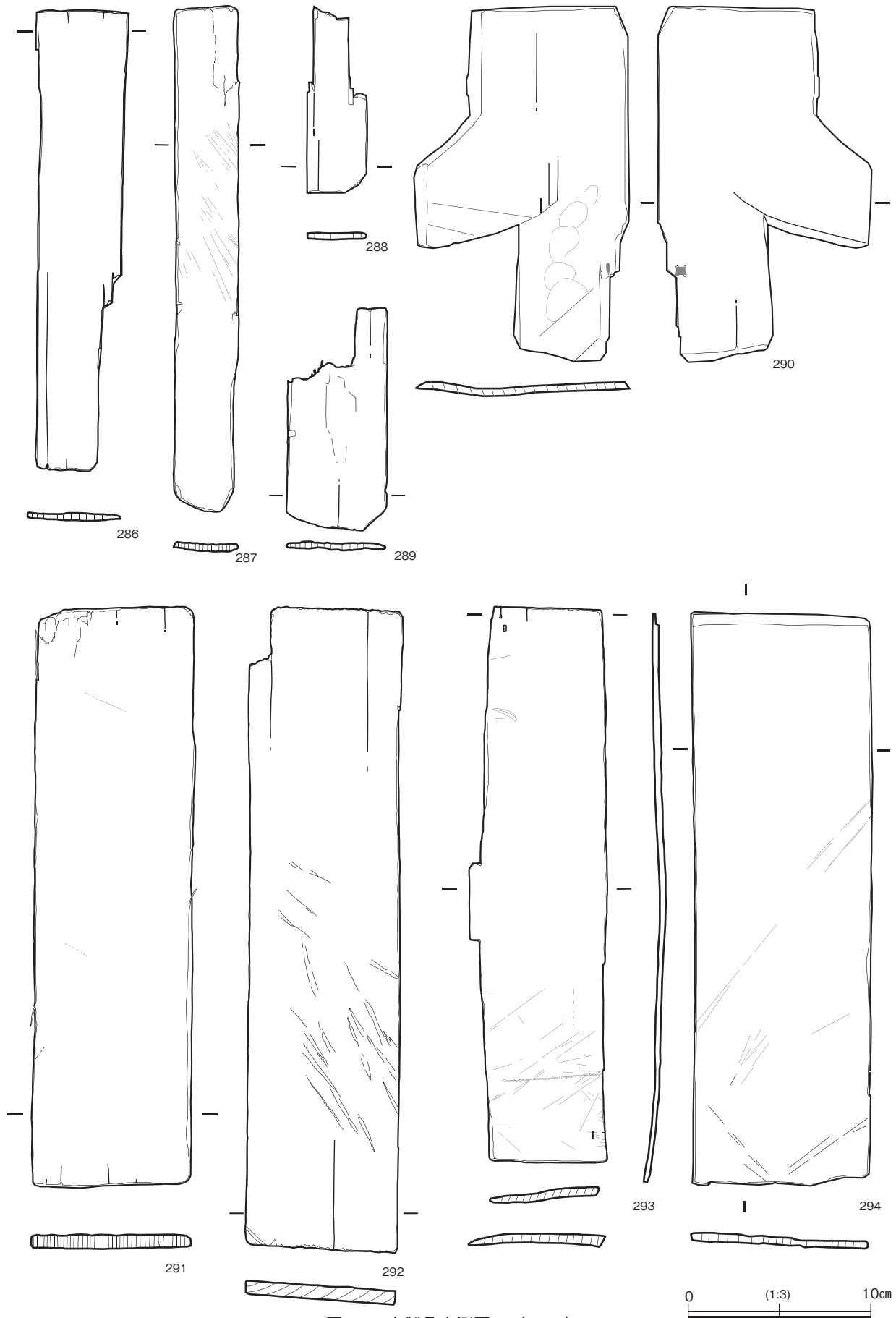


図 38 木製品実測図 5 (1:3)

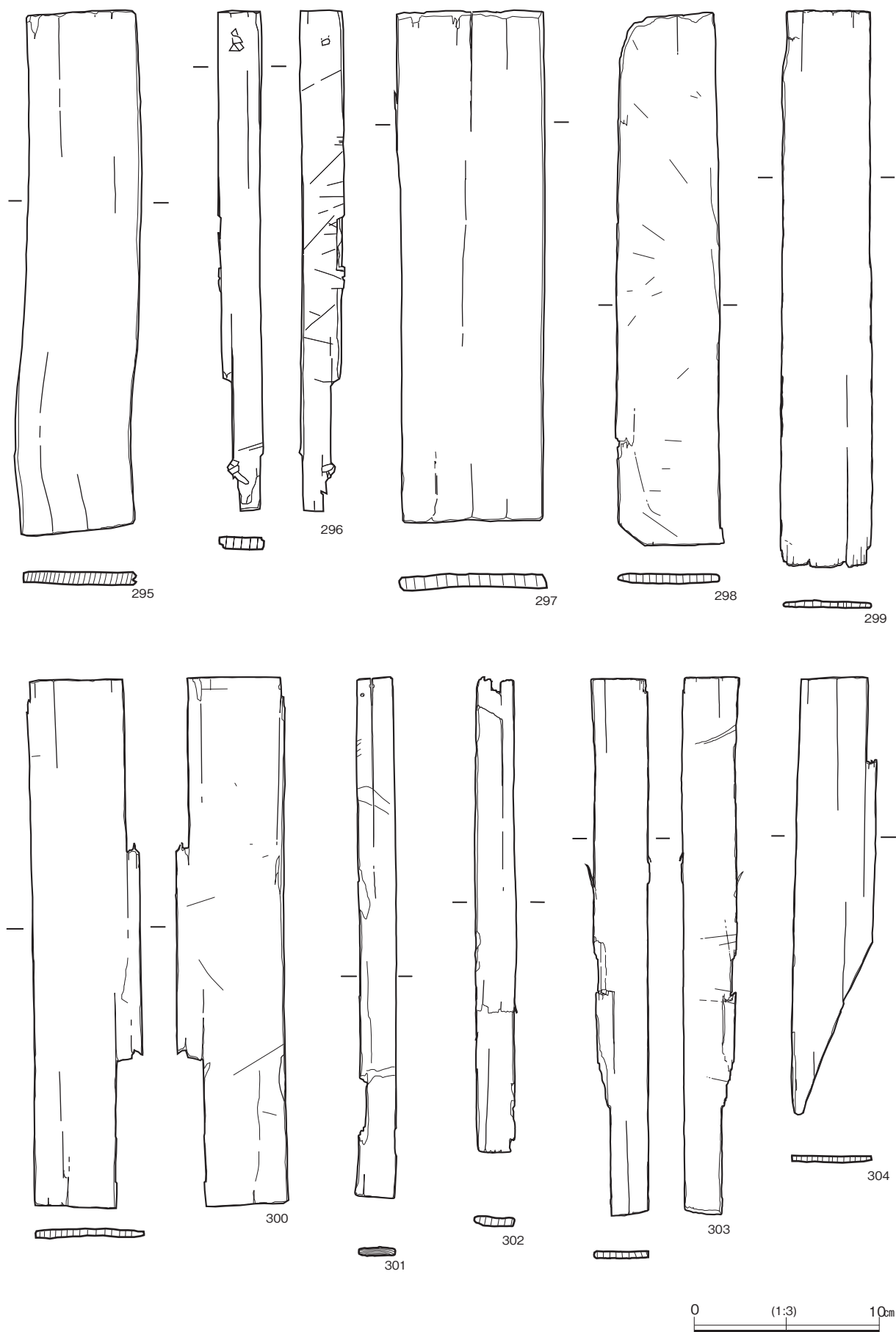


図 39 木製品実測図 6 (1 : 3)

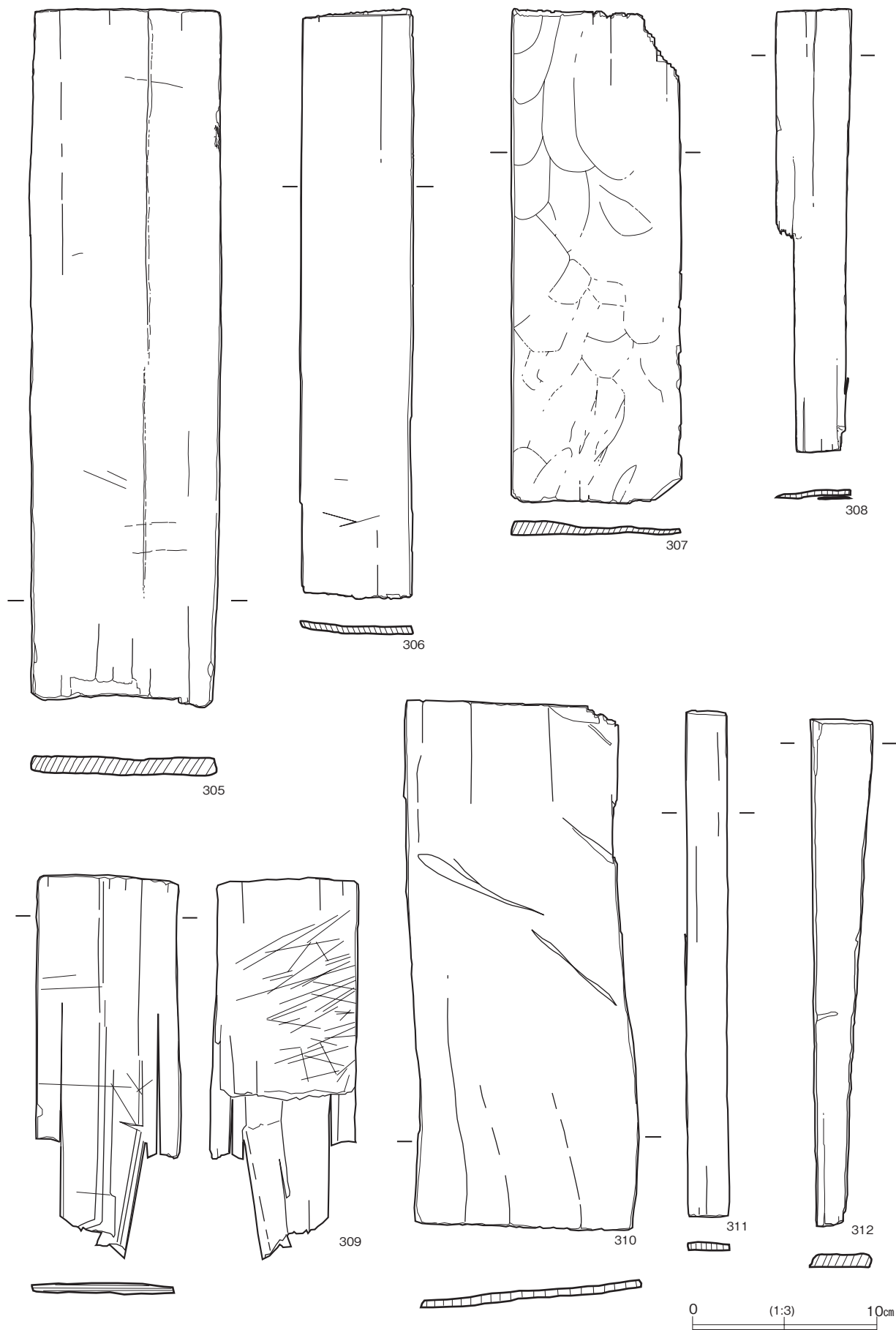


图 40 木製品実測图 7 (1:3)



図 41 木製品実測図 8・漆製品実測図 1 (1:3)



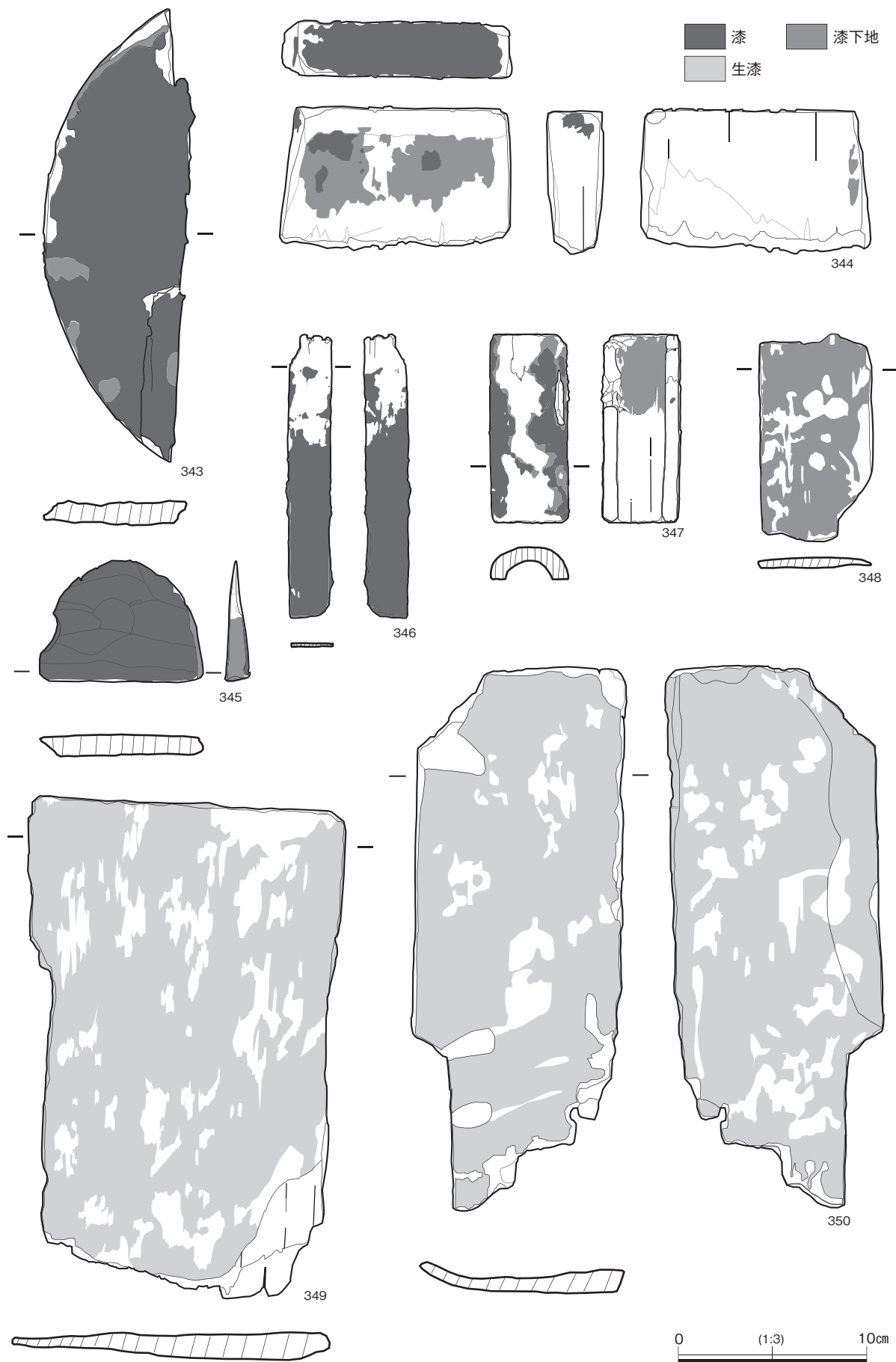


図 42 漆製品実測図 2 (1:3)

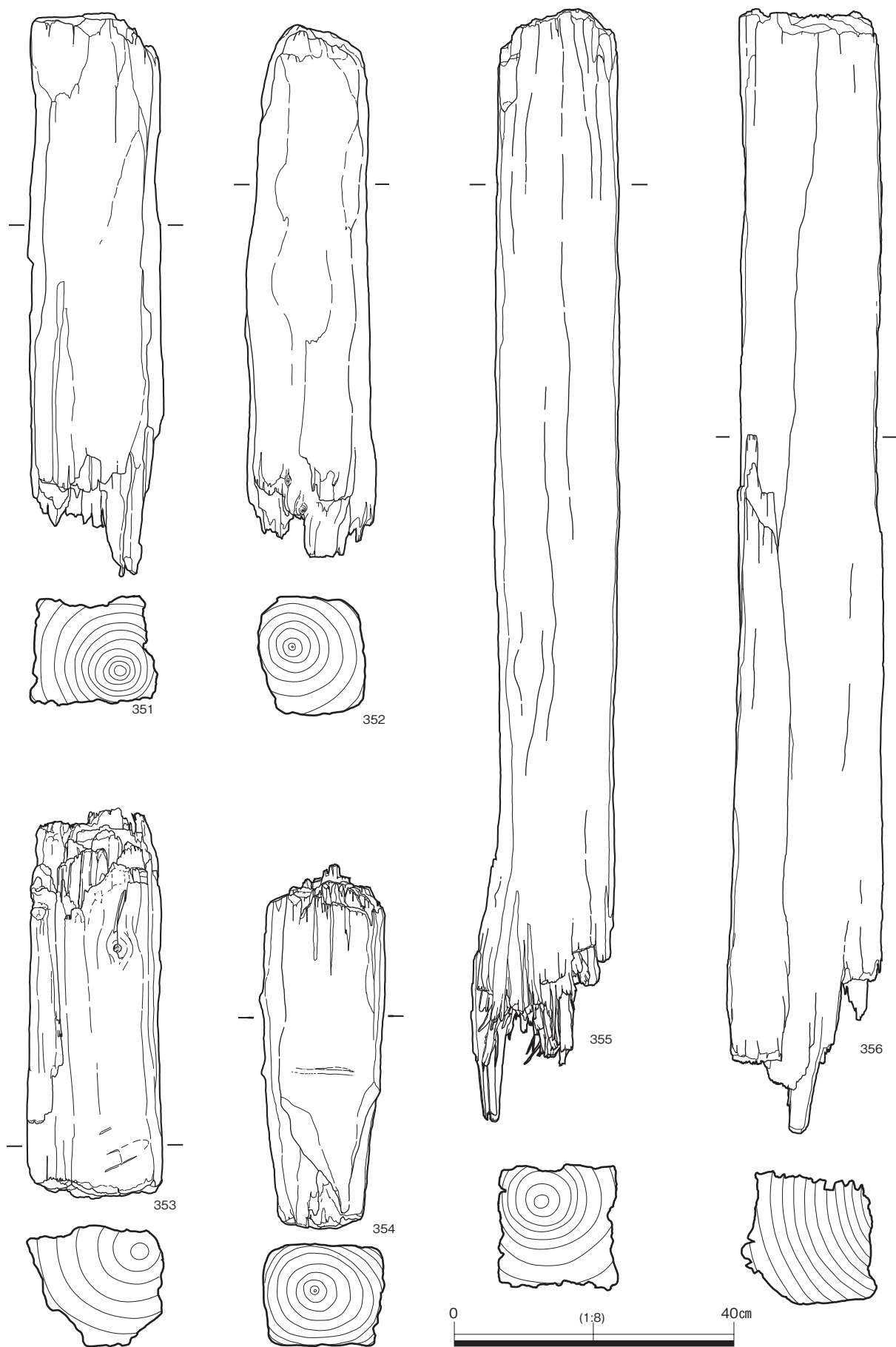


图 43 橋部材実測図 1



图 44 橋部材実測图 2

れば柄頭になるものかもしれない。

#### 漆製品(図41～42)

**椀(338～3342)** 漆器椀が破片を含めて5点出土している。338は口径16.6cmの椀で、高台が欠損している。内外面とも黒漆である。339は破片であるが反転復元している。復元口径は19cmである。底部を欠損している。340～342は漆椀あるいは皿の一部である、342のみ朱漆である。

**曲物底板(343)** 曲げ物底板の一部である。上面には皺のよった漆膜が全面に残る。そのため、2次焼成により変形した可能性もあるが、容器の底に溜まった漆なのかもしれない。

**漆下駄・歯(344・345)** 344は台形状の板材で両面とほぼ全面に漆の痕跡が残る下駄歯である。下駄台部との装着箇所(上端部)にも漆膜の痕跡が残る。下部は欠損している。幅は12.2cm、厚さ3cmである。345は下駄台部の一部と推定している。表面に漆が残る。

**籠(345)** 長方形の板材を籠としたもので、半分より下端までに厚さが不均等な漆が付着する。

**筒状漆製品(347)** 製品名は特定できないが、完存する部品であろう。断面が半円形を呈し、内部が剥り抜かれている。同じ部品が2つ合わせれば柄になるかもしれない。長さ10cm、幅が4.2cmである。

**折敷片(348～350)** 折敷状の板材に生漆状の痕跡が残る薄板材である。分析を行っていないため生漆とは異なるかもしれない。347・348は片面のみに、350は両面にその痕跡が残る。348は349と同一個体かもしれないが接合はしない。

#### 橋部材(図43～44)

**橋部材(351～366)** 15点出土し、全て実測している。長さが最大のものは現存で160cmの355・356であるが、これらは先端が破損しているため、本来はさらに長かったと予想される。

断面が正方形状を呈する角材(351～356、360～363・366)が多いが、なかには板状の材もある(359・364・365)。これらの部材は過去の調査21次・43次調査でも出土しており、とくに後者の調査では35点もまとめて出土している。いずれも69SX3の範囲に含まれると想定している。これらの部材はその長さや太さなどから橋を構成する桁材ではないかと考えられている。したがって、まとめて出土した351～366についても同様に橋を構成する部材ではないかと考えている。(西澤)

#### (4) 瓦 (図45・表13)

瓦は瓦当文様の判明する軒瓦は含まれていないが、出土例が少ないため、小片も含めて3点を図示している。平瓦(368・369)はいずれも小片で、摩耗が著しく調整等は不明である。368は端部破片だが、ケズリ等の調整は行われていない。丸瓦(367)は外面は縄タタキ目が明瞭に残る。一部はナデ調整があり、タタキ目がつぶれている範囲もあり、調整台の使用も考えられる。断面形態の屈曲が明瞭である。内面には布目が残る。胎土には海綿骨針を含んでいる。(櫻井)

#### (5) 石製品 (図45・表16)

石器・石製品・桂化木・鉍石を含めて27点が出土している。このうち図示したものは12世紀に属すると考えられる砥石2点のみである。

**砥石(372・373)** 372は薄い板状を呈する形状で、摺理面によって割れた薄片を砥石利用している。特に側面の使用が顕著である。373も砥石の一部で、両面をよく使用している。材質は砂岩である。

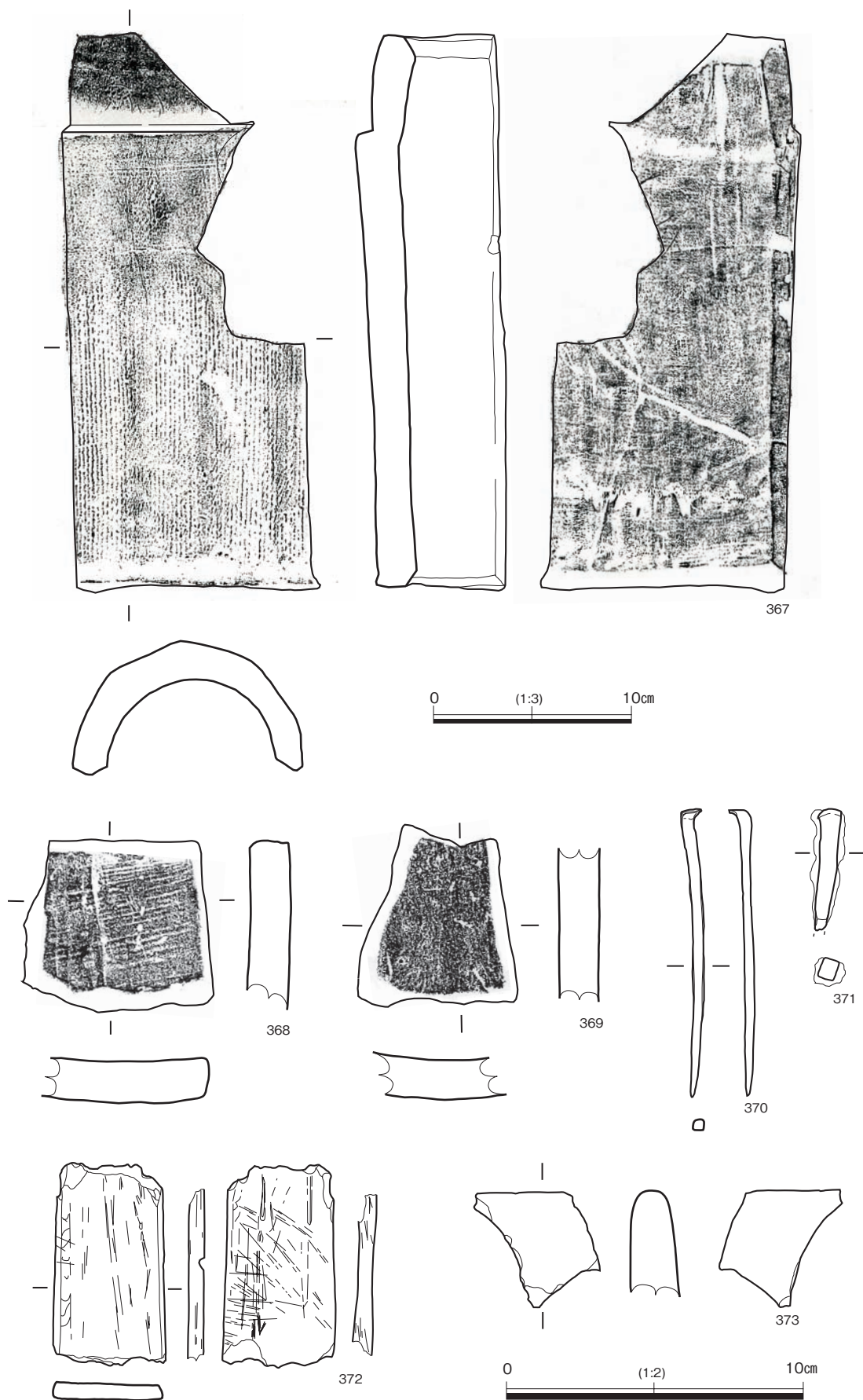


図45 瓦・石製品・金属製品実測図 (1:2, 1:3)

(6) 金属製品 (図 45・表 17)

金属製品は平安時代に属するものは鉄釘 2 点のみであり、図示している。

**鉄釘**(370・371) 370は長さ9.5cmで、上端部が屈曲している折釘である。371も同様であるが、下端を欠損している。現存で長さは4.2cmである。

(西澤)

### Ⅲ 自然科学分析

#### 1. はじめに

柳之御所遺跡は北上川西岸と猫間が淵に挟まれた標高約25mに立地する。本遺跡は、奥州藤原氏の初代清衡、二代基衡の居館あるいは義経の居所と伝承されてきたが、大規模な発掘調査により12世紀奥州藤原氏に関連する遺構・遺物が大量に発見され、古代から中世へと日本の歴史が大きく変わる時代の居館を伝える全国的にも数少ない遺跡とされている。ここでは外堀と内堀の形成時期と、内堀の堆積環境及び周辺植生や生業を解明することを目的に、放射性炭素年代測定と、花粉化石群、大型植物化石群、珪藻化石群の調査を行った。

#### 2. 試料と方法

放射性炭素年代測定試料は、内堀 (21SD1) から出土した木製品と、外堀 (21SD2) の橋部材である。花粉化石群と、大型植物化石群、珪藻化石群の各試料は、内堀 (21SD1) 内堆積物の底部約60cm (10,11,14各層) より一括で取り上げられた3試料である (表5)。内堀は谷状で幅14m、深さ約2.5mである。なお、試料採取地点のセクション図や堆積物の詳細等については関係する項を参照されたい。

##### a) 放射性炭素年代

放射性炭素年代測定は、木製品付着材と橋部材の7試料について行った。測定試料は数年輪幅の木材である。測定は地球科学研究所を通してBETA Analytic に依頼した。試料の前処理は酸-アルカリ-酸洗浄を行い、加速器質量分析法 (AMS法) により測定した。

##### b) 花粉化石群

花粉化石の抽出は、試料約2gを秤量し10%KOH (湯煎約15分)、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48%HF (約15分)、重液分離 (比重2.15の臭化亜鉛)、アセトリシス処理 (濃硫酸 1: 無水酢酸 9 の混液で湯煎 5分) の順に処理を行った。なお、粗粒な植物遺体を多く含む試料についてはKOH処理後に250 $\mu$ mの篩で取り除いた。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈シタッチミキサーで十分攪拌後、マイクロピペットで取り重量を測定 (感量0.1mg) しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調

表5 Aトレンチ9層出土分析試料の堆積物の特性

分析項目	試料	遺構	層位	堆積物の特徴	砂	泥	強熱減量 (有機物)
花粉	8	21SD1 (堀跡)	Aトレンチ9層	褐灰色砂質有機質シルト	15.2	71.7	13.1
	9			褐灰色砂質有機質シルト	11.9	74.2	13.9
	10			褐灰色有機質シルト	8.8	77.0	14.2
種実	11	21SD1 (堀跡)	Aトレンチ9層	褐灰色砂質有機質シルト			
	12			褐灰色砂質有機質シルト			
	13			褐灰色砂質有機質シルト			
珪藻	14	21SD1 (堀跡)	Aトレンチ9層	褐灰色砂質有機質シルト			
	15			褐灰色砂質有機質シルト			
	16			褐灰色砂質有機質シルト			

べるために、花粉分析層準において有機物量、泥分(シルト以下の細粒成分)、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75  $\mu$  mより大きいサイズの微粒炭の積算面積を測定した。

#### c) 種実分析

試料は褐灰色有機質シルトに中粒砂から細礫が混じる。植物片は大きくても10mm程度で大半は細かい破片である。試料の処理量は、乾重でNo.11が231g、No.12が251g、No.13が215gで、それぞれの試料を0.25mm目の篩で水洗した。篩に残った残渣を実体顕微鏡で観察し、同定可能な種実化石を選別し分類群・部位別に同定・計数した。同定済み試料は60%エタノール溶液にてガラス瓶に保管されている。

#### d) 珪藻化石群

珪藻化石の抽出は、試料約1gをトールビーカーにとり、35%過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後に、沈底法により水洗を5～6回行った。次に分散した試料を適当な濃度に調整し、十分攪拌後マイクロピペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させる。スライドガラスにマウントメディア(封入剤)を適量のせ、これに先程のカバーガラスをかぶせ、加熱して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレパラートを作成した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、珪藻殻が1/2以上残存したものについて同定・計数を行った。珪藻の同定および各種の生態情報は、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺(2005)を参考にし、古環境の復元のための指標としては安藤(1990)の環境指標種群や渡辺(2005)の有機汚濁とpHなどを用いた。

### 3. 結 果

#### a) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を表6に、炭素年代から暦年への較正図を図46に示す。測定結果は、大きくは試料1,4と試料2,3,5,6,7の2つのグループに分けられる。前者の試料1と試料4は、1020  $\pm$  40 y BP (990-1030cal AD) と1060  $\pm$  40 yr BP (970-1020cal AD)、後者は910  $\pm$  40 y BP (1040-1170cal AD) から970  $\pm$  40 y BP (1020-1140cal AD)の間である。

#### b) 花粉化石群

花粉分析試料の堆積物の特性については表5に示した。堆積物は、試料8で細粒砂が他試料より若干多いがほぼ同様な特性を示し、シルト以下の細粒成分が多く含む有機質な堆積物からなる。

出現した分類群のリストとその個数を表7に、主要花粉分布図を図47に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。なお、3試料とも樹木花粉数が少ないが、産出傾向を表現するために試料9と10は樹木花粉数を基数として示した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究舎に保管してある。

樹木花粉は、試料9と10では概ね同様な組成を示し、試料8は少ないため比率が幾分異なるが同様な分類群からなる。つまり、樹木では落葉広葉樹のブナ、コナラ亜属、クリ属と、針葉樹のスギが比較的高率で出現し、ヤナギ属やクルミ属、クマシデ属 - アサダ属、ケヤキ属などを伴う。草本は、3試料とも類似し、アサ科や抽水植物のサジオモダ属が比較的高率で出現し、アカザ科やアカザ科 - ヒユ



表6 柳之御所遺跡第69次調査試料のAMS法による放射性炭素年代測定結果

試料	遺構	未補正 <sup>14</sup> C年代 (y BP) *1	$\delta^{13}\text{C}$ *2 (permil)	<sup>14</sup> C年代 *3 (y BP)	暦年代 *4 ( )内の%は確率	測定番号
試料1 YG69-C1 木材	21SD1 (堀跡) 木製品付着	1030 ± 40	-25.5	1020 ± 40	cal AD 1020 (cal BP 930) 2σ (95%) : cal AD 970-1040 (cal BP 980-910) and cal AD 1100-1120 (cal BP 850-830) 1σ (68%) : cal AD 990-1030 (cal BP 960-920)	Beta-256063
試料2 YG69-C2 木材	21SD2 (堀跡) 橋部材No.1付着	910 ± 40	-23.8	930 ± 40	cal AD 1050 (cal BP 900), cal AD 1090 (cal BP 860), cal AD 1130 (cal BP 820), cal AD 1140 (cal BP 810) 2σ (95%) : cal AD 1020-1210 (cal BP 930-740) 1σ (68%) : cal AD 1030-1160 (cal BP 920-790)	Beta-256064
試料3 YG69-C3 木材	21SD2 (堀跡) 橋部材No.2付着	920 ± 40	-24.6	930 ± 40	cal AD 1050 (cal BP 900), cal AD 1090 (cal BP 860), cal AD 1130 (cal BP 820), cal AD 1140 (cal BP 810) 2σ (95%) : cal AD 1020-1210 (cal BP 930-740) 1σ (68%) : cal AD 1030-1160 (cal BP 920-790)	Beta-256065
試料4 YG69-C4 木材	21SD2 (堀跡) 橋部材No.4付着	1080 ± 40	-26.5	1060 ± 40	cal AD 990 (cal BP 960) 2σ (95%) : cal AD 890-1030 (cal BP 1060-920) 1σ (68%) : cal AD 970-1020 (cal BP 980-930)	Beta-256066
試料5 YG69-C5 木材	21SD2 (堀跡) 橋部材No.7付着	950 ± 40	-27.2	910 ± 40	cal AD 1160 (cal BP 800) 2σ (95%) : cal AD 1030-1220 (cal BP 920-730) 1σ (68%) : cal AD 1040-1170 (cal BP 910-780)	Beta-256067
試料6 YG69-C6 木材	21SD2 (堀跡) 橋部材No.8付着	990 ± 40	-26.3	970 ± 40	cal AD 1030 (cal BP 920) 2σ (95%) : cal AD 1000-1160 (cal BP 950-790) 1σ (68%) : cal AD 1020-1050 (cal BP 930-900) and cal AD 1090-1130 (cal BP 860-820) and cal AD 1140-1140 (cal BP 810-810)	Beta-256068
試料7 YG69-C7 木材	21SD2 (堀跡) 橋部材No.19付着	940 ± 40	-25.7	930 ± 40	cal AD 1050 (cal BP 900), cal AD 1090 (cal BP 860), cal AD 1130 (cal BP 820), cal AD 1140 (cal BP 810) 2σ (95%) : cal AD 1020-1210 (cal BP 930-740) 1σ (68%) : cal AD 1030-1160 (cal BP 920-790)	Beta-256069

\*1 未補正<sup>14</sup>C年代(y BP)、(同位体分別未補正) : 試料の<sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C比から、単純に現在(西暦1950年)から何年前(BP)かを計算した年代。半減期としてはLibbyの5568年を用いた。

\*2  $\delta^{13}\text{C}$  (permil) : 試料の測定<sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C比を補正するための<sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C比。この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(\text{13C} / \text{12C}) [\text{試料}] - (\text{13C} / \text{12C}) [\text{標準}]}{(\text{13C} / \text{12C}) [\text{標準}]} \times 1000$$

(ここで<sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C [標準] = 0.0112372)

\*3 <sup>14</sup>C年代(y BP)、(同位体分別補正) : 試料の炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C)を測定して、試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C / <sup>12</sup>Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の<sup>13</sup>C値を-25 (‰)に基準化することによって得られる年代値で、暦年代を得る際にはこの年代をもちいる。

\*4 暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの測定、サンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。

3. 結果

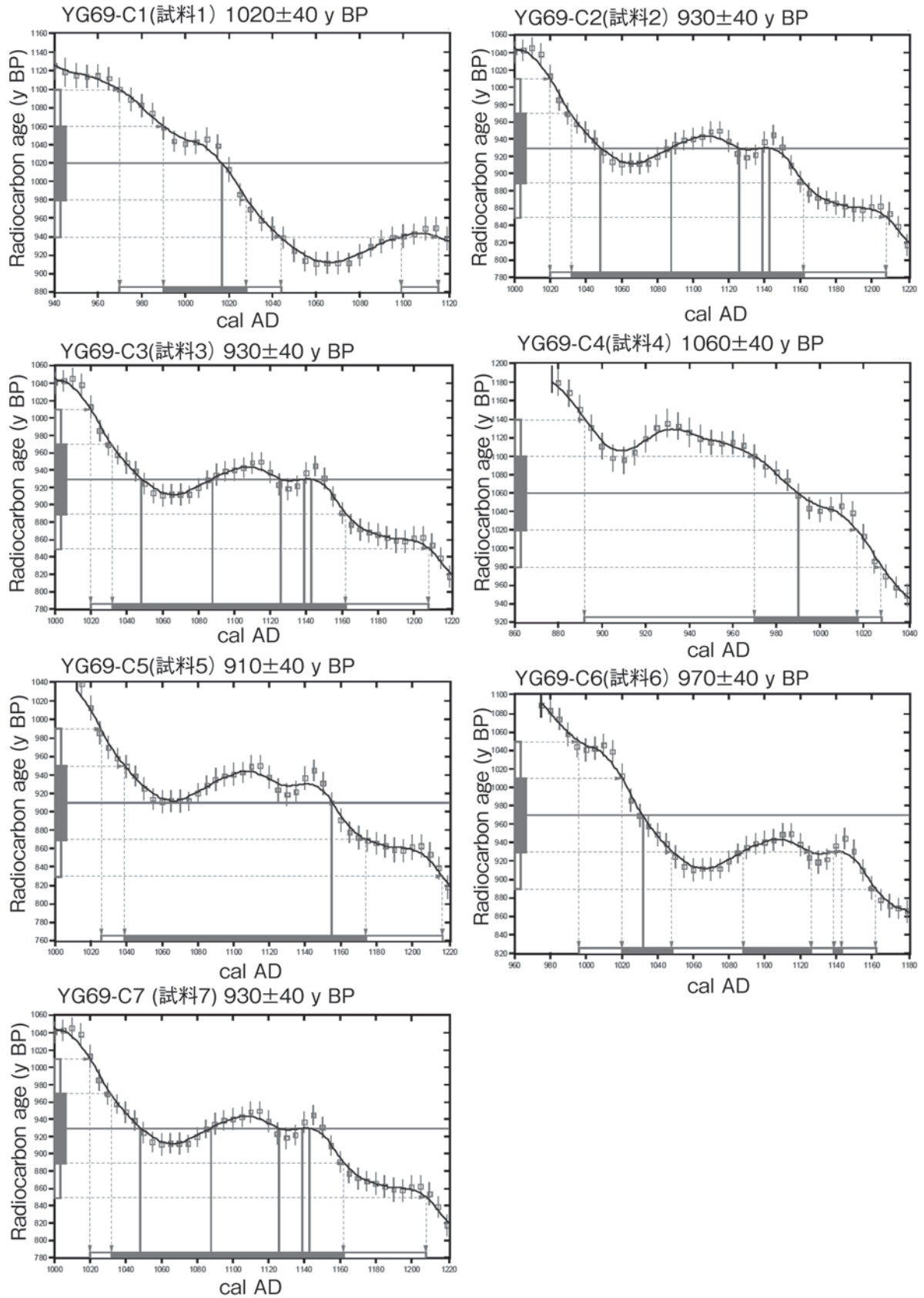


図 46 放射性炭素年代から歴年代への較正

表7 21SD1 堀跡A トレンチ 9層より産出した花粉化石の一覧表

和名	学名	8	9	10
樹木				
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	-	-	1
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	-	1	2
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	1	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.fil.)D.Don	20	14	13
イチイ科-ヒノキ科-イヌガヤ科	Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae			
ヒノキ型	<i>Chamaecyparis</i> type	-	1	1
ヤナギ属	<i>Salix</i>	4	4	4
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	-	3	1
クルミ属	<i>Juglans</i>	1	1	3
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	2	4	3
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	1	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	1	2
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2	1	4
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	3	19	8
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	-	4
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	8	16	8
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	1
クリ属	<i>Castanea</i>	6	18	6
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	1
ケヤキ属	<i>Zelkova</i>	-	1	3
モクレン属	<i>Magnolia</i>	-	-	2
サクラ属	<i>Prunus</i>	-	-	1
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	2	1	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	1	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	-	1	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	1
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	-	-	1
ニワトコ属	<i>Sambucus</i>	-	1	-
草本				
ガマ属	<i>Typha</i>	-	1	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	43	72	52
イネ科 (イネ属型)	Gramineae ( <i>Oryza</i> type)	10	20	21
イネ科 (野生型)	Gramineae (Wild type)	6	4	16
カヤツリグサ科	Cyperaceae	4	5	5
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	-	-	3
アサ科	Cannabiaceae	91	61	74
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	4	4	10
イブキトラノオ属	<i>Bistorta</i>	1	1	-
イスタデ属	<i>Persicaria</i>	6	2	4
イタドリ属	<i>Reynputria</i>	-	-	1
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-
アカザ科	Chenopodiaceae	18	36	46
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	9	19	14
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	12	8
キンボウゲ科	Ranunculaceae	4	7	6
アブラナ科	Curuciferae	5	15	16
バラ科	Rosaceae	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	1
セリ科	Umbelliferae	14	20	38
シソ科	Labiatae	1	-	-
ナス属	<i>Solanum</i>	-	-	1
オオバコ属	<i>Plantago</i>	4	4	2
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	53	57	70
オナモミ属	<i>Xanthium</i>	5	9	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	4	7
シダ植物				
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	-	1
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	2	-	-
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	5	9	4
他のバリノモルフ (寄生虫卵)				
回虫	<i>Ascaris</i>	9	2	10
鞭虫	<i>Trichuris</i>	9	11	9
異形吸虫科	<i>Heterophyidae</i>	-	2	1
肺吸虫	<i>Paragoniumus</i>	1	-	-
樹木花粉総数	Arboreal pollen	49	90	71
草本花粉総数	Nonarboreal pollen	283	354	395
シダ植物胞子総数	Fern spores	7	9	5
花粉・胞子総数	Pollen and Spores	339	453	471
不明花粉	Unknown pollen	7	6	5
樹木花粉量 ( $\times 10^2$ 粒/g)		17.5	21.0	18.5
微粒炭量 ( $\text{mm}^2/\text{g}$ )		646	860	497



表8 21SD1 堀跡A トレンチ9層より産出した種実

分類群名		出土部位\試料	11	12	13
食用植物					
キイチゴ属	<i>Rubus</i>	核	-	-	1
ナス近似種	<i>Solanum cf. melogena</i> L.	種子	-	-	3
メロン仲間	<i>Cucumis melo</i> L.	種子破片	-	-	2
ゴボウ近似種	<i>Cf. Arctium lappa</i> L.	果実	3	-	5
有用植物					
ヒユ属	<i>Amaranthus</i>	種子	15	3	2
		つぶれ種子	33	42	36
湿生植物					
ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A. Br. et Bouche	果実	78	92	132
オモダカ科	Alismataceae	種子	24	96	33
コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i> (Burm.fil.)Presl var. <i>plantaginea</i> (Roxb.)Solms-Laub.	種子	-	1	-
			-	-	-
コゴメガヤツリ	<i>Cyperus iris</i> L.	果実	-	1	-
ミゾソバ	<i>Persicaria thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) H. Gross	果実	1	-	2
ヤナギタデ	<i>P. hydropiper</i> (L.) Spach	果実	2	4	4
ボントクタデ	<i>P. pubescens</i> (Blume) Hara	果実	1	1	-
ノミノフスマ近似種	<i>Stellaria cf. alsine</i> Grimm var. <i>undulata</i> (Thunb.) Ohwi	種子	-	1	-
タガラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.	果実	24	9	32
ドクゼリ属またはセリ属	<i>Cicuta</i> and/or <i>Oenanthe</i>	果実	1	1	3
シロネ属	<i>Lycopus</i>	果実	-	1	1
日当たりの良い場所に生育する草本					
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	穎	4	-	2
カナムグラ	<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	種子	-	1	1
カラムシ属	<i>Boehmeria</i>	種子	-	-	1
サナエタデ近似種	<i>Persicaria cf. scabra</i> (Moench) Mold.	果実	25	6	19
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	花被	1	3	4
		果実	2	3	2
ミドリハコベ近似種	<i>Stellaria cf. neglecta</i> Weihe	種子	9	14	14
アカザ属	<i>Chenopodium</i>	種子	-	-	9
ヘビイチゴ属	<i>Duchesnea</i>	核	1	-	1
キジムシロ属	<i>Potentilla</i>	核	-	4	-
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	種子	-	2	-
ヤブジラミ属	<i>Torilis</i>	果実	-	-	1
トウバナ属	<i>Clinopodium</i>	果実	-	1	-
コメナモミ	<i>Siegesbeckia orientalis</i> L. subsp. <i>glabrescens</i> (Makino)Kitam.	果実	21	7	5
その他					
ブドウ属	<i>Vitis</i>	種子	-	-	1
タデ属	<i>Persicaria</i>	果実	12	-	5
ナデシコ科	Caryophyllaceae	種子	8	2	15
スマレ属	<i>Viola</i>	種子	-	1	-
ナス属	<i>Solanum</i>	種子	3	4	-
キク科	Compositae	果実	1	-	-

料とも普通に含まれるが、出現した分類群は少なく単調な組成からなる。つまり、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や、淡水産公布種の *Gomphonema truncatum*、*Gomphonema augur* var. *turiss*、*Gomphonema angustatum* が比較的高率に出現し、淡水産公布種の *Cymbella tumida*、*Pinnularia microstauron* や沼沢湿地付着生種群の *Sturoneis phoenicenteron* などを伴う。また、試料14は他の2試料と幾分異なり、*Gomphonema truncatum* の出現率が高く、*Gomphonema angustatum* や *Pinnularia microstauron* は低率になり、*Cymbella tumida* や沼沢湿地付着生種群の *Gomphonema acuminatum* を伴う。

#### 4. 考 察

##### a) 橋部材等の放射性炭素年代について

橋部材等の放射性炭素年代は、10世紀末から11世紀初めと、11世紀から12世紀の幅広い値が得られた。前者は試料1,4が相当し、990-1030cal AD (1020 ± 40 y BP) と970-1020cal AD (1060 ± 40

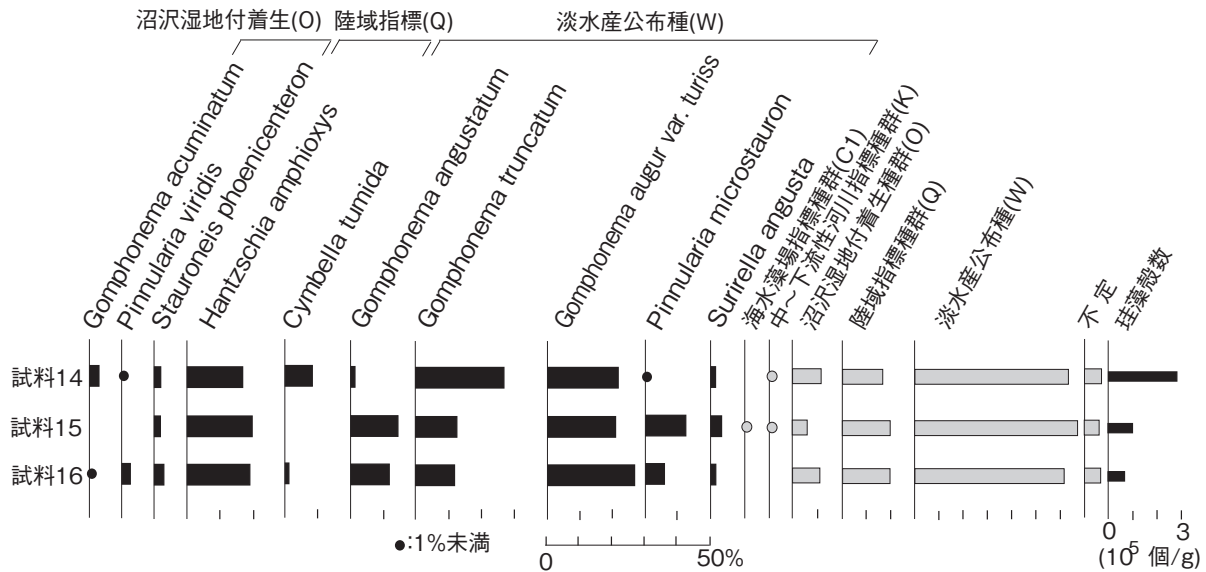


図 48 A トレンチ 9 層の主要珪藻分布図

yr BP) であるため、10世紀末から11世紀初めの年代値である。後者は試料2,3,5,6,7が相当し、1040-1170cal AD (910 ± 40 y BP)から1020-1140cal AD (970 ± 40 y BP)と11世紀から12世紀の幅広い値である。これは1050-1150cal ADの約100年間の炭素年代が較正曲線の停滞域(図1参照)にあたるため、暦年代の誤差範囲が幅広くなっている。11-12世紀における高精度な年代決定にはウイグルマッチングや年輪年代測定の見直しにより限定出来る可能性はある。

#### b) 内堀の堆積環境

内堀の底部には水域とじめじめした環境があり、抽水植物のヘラオモダカやタガラシが生育していたとみられる。つまり、河川指標種群が稀で淡水産公布種が優勢であることから止水域があったことは明らかで、さらに陸域指標種群も比較的多く検出されるため、堀内にはじめじめした環境の存在も推定される。陸域指標種群は「コケ類を含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群」(小杉, 1986)で他の生育地には出現しないか、出現しても主要でない(安藤,1990)とされている。一方、サジオモダカ属の花粉塊やヘラオモダカやタガラシの果実が比較的多く検出されるため、これら水生植物が繁茂していたことは明らかである。なお、試料の乾燥のためヘラオモダカやタガラシ、ミゾソバなどの種実が破片になり同定不能も多いため、堆積していた種実量はかなり多いと考えられる。

水域の水質は、付着珪藻群集に基づく有機汚濁指数(DAI<sub>po</sub>)が51-68であることから、汚濁階級がα貧腐水性水域の比較的きれいな水質が推定される。さらに、珪藻化石群が試料14と他の試料(15, 16)で幾分異なり、試料14ではDAI<sub>po</sub>も68と汚濁階級がβ貧腐水性水域よりであるため、他の試料より水質がきれいであったとみられる。また、*Gomphonema angustatum*は広適応性種であるためDAI<sub>po</sub>の指数に関係しないが、広い汚濁範囲の水域に出現する*Pinnularia microstauron*と同様な変化をし、貧栄養水性の好清水性種の*Gomphonema truncatum*と*Cymbella tumida*とは一致しない。こうしたことから*G.angustatum*の増加は汚濁化を示すことが想定され、試料15・16はより汚れた水質であった可能性がある。なお、出現頻度の高い*G. omphonema augur var. turiss*は生態未詳であるが琵琶湖への流入する水質のきれいな河川(DAI<sub>po</sub>74)から出現している(渡辺,2005)。

表9 A トレンチ 9 層の珪藻分析結果一覧表

分類群	指標種群	有機汚濁	pH	14	15	16
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	C1			-	1	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Brebisson) Grunow	K	saxe	neut	1	1	-
<i>Aulacoseira</i> sp.				1	-	-
<i>Caloneis molaris</i> (Grunow) Krammer	W			1	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (Ehrenberg) Grunow	W	saxe	alph	-	1	-
<i>Cymbella tumida</i> (Brebisson) Van Heurck	W	saxe	alph	17	2	2
<i>Eunotia</i> sp.				-	-	1
<i>Frustulia rhomboides</i> (Ehrenberg) De Toni	O	ind	acph	2	-	1
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	O	ind	alph	6	-	1
<i>Gomphonema angustatum</i> Agardh	W	ind	neut	3	30	24
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	O	ind	neut	8	9	9
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	W	saxe	alph	55	26	24
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>turiss</i> (Ehrenberg) Lange-Bertalot.	W			44	44	54
<i>Gomphonema</i> spp.				7	7	10
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehrenberg) Grunow in Cleve & Grunow	Q	ind	neut	34	42	38
<i>Navicula mutica</i> Kutzing	Q	saph	alph	-	-	1
<i>Navicula splendidula</i> Van Landingham	W			2	1	1
<i>Navicula</i> sp.				-	1	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehrenberg) Krammer	W		acph	1	1	4
<i>Nitzschia</i> sp.				-	2	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	O			2	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Q	ind	acph	-	-	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	O	ind	acph	1	-	-
<i>Pinnularia karelica</i> Cleve	W			-	2	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehrenberg) Cleve	W	saph	acbi	1	26	12
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	W			1	1	-
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hustedt) Krammer	W			-	1	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitzsch) Ehrenberg	O	ind	neut	1	-	5
<i>Pinnularia</i> spp.				6	3	3
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitzsch) Ehrenberg	O	ind	neut	4	3	6
<i>Surirella angusta</i> Kutzing	W	ind	neut	2	7	3
<i>Surirella</i> sp.				1	-	-
<i>Synedra ulna</i> Ehrenberg	W	ind	alph	2	-	-
環境指標種群 (%)						
海水藻場指標種群 (C1)				0	0.5	0
中～下流性河川指標種群 (K)				0.5	0.5	0
沼沢湿地付着生種群 (O)				11.8	5.7	11.0
陸域指標種群 (Q)				16.7	19.9	20.0
淡水産公布種 (W)				63.5	67.3	62.0
不定				7.4	6.2	7.0
珪藻殻数				203	211	200
珪藻殻数(×1000個/g)				2830	1044	618
付着珪藻群集に基づく有機汚濁指数 (DAI <sub>po</sub> )				68	51	53

saxe : 好清水性種, saph : 好汚濁性種, ind : 広適応性種, acbi : 真酸性種, acph : 好酸性種, neut : 中性種, alph : 好アルカリ性種, albi : 真アルカリ性種

c) 周辺の植生と生業

周辺の樹木はクリを主としスギやコナラ亜属が疎らにあった可能性と、樹木が疎らであった可能性が想定される。すなわち、樹木花粉の比率が低く、その中で出現率が高いのはブナやコナラ亜属、スギ、クリ属などである。クリを除く他の分類群は風媒花で広域に飛散するために、遠隔地からの飛来花粉の可能性はある。一方でクリ属は虫媒花で飛散し難い。荒川ほか(2008)はクリ花粉の飛散を明らかにするためにクリ林内と周辺の林床表層の花粉および空中浮遊花粉を調査し、クリ花粉が林内では高率に占めるが林外で急減し、周囲に森林が発達する地域ではクリ林から200m程度離れると花粉が稀にしか検出されないことを明らかにしている。こうした散布状況からは、周辺にクリが多く分布し、スギやコナラ亜属などが疎らにあった可能性が高い。また、ヤナギ属やクルミ属、クマシデ属 - アサダ属、ハンノキ属、ケヤキ属、モクレン属、サクラ属、トチノキ属なども分布していた可能性はある。

草本の利用植物としては、種実ではキイチゴ属やナス近似種、メロン仲間、ゴボウ近似種、ヒユ属が産出し、花粉ではイネ科(イネ属型)やソバ属、種は特定できないがアサ科、アカザ科、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科などの栽培植物が含まれる分類群が出現している。ヒユ属のつぶれた種子はいずれの試料からも比較的多く産出しているため、堀内に相当の量が廃棄されたとみられ、生活排水あるいは生活ゴミが投棄されていたことが想定される。ヒユ属は日本に自生種はなく帰化植物で、ヒユは10世紀前半の「和名類聚抄」に記載があり、食用にも解毒剤としても利用され、種子は眼疾の治療に利用されるほか挽いて焼けば食用にもなることが知られている (Eliasson & Clemants, 1995)。つぶれた種子が多量に出土しているため利用されていたことは明らかであるが、その利用状況は不明である。一方、アサ科には栽培植物のアサや雑草で日の当たる所に生えるつる草のカナムグラなどがあるが、アサの種子が出土していない状況からはカナムグラの可能性が高く、おそらく堀の縁の日当たりの良い所にカナムグラ繁茂し、そこにはギシギシ属やヨモギ属なども分布していたとみられる。

ところで、回虫や鞭虫、異形吸虫科、肺吸虫の寄生虫卵が300-680個/g検出されているため、これら寄生虫が蔓延していたことも想定される。なお、回虫卵と鞭虫卵はヒトが手指や野菜などに付着した幼虫包蔵卵を経口摂取すると感染し、異形吸虫科はアユなどの淡水魚の生食、肺吸虫卵は淡水産のカニ類の生食により感染する(吉田, 1996)。

(古代の森研究舎)

## 引用文献

- 荒川隆史・吉川昌伸・吉川純子・門口実代. 2008. 縄文時代のクリ利用に関する調査と実験. 考古学ジャーナル 574, 23-27.
- 安藤一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Eliasson, U. & Clemants, S. 1995. ヒユ科. 週刊朝日百科植物の世界, 81, 268-271.
- 小杉正人. 1986. 陸生珪藻による古環境の解析とその意義 - わが国への導入とその展望. 植生史研究, 1号, 29-44.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b) Bacillariophyceae, 1. Teil, 2.Teil, 3.Teil, 4.Teil, 876p., 539p., 576p., 437p. In Ettl, H., Gerloff, J., Heyning, J., Mollenhauer, D., Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(1), 2(2), 2(3), 2(4), Gustav Fischer. Jena. 267-287.
- 吉田幸雄. 1996. 図説人体寄生虫学. 293p., 南山堂, 東京
- 渡辺仁治. 2005. 淡水珪藻生態図鑑. 666 p. 内田老鶴圃, 東京.



## IV 総 括

今年度の調査成果について、以下の項目ごとに再度ふれつつまとめとしたい。

**出土土器の位置づけ** 69次調査では堀跡から多くの遺物が出土している。これらは、時間幅のやや広い遺物を含む可能性もあるが、堀の構築や廃絶の時期を考える重要な資料である。21SD2からは、69SX3とした掘り込みから多くの遺物が出土し、21SD2の廃絶時期を示唆している。また、21SD1では底面付近など下層からの遺物が多く出土している。

これらの遺物の特徴をみると、21SD1の下層付近からの出土遺物と69SX3の出土遺物ではかわらけは、器形の細部に違いもあるが、口径や器高などの法量値が近似し、大きな時期差を示すものではないと考えられる。口径や器高、器形の特徴からは12世紀後半の時期のものを含むとみられる。ただし、21SD1の埋没過程やその時期は今回の遺物のみからは不明な点も多く、特定できない。

21SD2の出土遺物は、出土状況から廃絶の時期に近いものが多く、その構築時期を示すと考えられる遺物は少なく判断が難しい。21SD2の構築時期については、より構築の時期に近いと想定できる旧期の堀の堆積層出土遺物が、器高の高い椀型の器形で口径が15cm前後のロクロかわらけ大皿で、12世紀前半代の遺物に多くみられる特徴をもつことは注目される。今回の調査では出土遺物も少なく、外側の堀の構築時期は他地点出土の遺物もあわせて検討していくべき課題と考えている。

(櫻井)

**内側の堀跡** 21SD1内側の堀跡はこれまで約120m分が調査されているが、構造には不明確な点があった。今回の調査によって、規模や、北斜面には平坦面(犬走り)が存在すること、堆積状況などが再確認できた。とくに、堆積状況を見ると、調査区内においてはすべて自然堆積で埋没していることがわかった。過去の調査では新旧2時期の可能性も指摘されているが、今回の場所では確認することができなかった。重複関係から内側の堀跡は相対的には最新の遺構となる。

**外側の堀跡** 21SD2は外側の堀跡である。これまではトレンチ主体の調査のため面的な広がりなどはあまり明確ではなかった遺構である。今回も広範囲を検出したわけではないが、外側の堀の周囲を広げることによって、いくつかの新知見が得られた。

今回調査を行った範囲においては、外側の堀跡は、内側の堀跡とその堆積状況が異なることと規模が約半分であること、遺物の出土状況の違いなど、両者は異なっていることが明確となった。規模についてはこれまでと基本的には変わらないが、21SX3と混同が見られるなど必ずしも明確ではなかった21次調査の内容を再確認できた意義は大きい。堆積状況は、非常に複雑であるが、外側の堀跡とした21SD2には最低2回の改修痕跡が確認された。その後21SX4という溝跡が構築されるが、この溝は規模の点で21SD2とは異なるものの、その位置はほぼそれと重なることから、3回目の改修痕跡であるかもしれない。その意味でみると内側の堀跡である21SD1と外側の堀跡である21SD2は今次調査区内において重複しているということになる。また、21SD2は新旧ともに自然堆積であるが、21SX4は最終的には人為で埋められている。

遺物が多く出土した層はC層であり、これは21SD2に伴うというより、別の遺構(69SX3)として捉えた。21次の報告書では「新时期」と呼ばれた層と対応する。そうすると、この層に含まれる遺物は

21SD2が埋没後に橋部材を含めて廃棄するために掘り込まれた土坑に所属することになる。このため21SD2(新・旧)のみでみた場合、その出土量は圧倒的に少ない(図示できたかわらけは2点のみ)。こういった状況は過去の調査(38次)の所見と同様である。このため時期決定は慎重にならざるを得ず、今回は見通しを触れておくのみとしたい。

**他の遺構について** 2条の堀跡のほかには、整地と21SX3の溝跡、21SX35がある。整地については、重複関係から、外側の堀跡が埋まってから、内側の堀跡が構築される以前に位置づけられる。その目的については今回の範囲だけでは推定しにくい、橋跡21SX35と関係する遺構かもしれない。21SX35、21SX36は再調査になる。前者は、堀跡と併存するのであれば、その構造がどのようなものであった後者は祭祀遺構の意味をもたせた解釈が行われてきたが、今回の調査では特定できなかった。21SX3は遺跡最南端の遺構となるが、今回その延長部分を検出することができ、溝跡と判断した。堀跡よりは規模が小さいものの、区画施設として構築された可能性がある。なお時期については、内側の堀跡、整地層よりも古いことが堆積関係から判断できるが、21SD2とは重複していないため、詳細な時期については判断つかない。

**遺物について** 今回の出土遺物で特筆すべきものは、木製品である。木簡をはじめとする多量の木製品が出土している。これらのほとんどは69SX3(C層)からの出土である。

かわらけや国産陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土している。なお、X層からは縄文土器がVI層中心に少量の土師器が出土している。

**課題について** 以上簡単に69次調査の成果をまとめたが、残された検討課題も多い。とくに、内側の堀跡、外側の堀跡ともに、これまでの調査との整合をどう捉えるのかという点がある。これには、過去の調査の土層と今回の調査の土層の対応関係を想定することが必要である。堀跡の調査は今後数年間続く予定のため、最終年度までにはまとめていきたいと考えている。

(西澤)

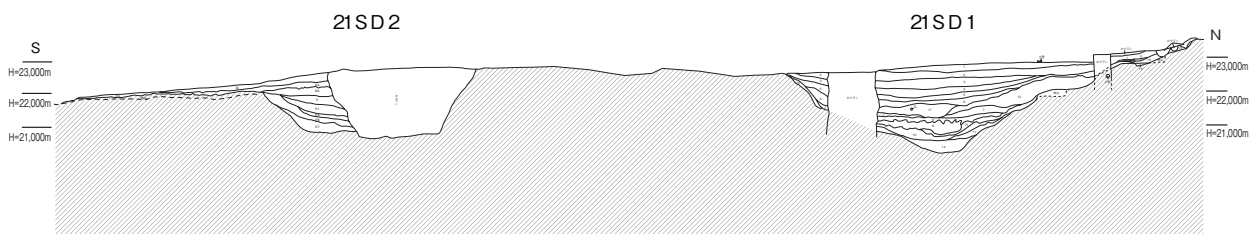


図 49 21SD1・21SD2 通し断面図 (1:150)  
(A トレンチ西壁)

表 10 出土遺物観察表 (かわらけ)

掲載番号	器種名	出土遺構	層位	残存 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	登録番号
1	ロクロ 小	21SD1	5・12・13層	90	9.6	2.0	6.6	2.5Y8/3		69ROk9
2	ロクロ 小	21SD1	10・11・14層	60	9.4	2.1	6.8	10YR7/2	骨針・雲母を含む。やや粗い	69ROk26
3	ロクロ 小	21SD1	10・11・14層	45	8.8	1.6	6.4	7.5YR7/3	やや粗い。砂質。骨針あり	69ROk27
4	ロクロ 小	21SD1	10・11・14層		—	(1.9)	6.3	2.5GY7/1	密。骨針多く含む	69ROk28
5	ロクロ 大	21SD1	3層	95	13.6	3.1	7.6	10YR8/3	骨針あり	69ROk2
6	ロクロ 大	21SD1	5・12・13層	40	(13.2)	3.6	(7.2)	10YR8/3		69ROk8
7	ロクロ 大	21SD1	7層	80	12.9	3.6	7.2	7.5Y8/4		69ROk15
8	ロクロ 大	21SD1	8・9層	98	15.0	3.4	8.0	7.5YR7/4		69ROk17
9	ロクロ 大	21SD1	10・11・14層	35	(12.0)	3.2	(6.6)	7.5YR7/3	雲母・黒色微砂・小礫を多く含む。粗い	69ROk25
10	ロクロ 大	21SD1	底面	98	13.7	3.5	7.0	2.5Y8/2	雲母・骨針多く含む。粗い	69ROk51
11	手づくね 小	21SD1	3層	90	8.8	1.6	—	2.5Y8/4		69ROk3
12	手づくね 小	21SD1	8・9層	90	8.5	2.0	—	5Y8/2	密	69ROk24
13	手づくね 小	21SD1	10・11・14層	100	8.9	2.0	—	2.5Y8/2	密	69ROk42
14	手づくね 小	21SD1	10・11・14層	100	9.5	2.0	—	5Y7/2	密	69ROk43
15	手づくね 小	21SD1	10・11・14層	100	8.5	2.0	—	2.5Y8/3	密	69ROk44
16	手づくね 小	21SD1	10・11・14層	95	8.8	1.9	—	2.5Y8/3		69ROk45
17	手づくね 小	21SD1	10・11・14層	95	9.2	2.1	—	5Y8/3	金雲母多く含む。やや粗い	69ROk46
18	手づくね 小	21SD1	10・11・14層	85	8.8	2.0	—	2.5Y7/2	雲母・骨針を含む。やや粗い	69ROk47
19	手づくね 小	21SD1	10・11・14層	80	8.2	1.3	—	2.5Y7/3	密	69ROk48
20	手づくね 小	21SD1	底面	97	8.2	2.1	—	10YR7/3	雲母・骨針を含む。やや粗い	69ROk53
21	手づくね 大	21SD1	2層	50	(12.6)	2.7	—	2.5Y8/3		69ROk1
22	手づくね 大	21SD1	4層	100	14.5	2.7	—	2.5Y8/2		69ROk4
23	手づくね 大	21SD1	4層	60	13.2	2.5	—	10YR8/3		69ROk5
24	手づくね 大	21SD1	4層	40	(14.0)	3.3	—	2.5Y8/2		69ROk6
25	手づくね 大	21SD1	4層	40	(12.7)	2.5	—	2.5Y8/2		69ROk7
26	手づくね 大	21SD1	5・12・13層	50	13.4	3.1	—	2.5Y8/2		69ROk10
27	手づくね 大	21SD1	5・12・13層	45	(13.8)	3.0	—	2.5Y8/2		69ROk11
28	手づくね 大	21SD1	5・12・13層	40	(13.5)	3.1	—	2.5Y7/2		69ROk12
29	手づくね 大	21SD1	5・12・13層	40	(13.6)	2.5	—	2.5Y7/2		69ROk13
30	手づくね 大	21SD1	5・12・13層	30	(12.2)	2.5	—	2.5Y8/3		69ROk14
31	手づくね 大	21SD1	7層	85	14.2	3.1	—	2.5Y8/2		69ROk16
32	手づくね 大	21SD1	8・9層	90	13.6	3.0	—	2.5Y8/3		69ROk18
33	手づくね 大	21SD1	8・9層	95	12.5	3.2	—	2.5Y8/2		69ROk19
34	手づくね 大	21SD1	8・9層	40	(13.0)	2.4	—	2.5Y8/4		69ROk20
35	手づくね 大	21SD1	8・9層	40	(14.1)	2.6	—	2.5Y7/2		69ROk21
36	手づくね 大	21SD1	8・9層	40	(14.3)	2.6	—	2.5Y8/3		69ROk22
37	手づくね 大	21SD1	8・9層	40	(13.6)	3.1	—	2.5Y7/2		69ROk23
38	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	100	12.0	3.1	—	2.5Y8/3	骨針・雲母・微砂含む。密	69ROk29
39	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	99	14.0	2.6	—	2.5Y8/3	骨針・雲母・白色粒を含む。密	69ROk30
40	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	99	14.2	2.5	—	5Y8/3	少しだけ粗い	69ROk31
41	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	70	13.8	3.2	—	2.5Y7/2	金雲母・骨針等含む	69ROk32
42	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	100	13.2	3.1	—	10YR8/3	骨針・雲母・微砂等含む。粗い	69ROk33
43	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	95	12.7	2.7	—	10YR7/2	密	69ROk34
44	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	90	12.2	2.8	—	2.5Y7/3	雲母・骨針を含む。やや粗い	69ROk35

掲載番号	器種名	出土遺構	層位	残存 (%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	登録番号
45	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	80	13.0	3.0	—	2.5Y8/4	雲母・骨針を含む。やや粗い	69ROk36
46	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	70	(12.8)	2.3	—	2.5Y8/4	雲母・骨針・微砂等含む。やや粗い	69ROk37
47	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	65	12.8	3.0	—	2.5Y7/2	雲母・骨針・微砂含む。密	69ROk38
48	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	40	(14.0)	2.6	—	10YR8/3	やや密	69ROk39
49	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	40	(14.4)	2.2	—	2.5Y8/2	密。骨針ほんの少し	69ROk40
50	手づくね 大	21SD1	10・11・14層	35	(14.5)	2.4	—	2.5Y7/3	密。雲母・骨針少量含む。	69ROk41
51	手づくね 大	21SD1	底面	100	14.7	3.2	—	2.5Y8/3	金雲母・骨針多く含む。やや粗い	69ROk49
52	手づくね 大	21SD1	底面	97	12.8	2.4	—	5Y8/3	密	69ROk50
53	手づくね 大	21SD1	底面	98	13.9	3.4	—	7.5YR8/3	密	69ROk52
123	ロクロ 小	21SD2	C層	65	8.0	2.3	6.1	2.5Y8/3	密。骨針多い	69ROk61
124	ロクロ 小	21SD2	C層	75	8.6	1.5	5.7	5Y8/2		69ROk75
125	ロクロ 小	21SD2	C層	75	9.0	1.9	6.5	7.5YR7/4		69ROk76
126	ロクロ 小	21SD2	C層	65	(8.5)	1.6	6.5	2.5Y8/2		69ROk77
127	ロクロ 小	21SD2	C層	60	(7.8)	1.7	5.4	2.5Y8/3		69ROk78
128	ロクロ 小	21SD2	C層	60	(7.4)	1.8	4.5	10YR8/3		69ROk79
129	ロクロ 小	21SD2	C層	50	8.3	1.7	6.1	2.5Y8/2		69ROk80
130	ロクロ 小	21SD2	C層	50	8.5	1.8	6.0	10YR8/3		69ROk81
131	ロクロ 小	21SD2	C層	40	(8.1)	1.8	(5.8)	2.5Y7/2		69ROk82
132	ロクロ 小	21SD2	C層	35	(7.2)	1.9	(5.7)	10YR7/3		69ROk83
133	ロクロ 小	21SD2	C層	30	(8.4)	1.9	(6.5)	2.5Y8/2		69ROk84
134	ロクロ 大	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	65	(13.5)	3.2	(7.0)	5YR8/4	やや密。骨針多く含む	69ROk54
135	ロクロ 大	21SD2	D層	90	14.8	4.6	6.2	5YR8/3	やや粗い。長石あり。	69ROk56
136	ロクロ 大	21SD2	C層	100	12.9	3.1	6.4	5Y8/3	密。骨針あり	69ROk57
137	ロクロ 大	21SD2	C層	90	13.2	3.7	(7.9)	7.5YR7/6	密。骨針含む	69ROk58
138	ロクロ 大	21SD2	C層	70	(13.6)	4.0	7.4	2.5YR7/6		69ROk59
139	ロクロ 大	21SD2	C層	95	12.5	3.5	7.7	7.5YR7/4		69ROk64
140	ロクロ 大	21SD2	C層	95	12.3	3.1	6.5	5YR7/4		69ROk65
141	ロクロ 大	21SD2	C層	50	(12.9)	3.3	(7.0)	2.5Y8/2		69ROk66
142	ロクロ 大	21SD2	C層	55	(13.2)	3.3	(7.0)	10YR6/3		69ROk67
143	ロクロ 大	21SD2	C層	45	(13.5)	3.6	(8.4)	5YR7/4		69ROk68
144	ロクロ 大	21SD2	C層	45	(11.8)	3.1	(6.9)	10YR7/3		69ROk69
145	ロクロ 大	21SD2	C層	40	(14.3)	2.7	(8.4)	10YR6/3		69ROk70
146	ロクロ 大	21SD2	C層	40	(12.5)	3.3	(6.4)	7.5YR7/4		69ROk71
147	ロクロ 大	21SD2	C層	35	(13.4)	3.6	(8.2)	10YR7/3		69ROk72
148	ロクロ 大	21SD2	C層	35	(12.8)	3.6	(7.5)	7.5YR7/6		69ROk73
149	ロクロ 大	21SD2	C層	30	(12.9)	3.4	(6.7)	10YR7/2		69ROk74
150	ロクロ 大	21SD2	F層	98	14.1	3.2	7.3	2.5Y7/2	やや粗い。骨針多く含む	69ROk102
151	ロクロ 大	21SD2	F層	97	14.1	3.7	7.4	10YR7/2	やや密。骨針少し含む	69ROk104
152	ロクロ 大	21SD2	F層	70	13.8	4.7	7.4	5Y7/2	やや密。骨針あり	69ROk105
153	ロクロ 大	21SD2	F層	45	(13.3)	3.3	(7.4)	5YR7/3	密。骨針多く含む	69ROk106
154	手づくね 小	21SD2	C層	100	8.3	1.6	—	2.5Y7/2	雲母・骨針を含む。やや粗い	69ROk98
155	手づくね 小	21SD2	C層	80	8.7	2.1	—	2.5Y7/2	金雲母・骨針を含む。やや粗い	69ROk99
156	手づくね 小	21SD2	C層	70	8.6	2.1	—	2.5Y8/3	雲母・骨針を少量含む。密	69ROk100
157	手づくね 小	21SD2	C層	—	—	—	—	7.5YR7/1	金雲母・骨針を含む	69ROk101
158	手づくね 小	21SD2	F層	98	8.0	1.7	—	7.5Y8/3		69ROk110

掲載番号	器種名	出土遺構	層位	残存(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	登録番号
159	手づくね 大	21SD2	D層	60	12.9	2.8	—	2.5Y8/3	密	69ROk55
160	手づくね 大	21SD2	C層	97	13.3	2.6	—	7.5YR8/6	密	69ROk60
161	手づくね 大	21SD2	C層	98	15.1	3.3	—	5Y8/2	密	69ROk62
162	手づくね 大	21SD2	C層	65	13.1	3.0	—	2.5Y8/2	密	69ROk63
163	手づくね 大	21SD2	C層	90	12.9	3.1	—	2.5Y6/1		69ROk85
164	手づくね 大	21SD2	C層	80	13.0	3.0	—	10YR8/2		69ROk86
165	手づくね 大	21SD2	C層	75	13.8	3.5	—	5Y7/2		69ROk87
166	手づくね 大	21SD2	C層	65	14.0	3.2	—	2.5Y7/3		69ROk88
167	手づくね 大	21SD2	C層	55	13.8	3.0	—	2.5Y8/2		69ROk89
168	手づくね 大	21SD2	C層	50	13.8	3.0	—	2.5Y8/2		69ROk90
169	手づくね 大	21SD2	C層	50	12.1	2.4	—	2.5Y8/2		69ROk91
170	手づくね 大	21SD2	C層	50	(13.3)	2.6	—	2.5Y7/2		69ROk92
171	手づくね 大	21SD2	C層	45	(12.8)	2.7	—	5Y8/2		69ROk93
172	手づくね 大	21SD2	C層	40	(13.9)	2.1	—	2.5Y8/2		69ROk94
173	手づくね 大	21SD2	C層	40	(13.8)	2.9	—	5Y8/2		69ROk95
174	手づくね 大	21SD2	C層	35	(13.6)	3.0	—	10YR8/3	雲母・骨針を含む。密	69ROk96
175	手づくね 大	21SD2	C層	30	(12.4)	2.5	—	2.5Y8/3	雲母・骨針を含む。密	69ROk97
176	手づくね 大	21SD2	F層	100	13.6	2.9	—	5Y8/3	密	69ROk103
177	手づくね 大	21SD2	F層	65	12.6	2.5	—	5Y8/2	密	69ROk107
178	手づくね 大	21SD2	F層	40	13.9	3.3	—	5Y8/3	密	69ROk108
179	手づくね 大	21SD2	F層	10	(14.4)	—	—	5Y8/2	密	69ROk109
194	手づくね 大	21SX4	埋土上位	99	13.3	3.0	—	2.5Y8/3		69ROk111
199	ロクロ 大	整地層	A～B層	98	13.4	3.4	7.3	5YR7/8	雲母・骨針を多く含む。粗い	69ROk113
200	手づくね 大	整地層	A～B層	98	14.4	3.4	—	2.5Y8/4	雲母・微砂など少量含む。密	69ROk114
201	手づくね 大	整地層	A～B層	93	14.7	3.6	—	2.5Y8/2		69ROk115
206	ロクロ 小	88-112	II～III層	100	7.8	1.5	5.9	7.5YR7/6	雲母・骨針を含む。やや粗い	69ROk112

表 11 出土遺物観察表 (国産陶器)

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	色調	その他	登録番号
54	渥美	壺	21SD1	7層	口縁部	5Y6/1		69ROt101
55	渥美	甕	21SD1	8・9層	口縁	5Y4/4	降灰釉かかる	69ROt23
56	渥美	甕	21SD1	2層	胴	2.5Y8/2		69ROt7
57	渥美	甕	21SD1	5・12・13層	頸	外 2.5Y7/1 内 2.5Y4/1	内面に降灰釉かかる	69ROt13
58	渥美	甕	21SD1	10・11・14層	頸部	5Y3/2	外面に降灰釉かかる。内面に多量の炭化物付着	69ROt28
59	渥美	甕	21SD1	2層	胴	10YR6/1	押印 (縦長格子文 + ?)	69ROt3
60	渥美	甕	21SD1	底面	胴部	2.5Y7/2		69ROt1
61	渥美	甕	21SD1	1層	胴部	2.5Y6/1		69ROt2
62	渥美	甕	21SD1	3層	胴	N6/	釉がまばらに	69ROt9
63	渥美	甕	21SD1	6層	胴	外 7.5YR5/2 内 5YR5/3	押印 (平行条線文)	69ROt17
64	渥美	甕	21SD1	2層	胴	10YR6/1		69ROt6
65	渥美	甕	21SD1	8・9層	胴	外 10Y4/2 内 2.5YR4/3	釉がかかる	69ROt22
66	渥美	甕	21SD1	2層	胴	2.5Y3/2	押印 (格子文)	69ROt4
67	渥美	甕	21SD1	2層	胴	N6/	押印 (平行条線文)。外面に釉だれ	69ROt5
68	渥美	甕	21SD1	3層	胴	7.5YR6/1	押印 (平行条線文)。内面に釉点々がある	69ROt10

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	色調	その他	登録番号
69	渥美	甕	2ISD1	6層	胴	2.5Y3/1	押印(平行条線文)	69ROt15
70	渥美	甕	2ISD1	3層	胴	外 2.5Y5/1 内 10YR5/2		69ROt11
71	渥美	甕	2ISD1	5・12・13層	胴	5Y4/4	刻字、押印(平行条線文)。降灰釉かかる	69ROt14
72	渥美	甕	2ISD1	7層	胴	外 7.5Y5/3 内 10YR6/2	押印(平行条線文)。外面に釉あり	69ROt21
73	渥美	甕	2ISD1	6層	胴	2.5Y7/2	押印(格子X文、一部格子文)	69ROt16
74	渥美	甕	2ISD1	5・12・13層	胴	2.5Y7/3		69ROt12
75	渥美	甕	2ISD1	6層	胴	外 7.5YR6/1 内 2.5YR4/4		69ROt18
76	渥美	片口鉢	2ISD1	8・9層	胴	2.5Y7/1	内面摩滅	69ROt25
77	渥美	甕	2ISD1	7層	胴	2.5Y8/1	押印(平行条線文)	69ROt20
78	渥美	甕	2ISD1	10・11・14層	胴	10YR4/1	内面に緑釉少しまばらにある	69ROt26
79	渥美	片口鉢	2ISD1	10・11・14層	胴	2.5Y7/1		69ROt27
80	渥美	甕	2ISD1	7層	胴	7.5Y7/1		69ROt19
81	渥美	甕	2ISD1	8・9層	胴	5Y4/4	69ROt33と接合。降灰釉かかる	69ROt24
81	渥美	甕	2ISD1	カクラン内	胴	5Y4/4	69ROt24と接合。押印(平行条線文)。降灰釉かかる	69ROt33
82	渥美	甕	2ISD1	3層	頸部	7.5Y6/3・ 5YR4/2	降灰釉かかる	69ROt8
83	常滑	壺類	2ISD1	5・12・13層	胴	7.5Y6/3	降灰釉かかる	69ROt55
84	常滑	壺類	2ISD1	8・9層	胴	外 7.5Y4/3 内 7.5YR4/4	淡緑色の降灰釉かかる	69ROt66
85	常滑	壺類	2ISD1	10・11・14層	胴	7.5Y5/3	降灰釉かかる	69ROt73
86	常滑	壺類	2ISD1	7層	底部	5YR6/3	砂底	69ROt58
87	常滑	壺類	2ISD1	8・9層	胴	5Y4/4	降灰釉かかる	69ROt62
88	常滑	甕	2ISD1	3層	頸部	7.5Y5/3	降灰釉かかる	69ROt50
89	常滑	甕	2ISD1	6層	胴	2.5YR5/4		69ROt57
90	常滑	甕	2ISD1	4層	胴	5Y7/2	押印(平行条線文)。まばらに降灰釉	69ROt53
91	常滑	甕	2ISD1	2層	胴	外 5YR3/1 内 2.5YR3/2	押印(平行条線文)。釉あり	69ROt48
92	常滑	甕	2ISD1	3層	胴	5Y7/2	釉かかる	69ROt52
93	常滑	甕	2ISD1	3層	胴	7.5Y6/3	降灰釉かかる	69ROt51
94	常滑	甕	2ISD1	5・12・13層	胴	7.5Y5/3	降灰釉かかる	69ROt54
95	常滑	甕類	2ISD1	7層	胴	N6/		69ROt60
96	常滑	甕	2ISD1	3層	胴	2.5Y5/2	緑釉かかる	69ROt49
97	常滑	甕類	2ISD1	7層	胴	N2/・7.5Y4/3	降灰釉かかる	69ROt59
98	常滑	甕	2ISD1	6層	胴	5Y5/4	降灰釉かかる	69ROt56
99	常滑	甕	2ISD1	8・9層	胴	外 7.5Y5/3・ 10YR3/2 内 10YR5/4	降灰釉かかる	69ROt61
100	常滑	甕	2ISD1	8・9層	胴	N6/	押印(平行条線文)。外面に若干釉だれ	69ROt65
101	常滑	甕	2ISD1	8・9層	胴	7.5Y4/3	69ROt72と接合。緑釉かかる	69ROt63
101	常滑	甕	2ISD1	10・11・14層	胴	7.5Y4/3	69ROt63と接合。緑釉かかる	69ROt72
102	常滑	甕	2ISD1	8・9層	胴	5YR5/4	外面まばらに降灰釉	69ROt64
103	常滑	甕	2ISD1	8・9層	胴	7.5YR3/4		69ROt67
104	常滑	甕	2ISD1	10・11・14層	胴	5Y5/3	釉あり。表面2次焼成を受け発泡している	69ROt71
105	常滑	甕	2ISD1	10・11・14層	胴	7.5Y5/3	69ROt69,70と接合。押印(縦長格子文+連弧文)	69ROt68
105	常滑	甕	2ISD1	10・11・14層	胴	7.5Y5/3	69ROt68,70と接合。	69ROt69
105	常滑	甕	2ISD1	10・11・14層	胴	7.5Y5/3	69ROt68,69と接合。押印(縦長格子文+連弧文)	69ROt70
106	常滑	甕	2ISD1	カクラン内	胴	7.5Y5/3	降灰釉厚くかかる	69ROt76

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	色調	その他	登録番号
107	常滑	甕	21SD1	2層	胴	10YR7/3	押印（平行条線文）	69ROt94
108	須恵器	甕	21SD1	7層	口縁部	2.5YR5/1		69ROt102
109	須恵器	甕	21SD1	7層	胴部	2.5YR4/6		69ROt103
110	須恵器	甕	21SD1	1層	頸	10YR5/1		69ROt98
111	須恵器	壺類	21SD1	6層	胴	2.5Y6/1		69ROt100
112	須恵器	壺類	21SD1	5・12・13層	頸	5Y2/2		69ROt99
113	須恵器系	甕	21SD1	8・9層	胴	5Y2/1		69ROt96
114	須恵器系	甕	21SD1	3層	胴	N8/	外面剥落	69ROt95
180	渥美	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	2.5Y8/1		69ROt30
181	渥美	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	N6/	69ROt32と接合。押印（平行条線文）	69ROt31
181	渥美	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	N6/	69ROt31と接合。押印（平行条線文）	69ROt32
182	渥美	片口鉢	21SD2	C層	胴	5Y7/1	まばらに釉	69ROt29
183	常滑	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	5Y6/2	降灰釉かかる	69ROt74
184	常滑	片口鉢	21SD2	F層	底部	2.5Y7/2	下半にケズリ。内面に降灰釉かかる	69ROt75
185	須恵器系	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	N8/	平行タタキ	69ROt97
186	須恵器	壺類	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	7.5Y2/1	釉ほとんど剥落	69ROt109
187	須恵器	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	N7/	平行タタキ	69ROt105
188	須恵器	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	7.5Y7/1	平行タタキ痕	69ROt110
189	須恵器	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	N8/	平行タタキ	69ROt106
190	須恵器	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	N8/	外：平行タタキ 内：青海波	69ROt107
191	須恵器	甕	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴	N8/	平行タタキ	69ROt108
192	須恵器	杯	21SD2	Ⅳ～Ⅴ層	胴～底	10Y7/1	糸切り底	69ROt104
195	常滑	甕	21SX4	検出面	胴	2.5YR2/3	押印（菱形文）	69ROt77
196	常滑	甕	21SX4	埋土上位	胴	5Y7/2		69ROt78
202	渥美	甕	88-110	A～B層	胴	2.5Y7/2	押印（平行条線文）。自然釉かかる	69ROt44
203	渥美	片口鉢	88-110	A～B層	胴	5Y7/1		69ROt43
204	渥美	甕	88-112付近	Ⅳ～Ⅴ層	胴	5Y7/2	格子文、押印（縦長格子文）。釉あり	69ROt45
205	須恵器	壺類	88-110	整地層検出面	胴	7.5Y5/1		69ROt114
207	渥美	甕	86-110	Ⅱ層	胴	外 10YR6/2 内 7.5Y5/3	押印（平行条線文）。内面に釉まばら	69ROt34
208	渥美	甕	86-111	Ⅱ層	胴	5YR3/1	押印（文様不明）	69ROt36
209	渥美	甕	86-110	Ⅱ層	胴	10YR4/1		69ROt35
210	渥美	甕	外堀付近	Ⅱ層～検出面	胴	7.5Y5/3・N8/	押印（格子文）。降灰釉かかる	69ROt47
211	渥美	甕	不明	Ⅱ層	胴	10R5/3		69ROt37
212	常滑	甕	86-109	Ⅱ層	胴	5Y6/3	押印（平行条線文）。降灰釉かかる	69ROt81
213	常滑	三筋壺	不明	Ⅱ層	胴	7.5YR6/2・ 5Y7/2	一条沈線。外面まばらに降灰釉	69ROt79
214	常滑	甕	85-110	Ⅱ層	胴	2.5YR5/3		69ROt80
215	常滑	甕	87-111	Ⅱ層	胴	10YR2/3	降灰釉かかる	69ROt82
216	常滑	甕	88-112	Ⅱ層	胴	5YR6/3		69ROt83
217	須恵器	甕	88-112	Ⅱ～Ⅲ層	胴	N7/	平行タタキ	69ROt112
218	須恵器	甕	87-112	Ⅱ層	胴	N4/～N7/		69ROt111
219	渥美	甕	87-111	Ⅳ層（下位）	口～胴	10Y5/2	押印（平行条線文）。灰緑の降灰釉	69ROt39
220	渥美	甕	88-110	Ⅳ層	頸	7.5Y5/3	釉あり	69ROt41
221	渥美	甕	87-110	Ⅳ層	胴	7.5YR4/1		69ROt38
222	渥美	甕	88-110	Ⅳ層	胴	2.5Y8/2～ 2.5Y5/1	全体に2次焼成を受けはせている	69ROt42
223	渥美	甕	87-112	Ⅳ層	胴	5Y7/2	押印（平行条線文）。釉あり	69ROt40

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	色調	その他	登録番号
224	常滑	壺類	87-110	IV層	胴	10YR4/1		69ROt84
225	常滑	甕	87-110	IV層	胴	2.5Y5/1	平行条線文 押印	69ROt85
226	常滑	甕	88-111	IV層一括	胴	10YR5/1		69ROt87
227	常滑	甕	88-112・113	IV層	胴	5YR2/3		69ROt91
228	常滑	甕	88-112	IV層	胴	10YR7/3	格子文 押印	69ROt90
229	常滑	甕	88-112	IV層	胴	10YR7/2	格子文 押印	69ROt89
230	常滑	甕	88-112	IV層	胴	10YR4/2	格子文 押印	69ROt88
231	常滑	甕	88-112・113	IV層	胴	7.5YR7/3	格子文 押印	69ROt92
232	常滑	甕	87-112	IV層	胴	外 5Y4/3 内 5YR5/3	平行条線文 押印。降灰釉	69ROt86
233	須恵器	甕	88-112～113	IV層	胴	N6/	平行タタキ	69ROt113
234	渥美	片口鉢	不明	表採・粗検出	底部	10YR8/2	高台。回転ヘラケズリ整形	69ROt46
235	常滑	甕	不明	表採・粗検出	胴	7.5Y5/3	降灰釉まばらにかかる	69ROt93
236	須恵器	甕	埋め戻し土		胴	外 10YR3/2 内 7.5YR5/2	平行タタキ	69ROt117
237	須恵器	甕	埋め戻し土		胴	7.5YR3/1		69ROt116
238	須恵器	甕	表採・粗検出		胴	N6/		69ROt115

表 12 出土遺物観察表（輸入陶磁器）

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	色調	その他	登録番号
115	白磁	碗	21SD1	7層	口縁部	5Y8/1		69ROg2
116	白磁	壺類	21SD1	10・11・14層	胴部	7.5Y7/2	II類	69ROg5
117	白磁	壺類	21SD1	10・11・14層	胴部	7.5Y7/1		69ROg6
118	白磁	壺類	21SD1	10・11・14層	胴部	10Y8/1		69ROg7
119	中国陶器	壺類	21SD1	5・12・13層	胴部	10YR4/4	二次焼成うける	69ROg9
120	中国陶器	壺類	21SD1	1層	胴部	2.5Y3/3	二次焼成うける。緑釉	69ROg10
121	中国陶器	壺類	21SD1	8・9層	胴部	5YR4/2	二次焼成うける	69ROg8
122	青磁	皿	21SD1	3層	底部	10Y5/2	I類	69ROg1
193	中国陶器	壺類	21SD2	IV～V層	胴部	7.5YR5/2	二次焼成うける。内面剥離	69ROg11
197	白磁	碗	21SX4	埋土一括	胴部	7.5GY8/1		69ROg3
198	白磁	碗	21SX4	埋土一括	胴下部	5Y8/2		69ROg4

表 13 出土遺物観察表（瓦）

掲載番号	出土遺構	層位	長さ	幅	厚さ	色調	胎土	その他	登録番号
367	88-112	IV層	28.0	11.8	2.0	5Y7/1	灰白色。白色粒、小礫を含む。やや粗い	筒部凸面に縄目叩き。凹面に細かい布目痕	69RT1
368	87-111	III層	8.7	9.3	2.2	10YR7/2	胎芯、淡灰色、淡茶色。白色礫、白色砂を含むやや粗 焼成：良好	凸面：縄目叩きで黒色砂を含む、離れ砂付着。凹面：糸切り痕？離れ砂付着	69RT2
369	87-111	IV層一括	8.8	9.1	2.0	2.5Y7/1	淡灰色。密。白色粒、褐色粒を含む 焼成：良好	凸面：縄目叩きカ。凹面：白色砂を多く含む、離れ砂付着	69RT3

表 14 出土遺物観察表（土製品）

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	重量（g）	その他
	69RY1	土製品	土壁	87-110		16	
	69RY2	土製品	土壁	88-112		22	
	69RY3	土製品	羽口？	21SD2 Bトレンチ 外堀		28	溶解している



表 15 出土遺物観察表 (木製品・漆製品)

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴	登録番号
239	木簡	墨書木簡	21SD2	C~F層	13.5	2.1	0.2		69RW122
240	木簡	墨書木簡	21SD2	F層	5.9	2.4	0.6	墨書	69RW32
241	木製品	曲げ物	21SD2 (69 S X 3)	C層	7.9	3.9	0.4		69RW60
242	木製品	曲げ物	21SD2 (69 S X 3)	C層	23.6	6.9	0.7	底板	69RW94
243	木製品	針	21SD2	F層	12.4	0.7	0.4		69RW100
244	木製品	箸	21SD2 (69 S X 3)	C層	11.9	0.5	0.3		69RW49
245	木製品	篋	21SD2 (69 S X 3)	C層	17.8	3.3	0.8		69RW120
246	木製品	鞘	21SD2 (69 S X 3)	C層	9.4	3.3	0.5		69RW44
247	木製品	火鏝板	21SD2 (69 S X 3)	C層	19.1	2.2	1.4		69RW19
248	木製品	杓子	21SD2 (69 S X 3)	C層	21.2	6.4	0.4	取り上げNo.⑩	69RW18
249	木製品	下駄カ	21SD1	10・11・14層	19.4	4.2	2.2		69RW6
250	木製品	飾具(花弁形)	21SD2 (69 S X 3)	C層	5.2	5.1	0.5		69RW21
251	木製品	飾具	21SD2 (69 S X 3)	C層	8.2	4.4	0.2		69RW24
252	木製品	飾具	21SD2 (69 S X 3)	C層	15.4	3.9	0.3		69RW23
253	木製品	飾具	21SD2 (69 S X 3)	C層	13.9	3.3	0.5		69RW118
254	木製品	形代(鎌形)	21SD2 (69 S X 3)	C層	9.7	2.5	0.5		69RW17
255	木製品	形代(包丁型)	21SD2	F層	29.6	6.7	0.6		69RW95
256	木製品	形代(刀形カ)	21SD2	F層	25.3	2.5	0.6		69RW98
257	木製品	糸巻(横木)	21SD2 (69 S X 3)	C~F層	9.5	2.1	0.9		69RW12
258	木製品	糸巻(棒)	21SD2 (69 S X 3)	C層	22.7	2.1	1.5		69RW20
259	木製品	糸巻(棒片)	21SD2 (69 S X 3)	C層	7.5	0.9	0.8		69RW76
260	木製品	糸巻(棒片)	21SD2 (69 S X 3)	C層	17.3	1.7	1.4		69RW73
261	木製品	不明木製品 (機織具カ)	21SD2 (69 S X 3)	C層	29.3	2.6	1.1		69RW42
262	木製品	脚	21SD1	10・11・14層	31.2	3	2.9		69RW29
263	木製品	脚	21SD2	F層	29.3	3.1	3.9		69RW96
264	木製品	栓	21SD1	10・11・14層	4.2	6.4	—		69RW7
265	木製品	矢板状	21SD2	F層	35.4	9.9	2.6		69RW111
266	木製品	杭先	21SD2 (69 S X 3)	C~F層	22.4	5	—		69RW110
267	木製品	部材	21SD1	10・11・14層	21	3.3	0.7		69RW5
268	木製品	部材	21SD2 (69 S X 3)	C層	12.7	1.9	1.2		69RW59
269	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	9.6	4.6	3.5		69RW55
270	木製品	折敷片	21SD2	F層	30.1	3.9	0.5		69RW81
271	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	26.7	2.6	0.4		69RW36
272	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	28.1	5.4	0.6		69RW34
273	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	29.5	4.5	0.4		69RW35
274	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	31.6	6.8	0.5		69RW4
275	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	25.5	4.8	0.5		69RW37
276	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	30.3	3.5	0.7		69RW38
277	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	30.3	4.1	0.7		69RW39
278	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	28.4	2.1	0.2		69RW40
279	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	26.7	9.3	0.7		69RW41
280	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	32.6	9.5	0.7		69RW48
281	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	31.4	4.5	1.2		69RW63
282	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	31.6	3	0.7		69RW64
283	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	32.2	5.4	0.7		69RW65
284	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	25.5	4	1		69RW52

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴	登録番号
285	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	24.9	3.5	0.4		69RW53
286	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	21.5	5.1	0.4		69RW66
287	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	27.2	3.5	0.4		69RW67
288	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	-13	-3.2	0.3		69RW70
289	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	12.2	5.5	3		69RW68
290	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	19.5	11.7	4.5		69RW72
291	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	31.6	8.7	0.7	取り上げ№11	69RW80
292	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	35.2	8.4	0.8		69RW86
293	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	30.4	7.5	0.5		69RW87
294	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	31.3	9.8	0.4		69RW88
295	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	27.9	6.3	0.7		69RW89
296	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	26.8	2.4	0.6	榫殺痕	69RW90
297	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	27.4	8.1	0.8		69RW92
298	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	28.7	5.6	0.6		69RW102
299	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	29.9	4.8	0.3		69RW103
300	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	28.2	5.9	0.4		69RW104
301	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	28.2	2	0.4		69RW105
302	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	25.6	2.2	0.5		69RW106
303	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	28.9	2.9	0.4		69RW107
304	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	23.4	4.3	0.3		69RW108
305	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	37.8	10.3	0.9		69RW112
306	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	31.9	6.1	0.4		69RW113
307	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	27	9.7	0.8		69RW114
308	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	23.8	4.1	0.4		69RW115
309	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	20.8	7.6	0.6		69RW121
310	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	18.2	12	0.5		69RW91
311	木製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	27.3	2.3	0.4		69RW116
312	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	27.3	3.4	0.7		69RW2
313	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	4.8	3.6	0.5		69RW8
314	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C～F層	7.5	2.5	0.4		69RW11
314	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C～E層	8.1	2.6	0.3		69RW13
315	木製品	加工材(板状)	21SD2	F層	5.7	3.2	0.4	生漆付着か RW83～85と同一個体	69RW82
316	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C～E層	9.7	1.8	0.5		69RW14
317	木製品	加工材(板状)	21SD2	F層	4.8	4.4	0.2	生漆付着か RW82、83、85と同一個体	69RW84
319	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	17.5	3.1	2		69RW54
320	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	5.1	4.9	4.5		69RW50
321	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	8.4	1.4	0.4		69RW58
322	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	7	2.9	0.3		69RW57
323	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	11.4	3.1	0.8	先端が尖る	69RW119
324	木製品	加工材(筒形)	21SD2	F層	7.1	2.6	1.3		69RW99
325	木製品	加工材(筒状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	5.1	9	1.4		69RW26
326	木製品	加工材(板材状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	2.5	3.5	1.8		69RW47
327	木製品	加工材(柄頭状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	-7.9	4	0.8		69RW69
328	木製品	加工材(柄頭状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	7.5	3.8	1.3		69RW71
329	木製品	加工材(かまぼこ状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	10.4	6.2	1.5		69RW46
330	木製品	加工材(不明)	21SD2	F層	12.6	5.4	1.8		69RW97
331	木製品	加工材(不明)	21SD2 (69 S X 3)	C層	5.4	2.7	0.6		69RW45

掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴	登録番号
332	木製品	加工材(棒状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	17.6	1.3	0.4		69RW75
333	木製品	加工材(棒状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	11.8	1.4	0.8		69RW117
334	木製品	加工材(棒状)	21SD2 (69 S X 3)	C~F層	15.1	1.5	1	長方形(断面)	69RW109
335	木製品	加工材(棒状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	13.4	0.6	0.6		69RW56
336	木製品	加工材(棒状)	21SD1	10・11・14層	28.5	1.2	1.1		69RW51
337	木製品	加工材(棒状)	21SD2 (69 S X 3)	C層	22.7	1.4	0.4		69RW74
338	木製品	漆器椀	21SD2	F層	5.9	7.8	16.3		69RW22
339	漆製品	漆器椀	21SD2 (69 S X 3)	C層	5	—	-18.6		69RW3
340	漆製品	漆器椀 黒漆	21SD2 (69 S X 3)	C層	2.9	3.5	0.4		69RW30
341	漆製品	漆器椀片	21SD2 (69 S X 3)	C層	2.7	2.7	0.5		69RW31
342	漆製品	漆器椀	21SD2	IV~V層	-3.3	-3.3	0.7	朱漆	69RW33
343	漆製品	漆容器	21SD2 (69 S X 3)	C層	23.9	7.6	1.1	漆付着	69RW1
344	漆製品	下駄歯	21SD2 (69 S X 3)	C層	7.7	12.2	3	漆付着	69RW9
345	漆製品	漆下駄カ	21SD2 (69 S X 3)	C層	6.4	8.6	1.2	漆付着	69RW43
346	漆製品	漆塗籠カ	21SD2 (69 S X 3)	C層	15	2.2	0.2	漆付着	69RW61
347	漆製品	柄カ	21SD2	F層	10	4.2	0.9	漆製品	69RW10
348	漆製品	折敷片	21SD2	F層	10.9	5.9	0.6	生漆付着か RW82、84、85と同一個体	69RW83
349	漆製品	折敷片	21SD2 (69 S X 3)	C層	25.9	16.8	1.5	生漆付着 RW82~85類似もしくは同一個体	69RW93
350	漆製品	折敷片	21SD2	F層	28	11.1	1.2	生漆付着か RW82~84と同一個体	69RW85
-	種実		21SD2 (69 S X 3)	C層				1個 桃か	69RW25
-	種実		21SD2 (69 S X 3)	C層				1個	69RW27
-	種実		21SD2 (69 S X 3)	C層				半分	69RW28
-	種実		21SD2 (69 S X 3)	C層					69RW62
-	種実		21SD2 (69 S X 3)	C層				半分	69RW77
-	種実		21SD2 (69 S X 3)	C層				半分	69RW78
-	種実		21SD2 (69 S X 3)	C層				1個	69RW79
-	種実		21SD2	F層				半分 桃核か	69RW101
-	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C~E層					69RW15
-	木製品	加工材(板状)	21SD2 (69 S X 3)	C~E層					69RW16

表 16 出土遺物観察表(石器・石製品)

登録番号	掲載番号	器種名	出土遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	その他
69RQ1		石匙	21SD1	8・9層	(5.55)	2.65	0.52	10		
69RQ2	372	砥石	21SD1	6層	(6.6)	3.7	0.6	31	黒灰色、硬質	上・下端部が欠損、砥面としては4面利用
69RQ3		石剣	21SD1	1層	(9.69)	2.29	1.23	40		
69RQ4		磨石	21SD2	F層	(10.55)	7.78	4.70	770		
69RQ5		石核	21SD1	3層	(5.15)	2.87	1.72	72		
69RQ6		剥片	21SD1	4層	(4.19)	3.45	1.04	21		
69RQ7		剥片	21SD2	C層	(2.04)	(2.04)	0.38	2		
69RQ8		剥片	21SD1	底面	(6.28)	3.54	1.15	37		
69RQ9		剥片	85-111	II層	(3.55)	2.08	0.83	7		
69RQ10		剥片	86-109	II層	(5.15)	2.25	0.96	14		
69RQ11		剥片	87-111	II層	(2.26)	2.02	0.96	5		
69RQ12		剥片	87-111	II層	(3.22)	3.19	0.70	7		
69RQ27	373	砥石	外堀付近~南側	II層~検出面	(3.95)	2.74	1.60	34		

表 17 出土遺物観察表 (金属製品)

登録	掲載番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他
69RM1	370	鉄製品	釘	21SD2	C層	9.52	0.4	0.37	7	
69RM2	371	鉄製品	釘	21SD2	IV～V層	4.16	1.01	0.78	8	
69RM3		鉄製品	釘	87-105	II層	8.73	0.37	0.35	7	近現代
69RM4		鉄製品	釘	87-105	II層	6.87	0.77	0.86	23	近現代
69RM5		貨幣	寛永通宝	21SD 1	カクラン	2.31	2.32	0.61	3	

追記 柳之御所遺跡出土の漆紙について

現在、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査事務所では、過去の出土品の再整理を行っている。その過程で、漆紙が1点存在することが判明した。過去の報告書には掲載されていないため、ここで記しておく(図50)。

参考資料2は大きく3片に分離している。そのほか細片がある。残存状態は悪いものの、紙片を折り曲げた状態で固化している。赤外線カメラで観察の結果、確実な文字は識別できないものの、文字様の痕跡は確認している。漆紙は柳之御所遺跡からは初出土であり、今後も検討を加えていきたい。出土地は41SD2 (内側の堀跡) であり、41次調査(1993年)で出土している。現状で長さ20cm、幅12cmである。



図 50 漆紙 (参考資料)

## 付章1 69次調査出土木簡について

東京大学 佐藤 信

### (1) 釈文

「タラウタユ 二丈」

### (2) 形状

下端欠損のため短冊形(011型式)になるか、下端を尖らせた荷札状(051型式)になるか未詳。長さ13.5cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmである。

### (3) 記載

裏面は表面未調整のように思われ、文字はない。

### (4) 読解

雄渾で書風も立派な七文字である。「タラウタユ」は人名で「二丈」は絹・布といった繊維製品などの数量・単位の「二丈」のことと考えられる。「タラウタユ」は「太郎太夫」であろう。「太夫」(古代に五位の官位を得た人の敬称として用いられる)の敬称を付されるような有力人物の分の品物(繊維製品か)二丈について記載した木簡、品物に付けた荷札・付札か、あるいは送り状・賜与札の性格が推測される。憶測すれば、12世紀末の遺物なら柳之御所遺跡出土ということから、藤原秀衡の嫡子(太郎)であった泰衡のことを「太郎太夫」と呼んだ可能性もあろうか。

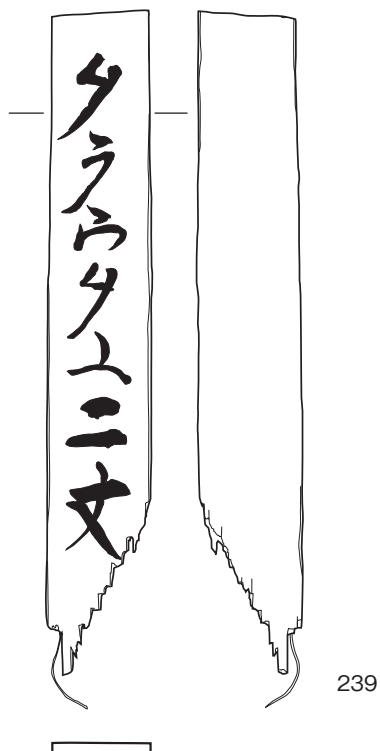


図 51 69SX3 出土木簡実測図 (2:3)



図 52 69SX3 出土木簡写真

## 付章2 柳之御所遺跡出土壁材について（補遺）

### 1. はじめに

柳之御所遺跡出土壁材（以下土壁と呼ぶ）の分析については64次調査報告書に記載しているが、その後の再調査により、若干の変更が生じたためここで補足をしたい。

柳之御所遺跡から出土する土壁は、これまであまり注意されなかったが、建物構造を検討する上では欠かせない遺物である。しかしながら、考古学的な検討はまだ行われておらず、それは基礎的なデータが不足していたためである。この一連の調査によって、全体量が把握できたので、今後は分類や残された痕跡の観察などさらなる検討を加えていきたいと考えている

### 2. 出土量

変更が生じたのは、出土量についてである。箱数の変更に伴って、出土遺構、出土重量が若干異なってしまった。変更後の新たな数値については表18にまとめた。

表 18 土壁総量一覧表

遺構名	重量 kg	遺構名	重量 kg	遺構名	重量 kg	遺構名	重量 kg
0 層	0.008	31SE6	46.497	55SK62	0.145	78-84-PP7	0.020
102-88-PP5	0.180	31SE7	175.799	55SX1(SE2)	0.094	78-85-PP10	0.013
103-90-PP13	0.090	31SE8	0.020	55SX2	0.037	78-85-PP11	0.036
103-90-PP4	0.020	31SE9	0.072	56SD19	0.040	79-67-P1	0.180
103-90-PP6	0.665	31SK33	0.010	56SD37	0.009	79-83-PP4	0.023
103-90-PP7	0.020	31SK36	0.010	56SD38(41SD2)	0.280	80-84-PP3	0.005
103-91-PP22	0.040	31SK38	0.040	56SD39	0.266	80-86-PP2	0.005
104-90-PP5	0.620	31SK39	0.080	56SD40	0.073	80-86-PP4	0.021
21SD1a	1.739	31SK40	0.070	56SK43	0.043	81-77-PP1	0.007
21SD1b	0.340	31SK41	0.050	56SK52	0.035	81-86-PP1	0.013
21SD4	0.060	31SK42	0.040	56SK53	0.107	82-70-PP3	0.064
21SD7	0.040	31SK43	0.040	56SK80	0.009	83-73-M1	0.014
21SE1	19.210	31SK44	0.040	56SK99	0.039	83-73-M1	0.011
21SE2	0.420	31SK48	0.012	56SX3	0.069	83-92-PP1	0.027
21SE3	0.100	31SK50	0.010	57SD35?SB35?SE35?	0.007	84-91-PP5	0.094
21SK108	0.160	31SK51	0.040	57SD40	0.020	88-8-PP1	0.010
21SK115	0.054	31SK52	0.012	57SD41	0.008	89-93-PP6	0.074
21SK16	0.035	31SK54	0.010	57SE2	2.080	94-84-PP1	0.020
21SK21	0.060	31SK57	0.030	57SX21	0.014	94-85-PP10	0.030
21SK23	0.040	31SK58	0.040	57SX22	0.068	94-85-PP11	0.030
21SK25	0.020	31SK59	0.072	57SX24	0.014	94-87-PP6	0.018
21SK63	0.030	31SK68	0.010	64SK1	0.100	94-90-PP6	0.014
21SK69	0.015	31SK70	0.154	65-75-不整形落込み	1.130	95-83-PP1	0.050
21SK80	0.020	31SK71	0.029	65SD1	0.020	95-86-PP15	0.015
21SK81	1.140	31SK79	0.220	65SD11	0.039	95-88-PP3	0.033
21SK82	0.020	31SK8	0.010	65SK21	0.393	95-88-PP5	0.017
21SK88	0.040	31SK80	0.110	65SK8	0.041	95-89-PP1	0.006
21SX4	0.060	31SK81	0.021	66-72-P1	0.015	95-89-PP2	0.004
23SA1	0.251	31SK9	0.030	66-76-PP4	0.003	95-89-PP5	0.058
23SD10	0.152	32SA1	0.194	66-77-P2	0.051	95-90-PP1	0.170
23SD13	0.214	36SD7	0.044	66-77-PP1	0.062	96-86-PP23	0.080
23SD23	0.009	36SD8	0.131	66-77-不整形落込み	0.050	96-88-PP2	0.022
23SD24	0.128	36SD9	0.046	66-78-PP1	0.144	96-89-PP17	0.061
23SD25	0.040	36SD9 か? (10. 62-73-SD1)	0.021	66-78-PP11	0.146	96-89-PP19	0.218
23SD26	0.770	36SE2	0.006	66-78-PP12	0.195	96-89-PP5	0.196
23SD27	0.276	36SE3	0.142	66-78-PP17	0.009	96-89-PP9	0.185

遺構名	重量 kg	遺構名	重量 kg	遺構名	重量 kg	遺構名	重量 kg
23SD3	0.004	36SK14	0.009	66-78-PP18	0.009	96-90-PP17	0.018
23SD34	0.092	36SK25	0.010	66-78-PP19	0.062	96-90-PP3	0.169
23SD35	0.013	37-79-PP11	0.006	66-78-PP25	0.009	96-91-M1	0.015
23SD6	0.019	41SD2-○不	0.019	66-78-PP4	0.027	96-91-PP13	0.007
23SE1	0.009	41SK28	0.037	66-78-PP5	0.022	96-91-PP8	0.036
23SE13	0.007	42SD1	0.991	66-78-PP8	0.003	97-90-PP5	0.008
23SE2	0.015	49SD12	0.125	66-79-PP15	0.190	98-76-PP7	0.036
23SG1	5.603	49SD16	0.037	66-79-PP16	0.006	98-78-PP9	0.007
23SK115	0.008	49SD22	0.022	66-79-不整形落込み	0.050	98-79-PP12	0.022
23SK14	0.024	49SD32	0.018	67-70-P1	0.034	98-79-PP5	0.068
23SK27	0.039	49SD37	0.028	67-74-PP1	0.022	B調査区	0.013
23SK4	0.252	49SD39	0.044	67-74-PP2	0.007	P1340	0.025
23SK43	0.015	49SK18	0.010	67-74-PP6	0.050	P202	0.030
23SK83	0.041	49SK19	0.034	67-74-PP7	0.003	P233	0.015
23SK84	0.038	49SK37	0.060	67-77-PP4	0.020	P235	0.022
23SX1	0.143	49SX06	0.020	67-78-PP2	0.004	P283	0.470
23SX2	0.188	49SX09	0.984	67-78-PP4	0.012	P283	0.100
28SA1	0.221	49SX10	0.042	67-78-PP6	0.008	P316	0.008
28SA2	0.059	50SA1	0.040	67-78-PP8	0.088	P317	0.430
28SA3	0.006	50SB3	0.020	67-79-PP1	0.204	P322	0.006
28SD1	6.430	50SD2	0.020	67-79-PP11	0.018	P351	0.209
28SE	0.006	50SD3	0.400	67-79-PP5	0.010	P369	0.015
28SE1	0.022	50SD5	0.020	68-70-P1	0.024	P373	0.045
28SE10	0.059	50SD5か6	0.080	68-74-PP1	0.003	P375	0.233
28SE11	2.578	50SE3	2.050	68-77-PP1	0.026	P380	0.454
28SE12	0.250	52SD10	0.150	68-78-P2	0.100	P409	0.012
28SE13	0.060	52SD16	0.300	68-78-PP13	0.046	P431	0.011
28SE14	0.075	52SD26	4.050	68-78-PP8	0.018	P435	0.011
28SE15	0.155	52SD27	0.010	68-80-PP5	0.006	P491	0.016
28SE16	0.080	52SD6	0.890	69-73-PP2	0.002	P501	0.050
28SE17	0.034	52SD8	0.300	69-74-PP1	0.025	P569	0.007
28SE2	7.380	52SE2	0.050	69-74-PP2	0.004	P570	0.173
28SE3	22.030	52SE3	0.450	69-77-PP3	0.017	P582	0.017
28SE4	0.220	52SE8	20.160	69-77-PP4	0.006	P595	0.200
28SE5	0.180	52SE9	0.040	69-78-PP1	0.005	P605	0.018
28SE6	0.240	52SI1	0.005	69-78-PP10	0.014	PP085	0.021
28SE7	0.060	52SK10	0.030	69-78-PP11	0.009	SD35?SB35?SE35?	0.010
28SE9	0.225	52SK13	0.010	69-78-PP13	0.015	SD4	0.063
28SK11	0.029	52SK14	0.140	69-78-PP15	0.005	SK24	0.010
28SK14	0.092	52SK31	0.030	69-78-PP5	0.016	旧 64-70-M1	0.005
28SK15	0.025	52SK34	0.130	69-78-PP8	0.009	不整形落込み	1.560
28SK18	0.011	52SK36	0.060	69-78-PP9	0.031	不明	3.380
28SK29	0.061	52SK7	0.160	69-79-PP1	0.026	不明 (77-72-P1)	0.006
28SK35	0.028	52SK8	0.020	69-79-PP16	0.003	遺構外	39.399
28SK6	0.170	53-59 SD1	0.046	69-81-PP4	0.003	資料館分	2.170
28SK7	0.002	55SA2	0.027	70-67-P1	1.484		
28SK9	0.305	55SB13	0.330	70-67-P2	34.330		
28SK96	0.150	55SD6	0.042	70-77-PP2	0.009	合計重量	444.004
28SX1	0.056	55SK1	0.126	70-78-P1	0.009		
28SX3	0.003	55SK16	0.009	70-79-PP8	0.005		
31SD1	0.007	55SK18	0.033	70-81-PP3	0.007		
31SD10	0.018	55SK20	0.083	70-82-PP3	0.010		
31SD12 (1.2 ?)	0.420	55SK21	0.181	71-67-P1	0.087		
31SD18	0.010	55SK23	0.648	71-78-PP7	0.015		
31SD2	0.120	55SK29	0.091	71-81-PP1	0.006		
31SD21	0.039	55SK33	0.400	71-81-PP5	0.014		
31SD34	0.100	55SK34	1.473	71-81-PP6	0.006		
31SD35	0.009	55SK35	0.014	71-82-PP3	0.018		
31SD36	0.011	55SK36	0.171	71-82-PP4	0.008		
31SD39	0.007	55SK40	0.650	72-64-不整形落込み	0.060		
31SD42	0.119	55SK41	4.350	72-69-PP2	0.027		
31SD47	0.024	55SK43	0.018	72-75-P1	0.084		
31SD50	0.050	55SK44	2.570	73-69-不整形落込み	0.020		
31SD51	0.044	55SK45	0.720	73-80-PP3	0.185		
31SD53	0.149	55SK47	0.205	73-82-PP2	0.159		
31SD6	0.041	55SK51	1.200	75-83-PP1	0.004		
31SE2	0.126	55SK54	0.240	77-68-P301	0.049		
31SE3	0.118	55SK56	0.128	77-83-PP8	0.009		
31SE4	0.150	55SK57	0.454	77-87-PP3	0.008		
31SE5	0.470	55SK58	0.042	78-70-P2	1.380		

2. 出土量

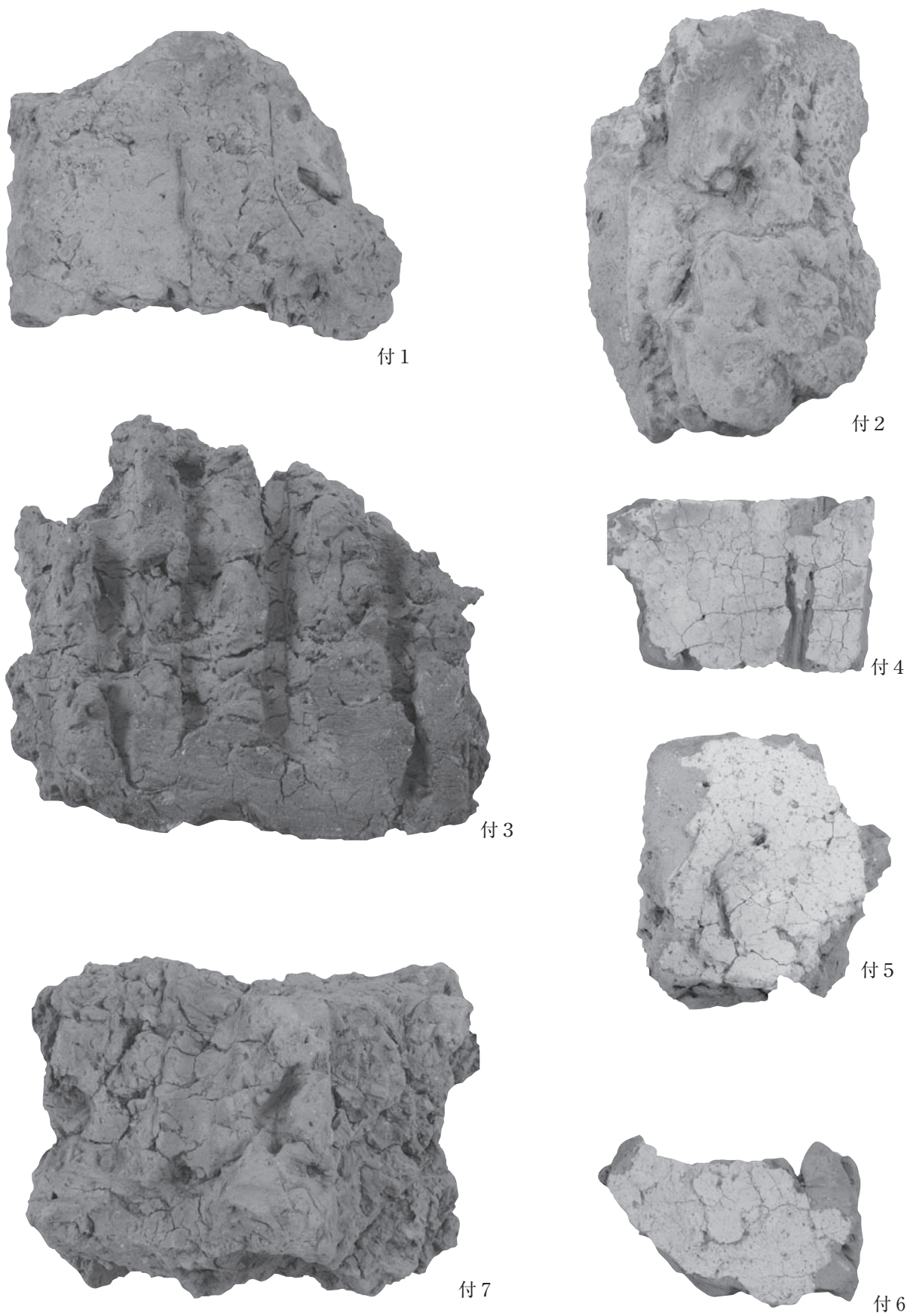


图 53 土壁出土例





版



調査区全景1（西から）



調査区全景2（東から）



調査区全景3（西から）



21SD1 検出状況



21SD1 作業状況



21SD1 完掘状況



21SD1 断面の状況1



21SD1 断面の状況2



21SD1 検出状況1 (北から)



21SD2 検出状況2 (東から)



21SD2 全体写真（西から）





21SD2 断面の状況1 (Aトレンチ東壁)



21SD2 断面の状況2 (Bトレンチ東壁)



21SD2 断面の状況3 (Bトレンチ西壁)



21SD2 断面の状況4 (Cトレンチ西壁)



69SX3 部材出土状況



69SX3 検出状況



69SX3 断面の状況



整地層の範囲



整地層の断面



21SX4 全景（西から）



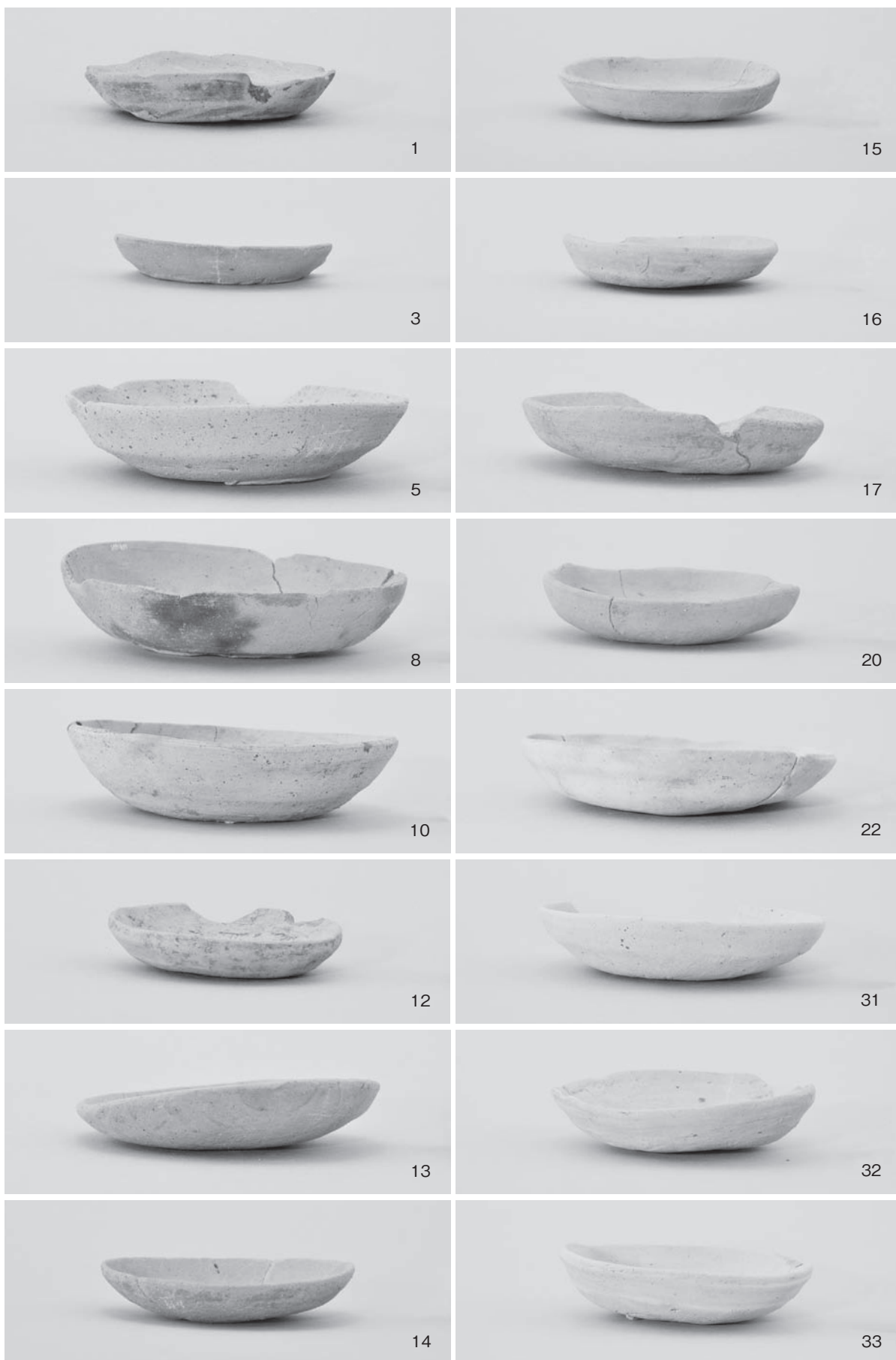
21SX4 断面の状況



21SX3 断面の状況



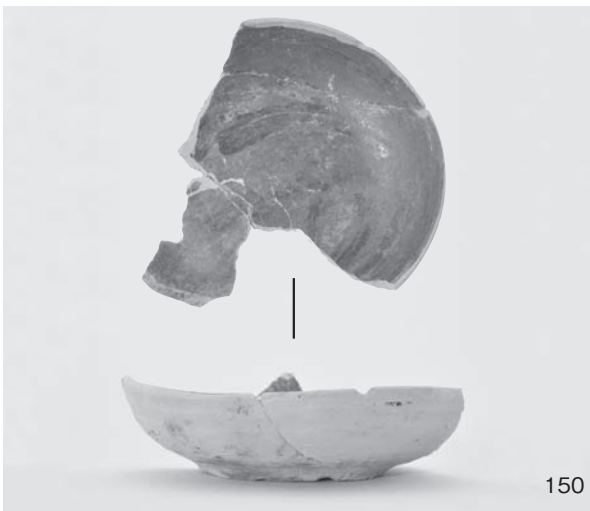
21SX35 完掘状況 (西から)



かわらけ①









158



166



176



160



194



161



199



163



200



164



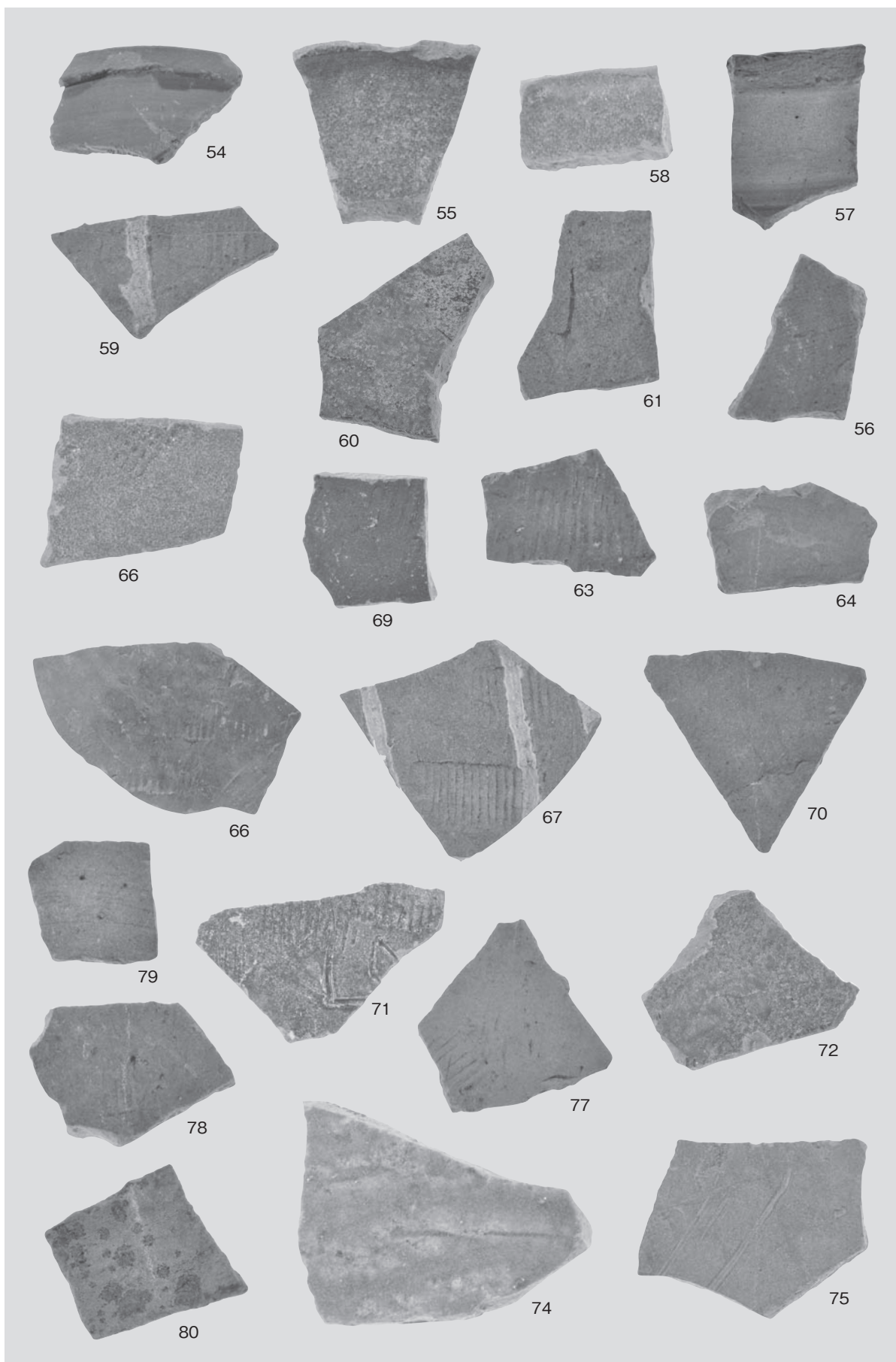
201



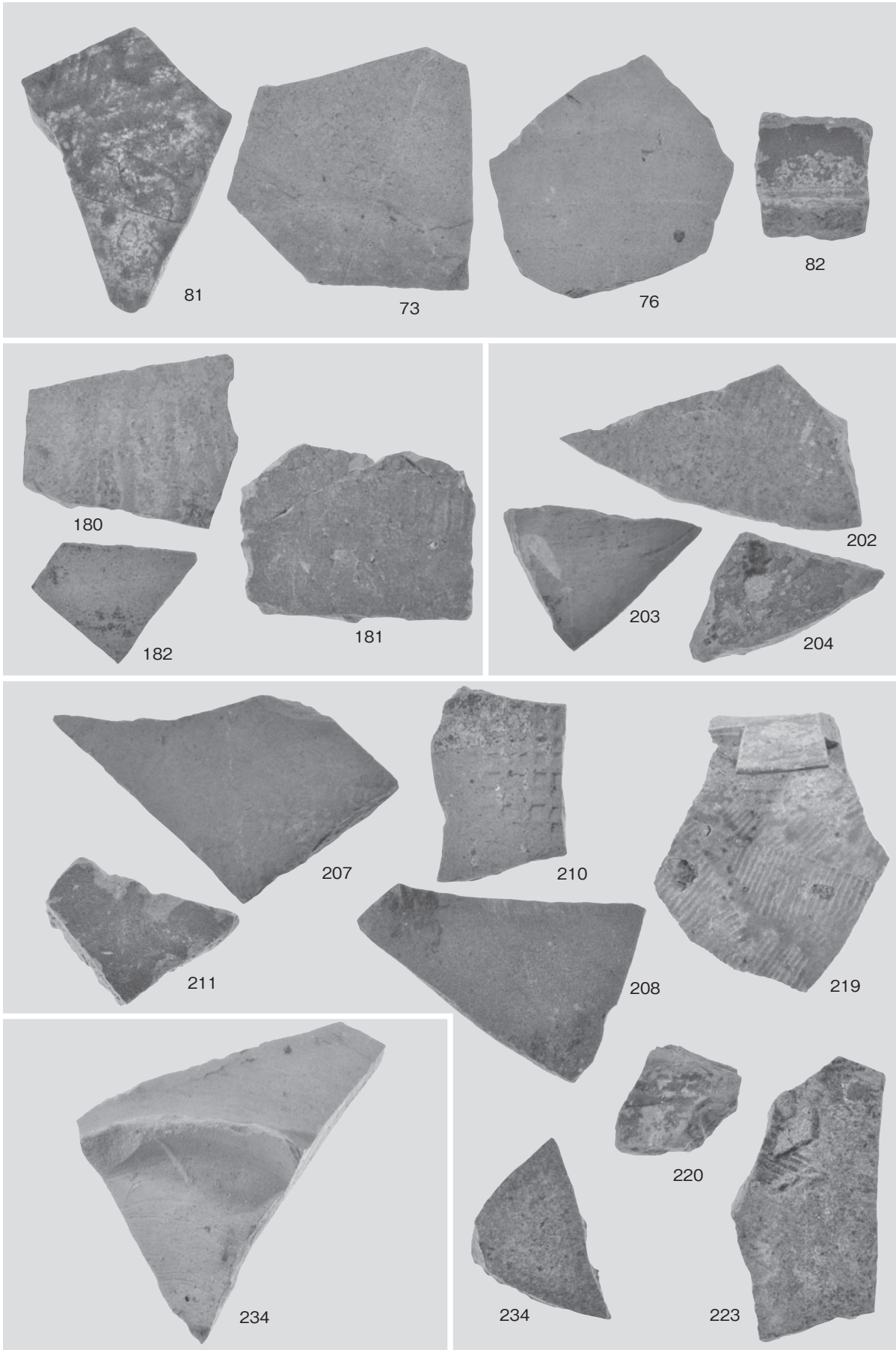
165



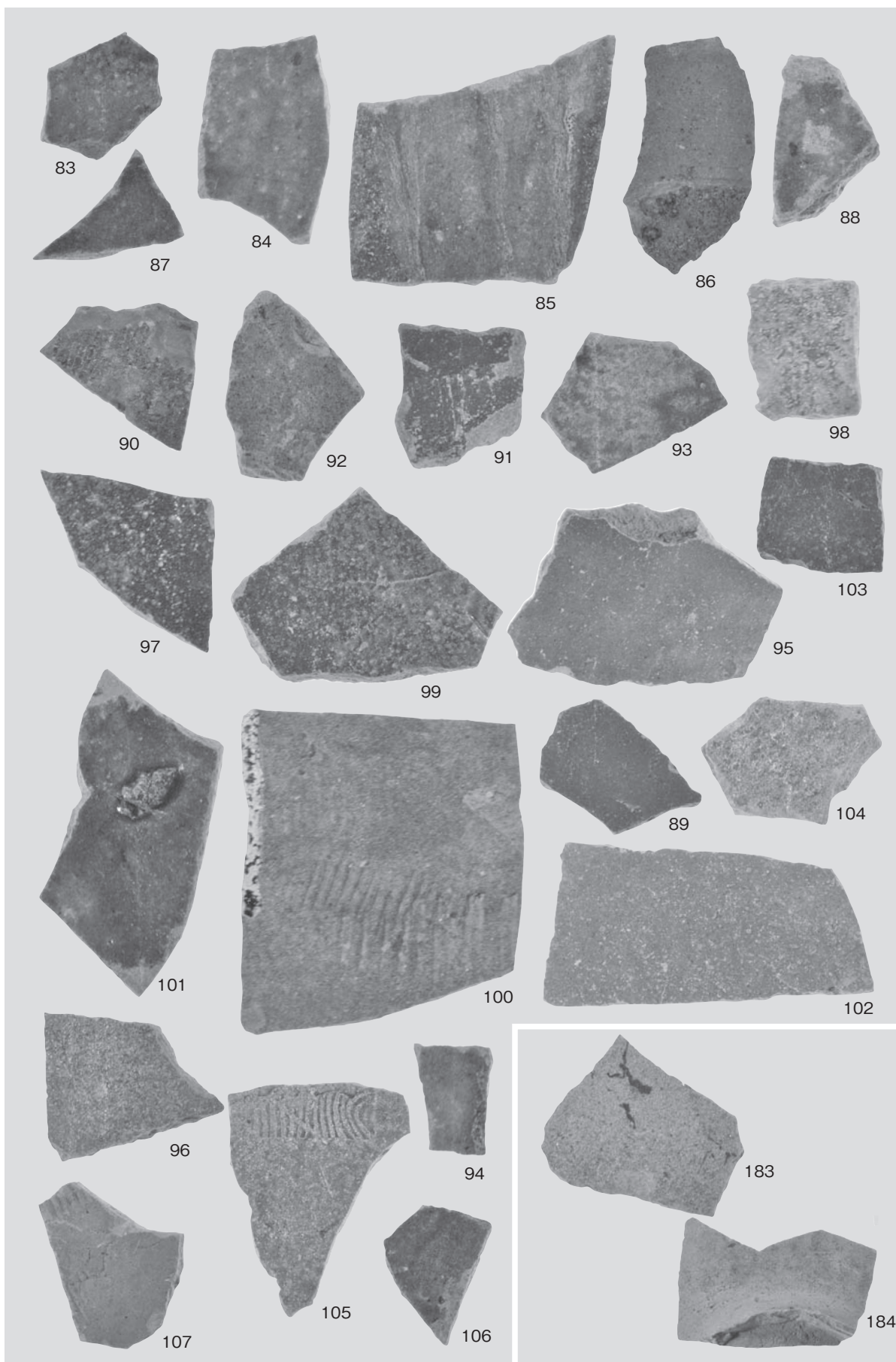
206



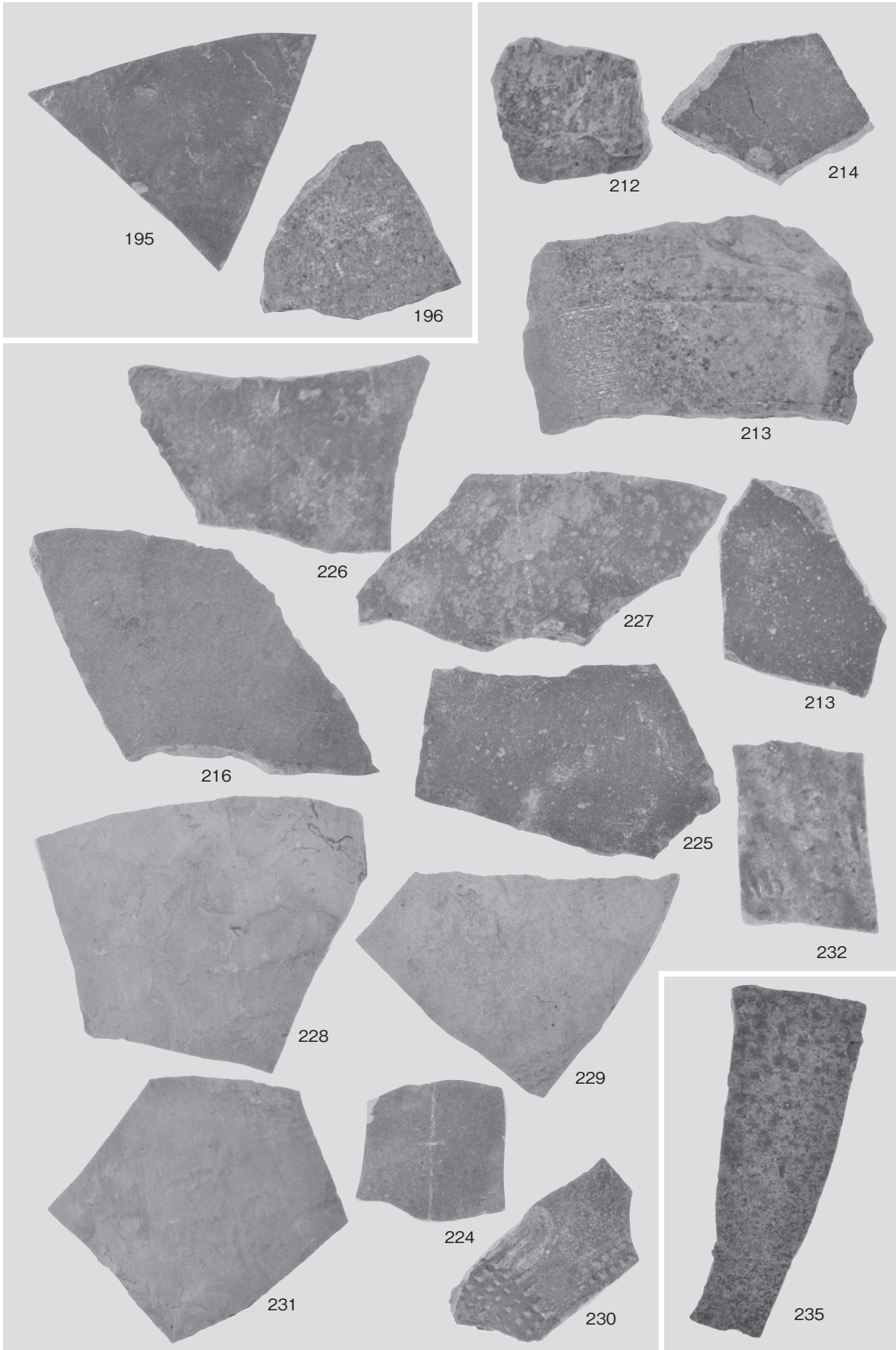
渥美窯産陶器①



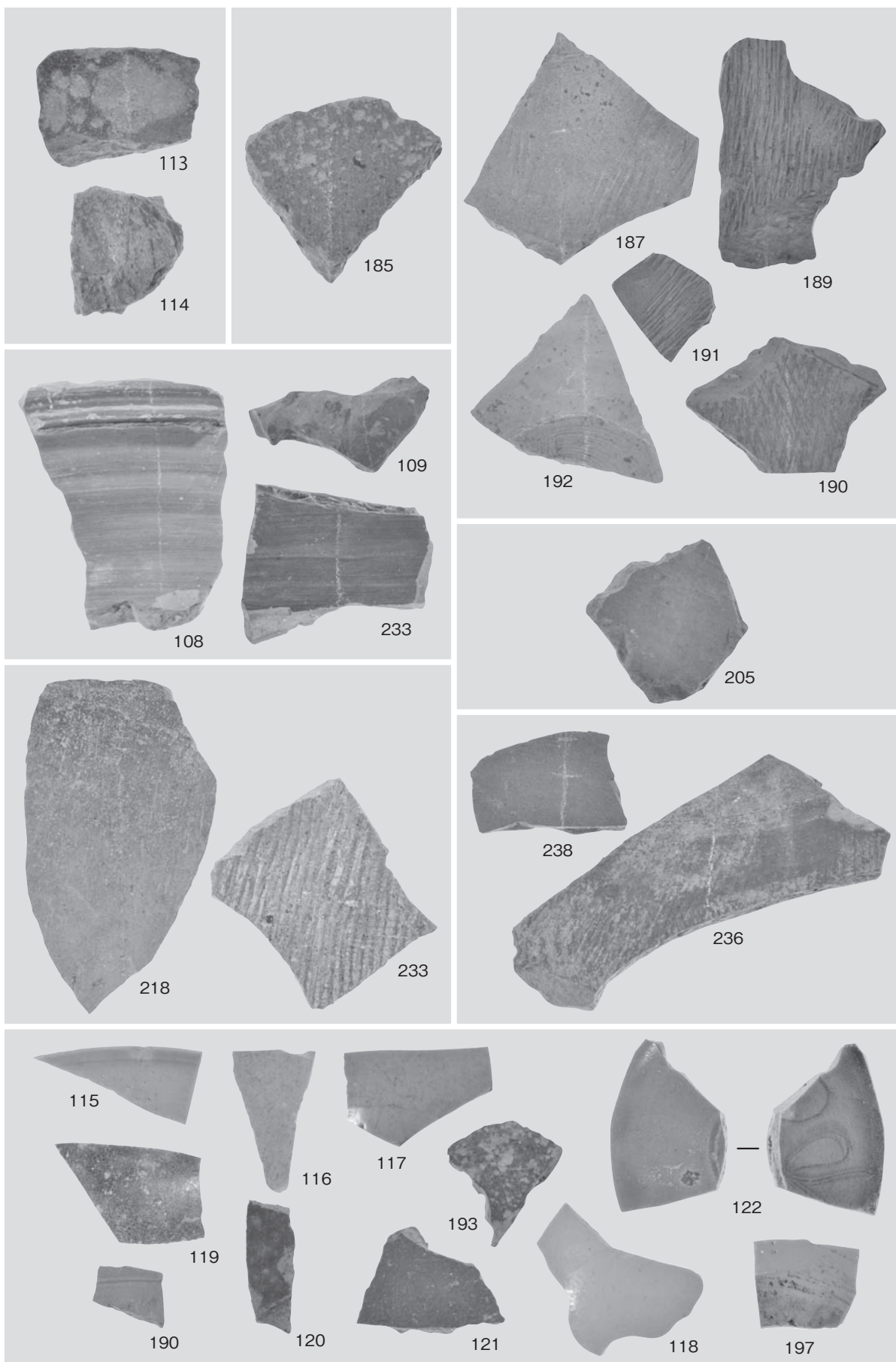
渥美窯産陶器②



常滑窯産陶器①

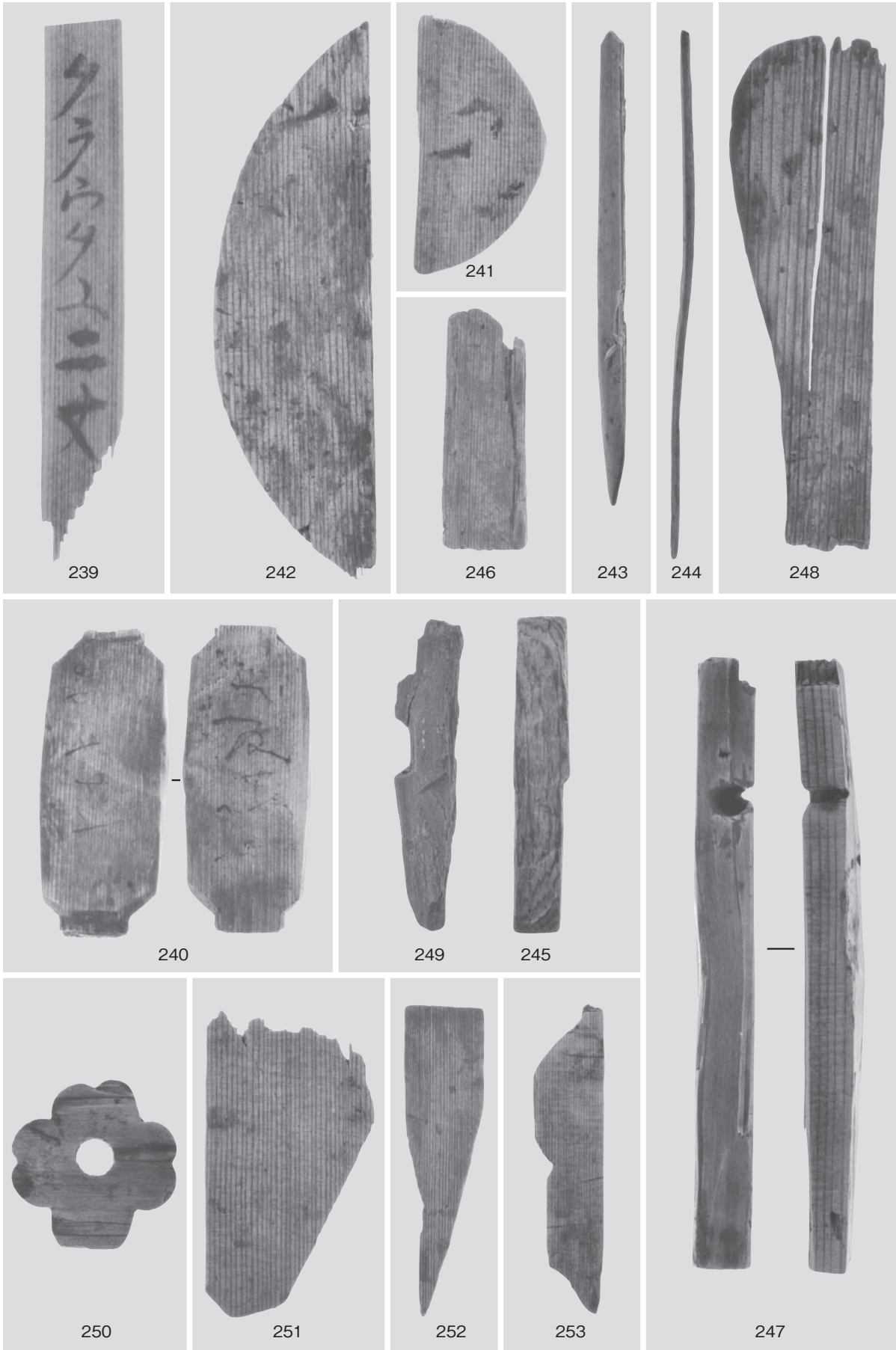


常滑窯産陶器②



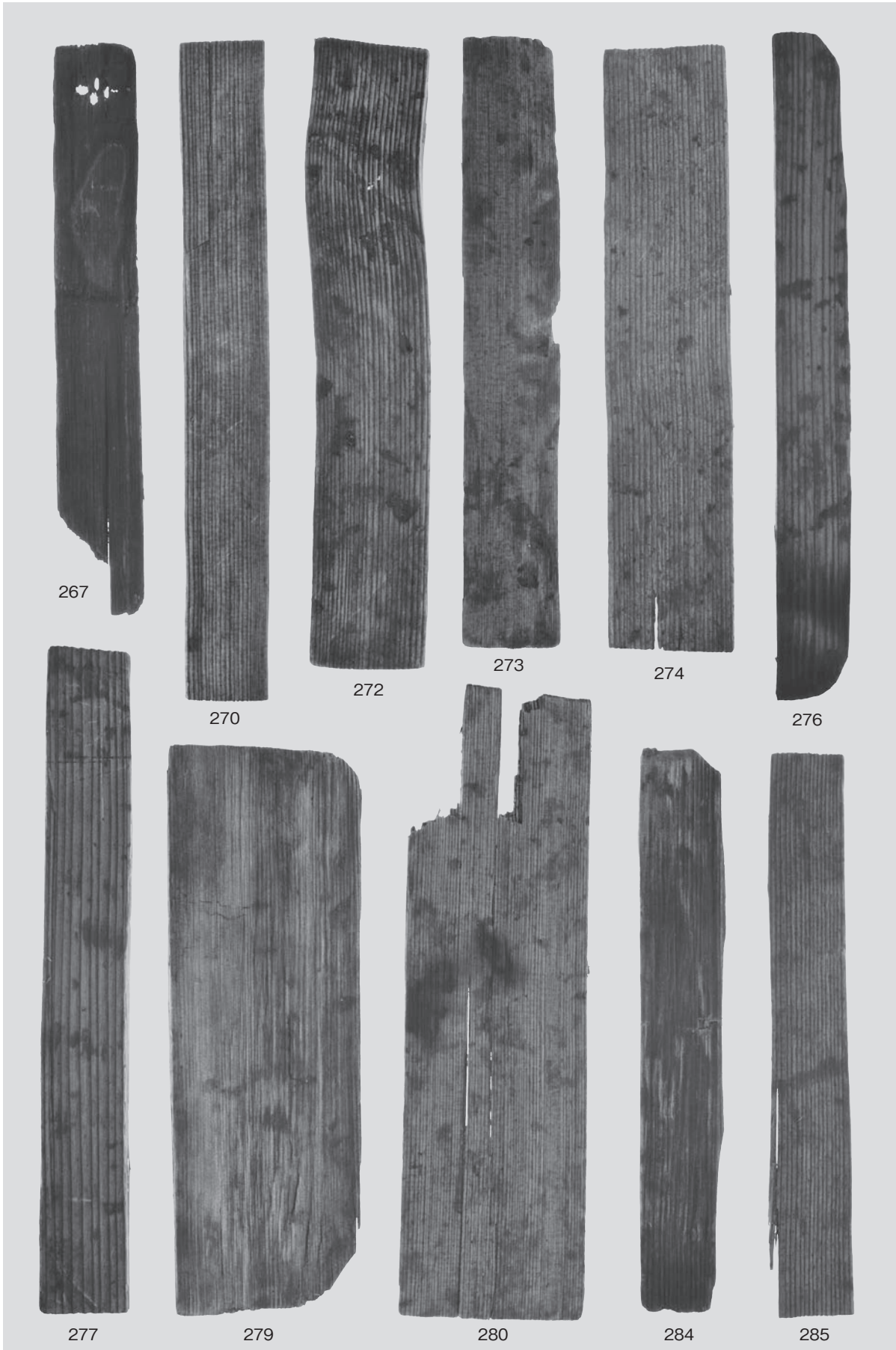
須恵器系陶器・須恵器・輸入陶磁器







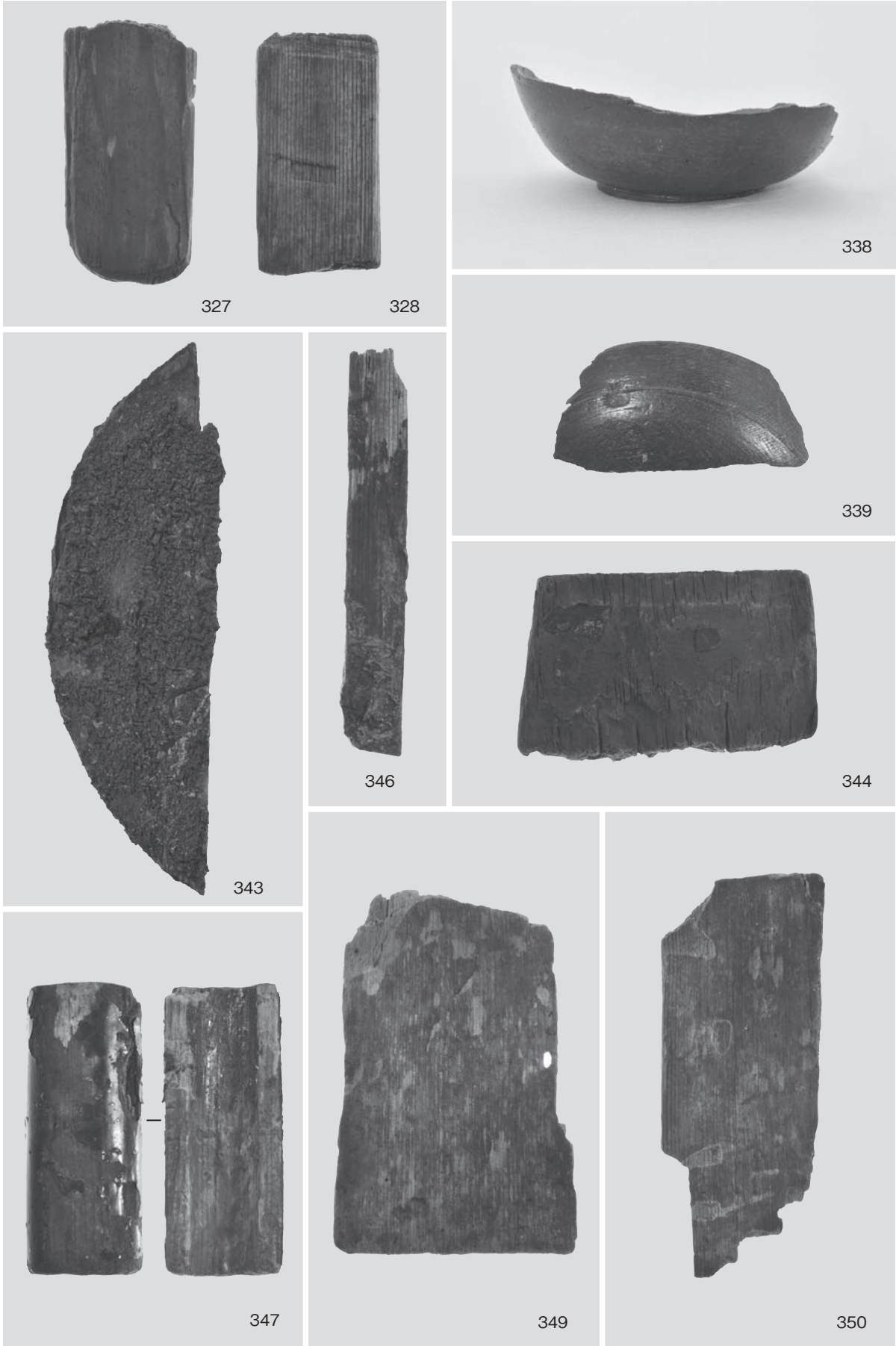
木製品②



木製品③

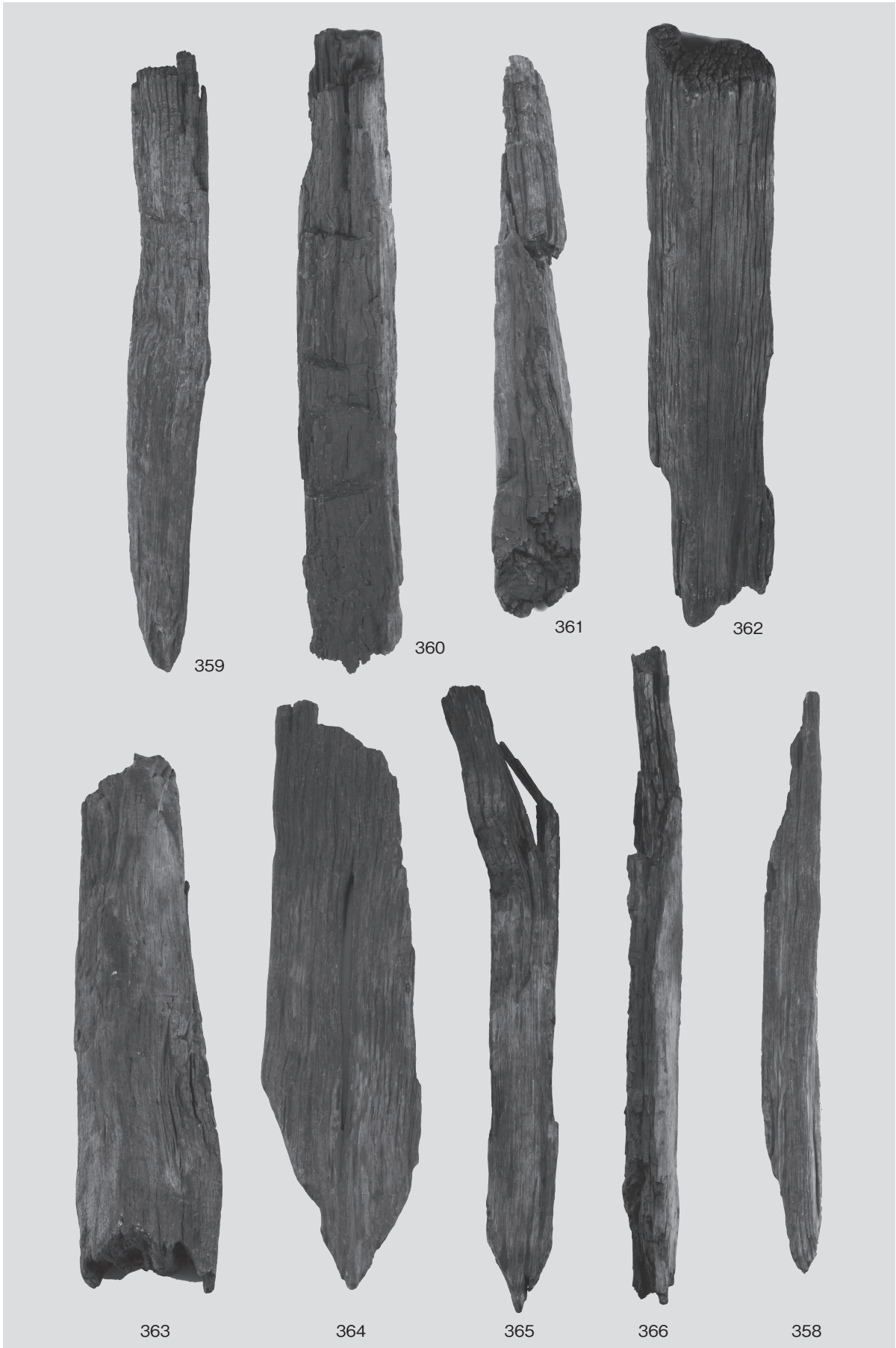


木製品④

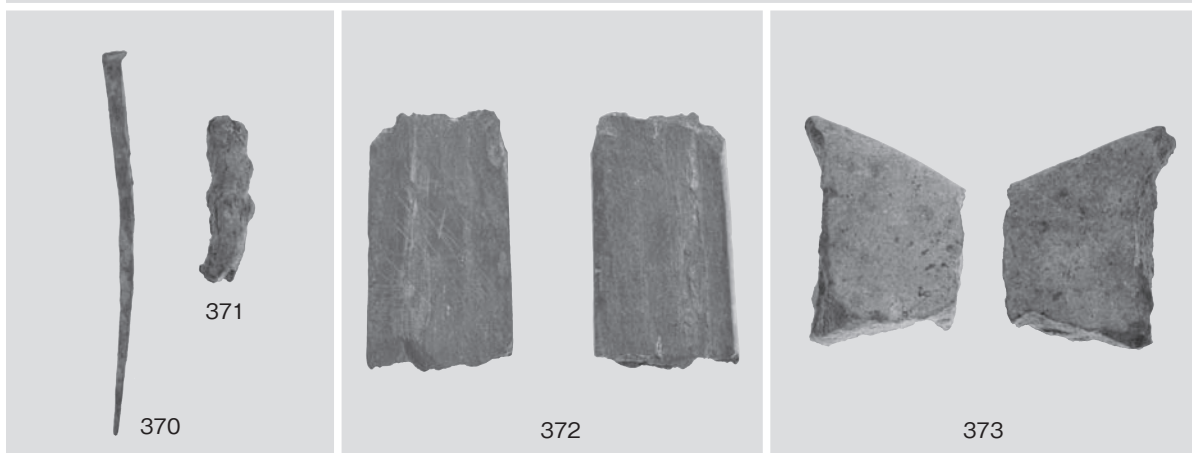
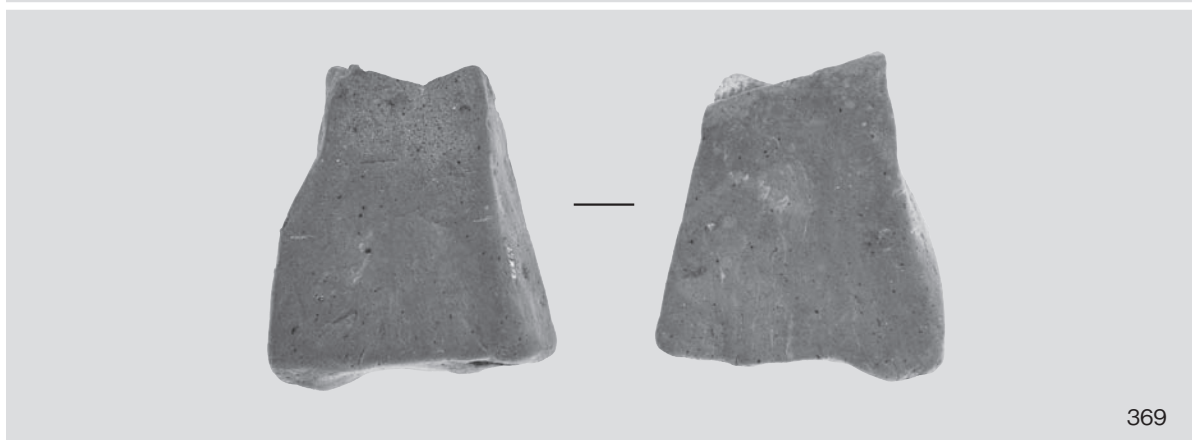
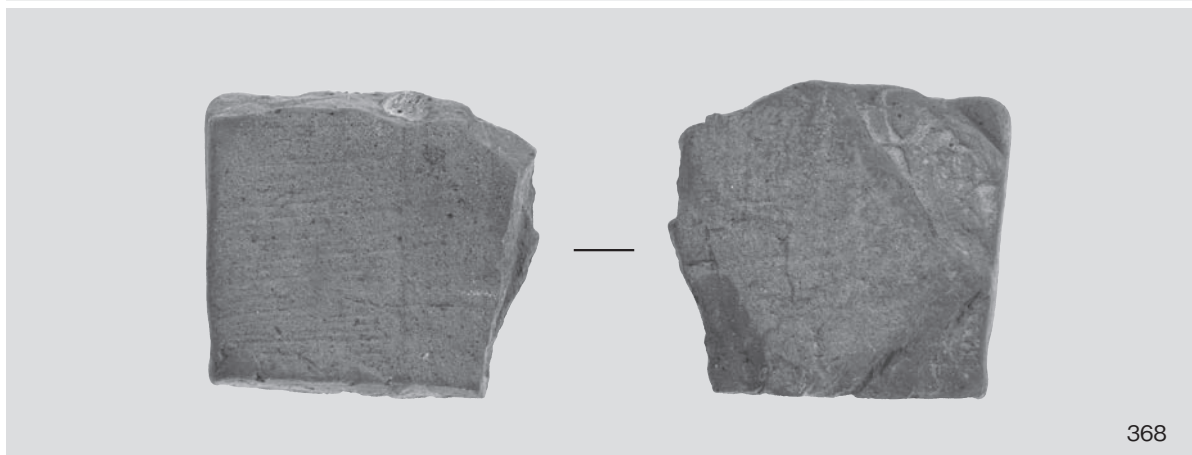




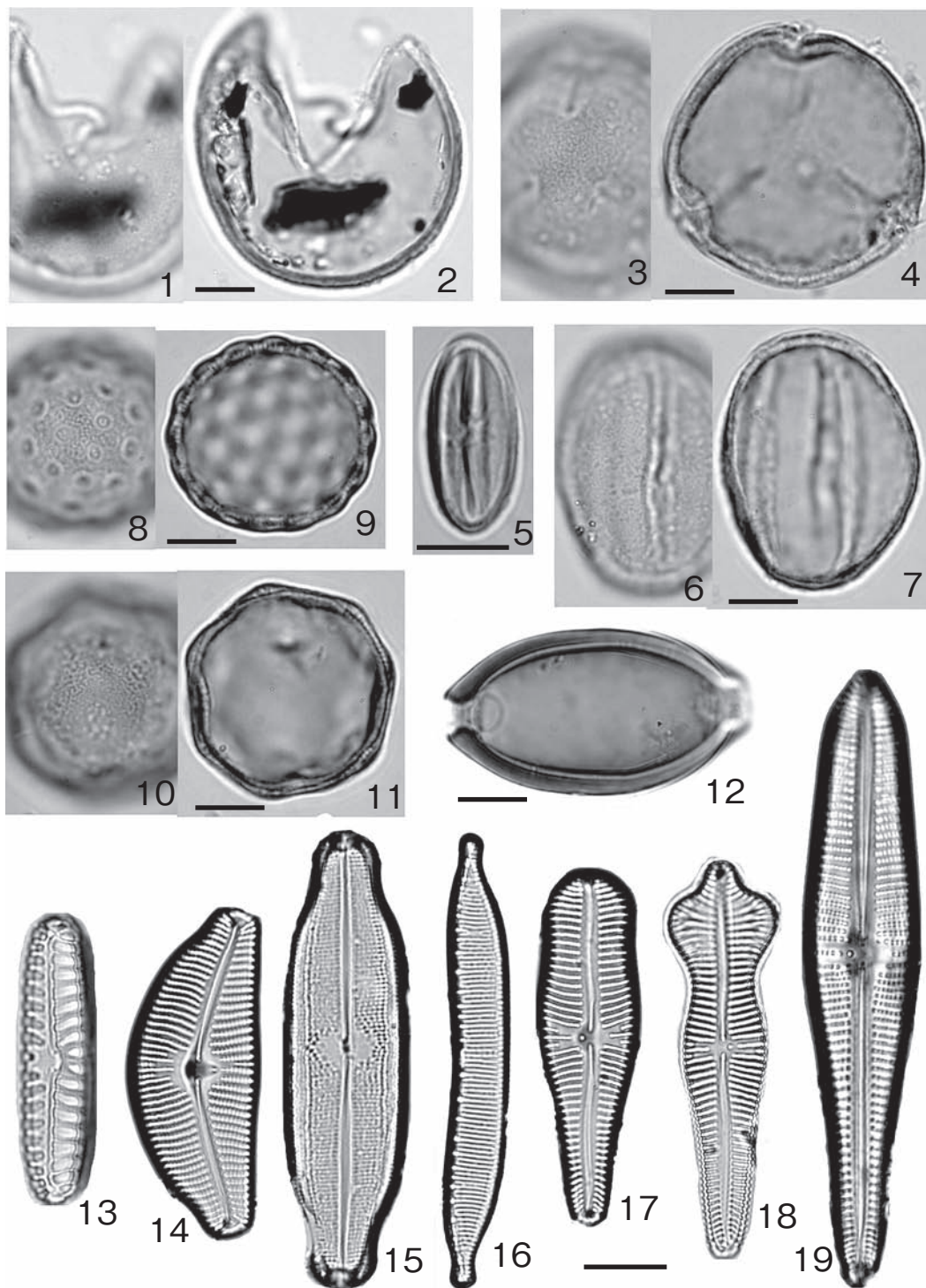
部材①



部材②

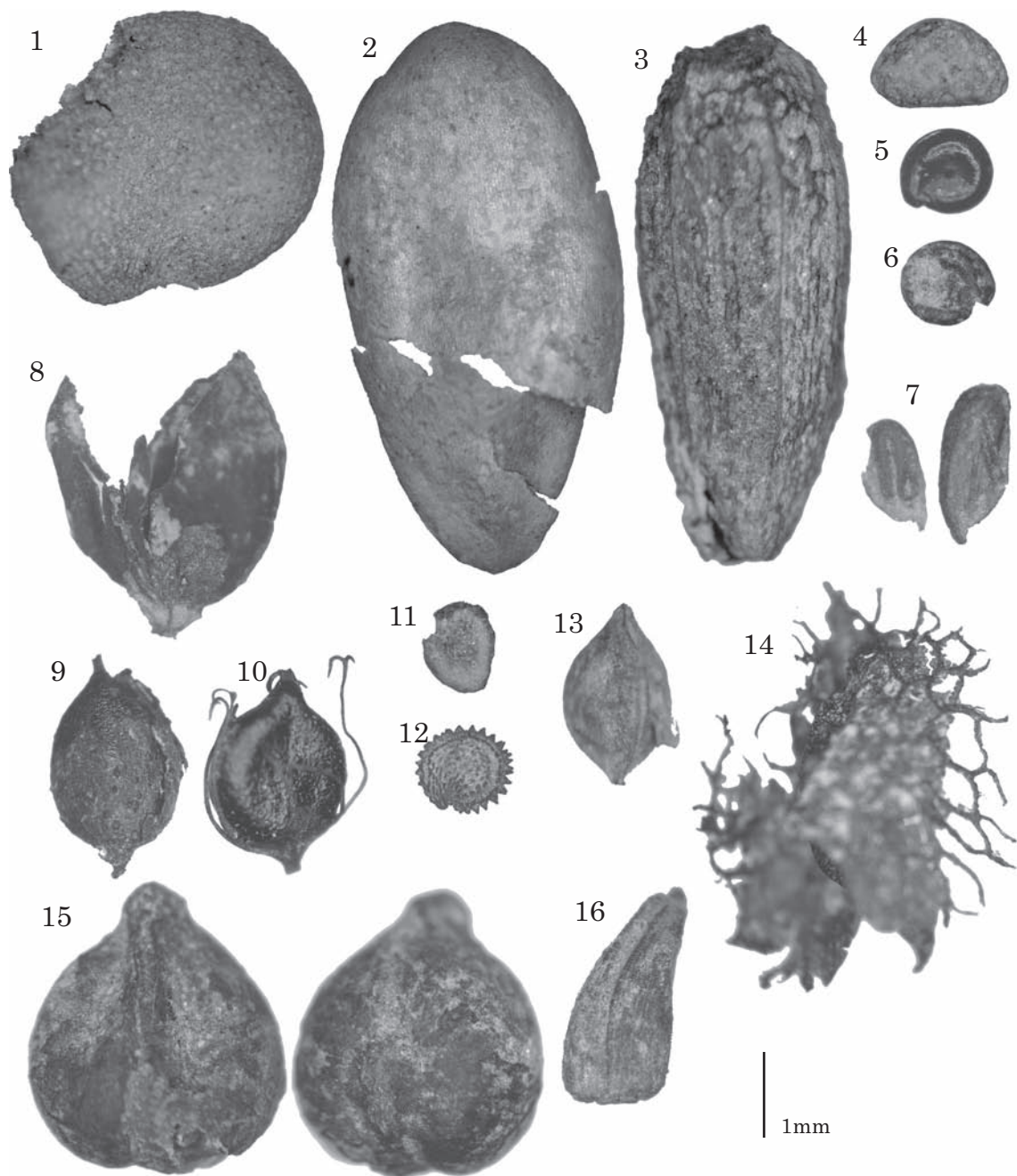






出土した花粉化石と珪藻化石

1-2: スギ (*Cryptomeria japonica*), 10, AFR.MY 1858. 3-4: イヌブナ (*Fagus japonica*), 10, AFR.MY 1866. 5: クリ属 (*Castanea*), 9, AFR.MY 1859. 6-7: コナラ亜属 (*Lepidobalanus*), 10, AFR.MY 1863. 8-9: アカザ科 (*Chenopodiaceae*), 10, AFR.MY 1862. 10-11: サジオモダカ属 (*Alisma*), 10, AFR.MY 1864. 12: 鞭虫卵 (*Trichuris*), 8, AFR.MY 1860. 13: *Pinnularia borealis*, 16. 14: *Cymbella tumida*, 14. 15: *Neidium ampliatum*, 16. 16: *Hantzschia amphioxys*, 16. 17: *Gomphonema truncatum*, 14. 18: *Gomphonema acuminatum*, 14. 19: *Gomphonema augur* var. *turiss*, 16. スケール=10 $\mu$ m.



出土した種実

1.ナス近似種、種子 2.メロン仲間、種子 3.ゴボウ近似種、果実 4.キイチゴ属、核 5.ヒユ属、種子 6.ヒユ属、潰れ種子 7.ヘラオモダカ、果実 8.ミゾソバ、果実 9.ヤナギタデ、果実 10.サナエタデ近似種、果実 11.タガラシ、果実 12.ミドリハコベ近似種、種子 13.ギシギシ属、果実 14.ギシギシ属、花被 15.ブドウ属、種子 16.コメナモミ、果実

## 報告書抄録

ふりがな	ひらいずみいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ やなぎのごしょいせき							
書名	平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡							
副書名	第69次発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第130集							
編著者名	岩渕 計 櫻井友梓 西澤正晴							
編集機関	岩手県教育委員会							
所在地	〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1							
発行年月日	西暦2010年3月29日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やなぎのごしょいせき 柳之御所遺跡	いわてけん 岩手県 にしわいぐん 西磐井郡 ひらいずみちよう 平泉町 ひらいずみあざ 平泉字 やなぎのごしょちない 柳御所地内	03402	NE76-0190	38度 59分 28秒	141度 7分 35秒	2008.5.7 ～ 2008.12.10	2,463㎡	史跡整備に 向けた内容 確認調査
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項	
柳之御所遺跡	居館跡	平安時代	堀跡 大溝跡 橋跡	2条 2条 1基 など	かわらけ 国産陶器 (渥美・常滑など) 中国産陶磁器 (白磁・青白磁・中国陶器) 木製品など	内側の堀 (21SD1) と 外側の堀 (21SD2) と は時期差があることが 推定できることとなっ た。		
要約	遺跡の南端部の調査である。遺跡を囲う2条の堀跡は間に21SX4という溝跡を介することによって21SD2が古く、21SD1の方が新しいことが判明した。また、外側の堀跡(21SD2)は最低2回の改修痕跡が確認できた。そのほか21SX35橋跡の再調査やその遺構付近に広がる整地の確認も行った。							

---

岩手県文化財調査報告書 第130集  
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡  
-第69次発掘調査概報-

印刷日 平成22年 3月29日

発行日 平成22年 3月29日

発行 岩手県教育委員会生涯学習文化課  
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1  
電話(019)629-6171(代表)

印刷 有限会社ジロー印刷企画  
〒020-0066 岩手県盛岡市上田二丁目17-4  
電話(019)651-6644

# Yanaginogosho Site

The 69<sup>th</sup> Excavation Report of the Local Government Office in Hiraizumi of the 12<sup>th</sup> Century



2010

Iwate Board of Education , JAPAN

# 柳之御所遺跡 第69次発掘調査平面図

